

資料

(令和元年十二月)

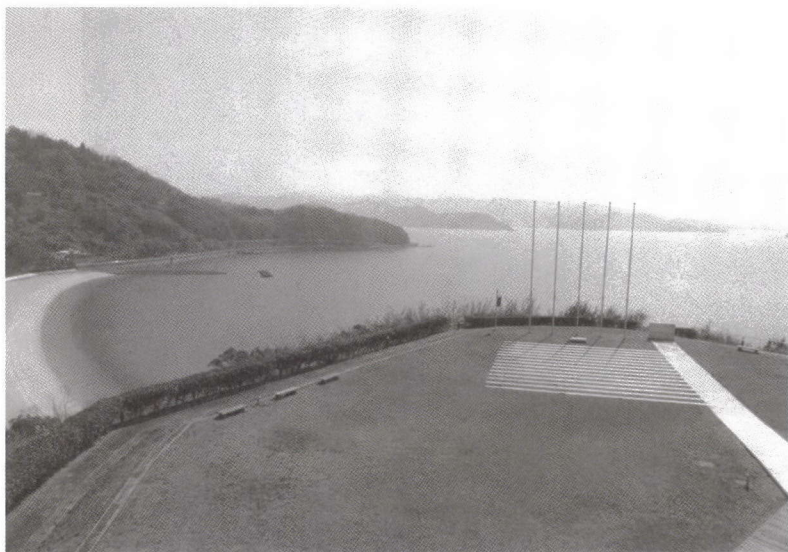
第六十四回「合宿教室」(熊本会場・主会場)感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

公益社団法人

国民文化研究会

第六十四回 「合宿教室」(熊本会場・主会場)全参加者の感想文と短歌詠草



熊本会場

「合宿教室」

と き 令和元年五月二十五日(土) から二十六日(日) まで二泊二日間

ところ 熊本県葦北郡芦北町「県立あしきた青少年の家」

参加総数 四十八名

主会場

「合宿教室」

と き 令和元年八月三十日(金) から九月一日(日) まで二泊三日間

ところ 千葉県柏市「柏生涯学習センター」

参加総数 七十七名



目次

「はしがき」に代へて……………	理事長 今林賢郁	3
大学別参加者数・その他の人数の内訳……………		6
「合宿教室」64年の歩み……………		8
熊本会場 「合宿教室」……………		11
日程表（二泊二日）……………		12
あらまし……………		13
走り書きの「感想文」と「短歌詠草」……………		23
主会場 「合宿教室」……………		51
日程表（二泊三日）……………		52
あらまし……………		53
走り書きの「感想文」と第二回目の「短歌詠草」……………		65
合宿中に創作された「短歌詠草」……………		105
あとがき……………		116
カメラ・レポート31枚（25〜49の奇数ページ、 67〜101の奇数ページに掲載）……………		

“はしがき”に代へて

公益社団法人 国民文化研究会 理事長

今 林 賢 郁

御代替りに伴ふ皇位継承儀礼の大典、即位礼正殿の儀令和元年十月二十二日及び大嘗祭（同十一月十四日夜〜十五日未明）も滞りなく執り行はれ、名実共に令和の御代が始まったとの思ひが胸をよぎります。

先帝陛下は即位以来、象徴天皇としてのあるべき姿を模索し続けられ、国民はそのお姿を仰ぎ見て敬愛と感謝の念を捧げてきました。今上陛下もまた先帝陛下を仰がれ、「即位後朝見の儀」（令和元年五月一日）では、「皇位を継承するに当たり、上皇陛下のこれまでの歩みに深く思いを致し、また歴代の天皇のなさりようを心にとどめ、自己の研鑽に励むとともに、常に国民を思い、国民に寄り添いながら」とのお言葉がありました。又、「即位礼正殿の儀」においては、「上皇陛下が三十年以上にわたる御在位の間、常に国民の幸せと世界の平和を願われ、いかなる時も国民と苦勞を共にされながら、その御心を御自身のお姿でお示しになってきたことに、改めて深く思いを致し」と述べられて、御自らのお心を「ここに、国民の幸せと世界の平和を常に願い、国民に寄り添いながら、憲法にのっとり、日本国及び日本国民統合の象徴としてのつとめを果たすことを誓います」と皇位を継承する覚悟を内外に宣明されました。今上陛下は先帝陛下のお心を承け継がれ、これからの歩みのなかで、ご自身の「国民を思ひ、国民に寄り添ふ」姿を築かれていくことでせう。それでは、天皇の国民への慈愛と信頼にわれわれはどのやうにお応へしていけばいいのか。人それぞれに思ひはあ

るでせうが、何はともあれ、この問ひかけをひとり一人が忘れないやうに心がけること―その積み重ねがあつてこそ、わが国の国柄

である天皇と国民との間の「信頼と敬愛」を国民の側から支へていくことができるのではないでせうか。

当会の「全国学生青年合宿教室」の第一回が開催されたのは昭和三十一年のことでした。この年は先の大戦後、六年八ヶ月に及ぶ占領が終はり、昭和二十七年四月の講和条約発効（主権回復）から四年後でした。当時のわが国といへば日本弱体化を狙った占領政策の余波が、教育界、労働界、学界、マスコミなど社会全般に広く浸透し、自国の歴史、伝統を蔑視、唾棄することにはささかの痛みを覚えないどころか、その時代風潮に迎合する知識人の言論が持て囃された時代でした。この状況を放置すれば日本の将来はまことに危ふい、二千年以上に及ぶ長く連続した歴史に恵まれ、情操豊かで自立心と気概に富む国民がつくりあげてきた国日本、その祖国が危機の只中にあるのを傍観することはできない、次代を担ふ学生、青年たちが自国の歴史を正しく知り、国際社会で堂々と対応できる日本人になって欲しい、そのためにかれらに研鑽の場を提供したい―このやうな思ひで第一回の合宿教室が開催され、以降毎年実施されては今年で第六十四回を迎えました。

わが国を取り巻く内外の状況はこの数年来まことに厳しく、ことに安全保障面では戦後最大の危機に直面してゐると言つても過言ではありません。われわれは未だに続く占領後遺症から一刻も早く抜け出し、自国への矜持と独立の気概を取り戻さなければなりません。このことを念頭に置きながら今年の合宿教室は、「熊本会場」（熊本県「あしきた青少年の家」令和元年五月二十五日～二十六日）及び「主会場」（千葉県「モラロジー研究所・柏生涯学習センター」令和元年八月三十日～九月一日）の二箇所で開催致しました。「熊本会場」では、当会会員による二つの講義が行われました。伊勢雅臣氏「グローバル時代に日本人としていかに生きるべきか?」、小柳左門氏「世界に誇るべき日本の国柄」です。（二つの講義概要は14頁～15頁、19頁～21頁をご覧下さい）。「主会場」には外来講師として、日本政策研究センター代表 伊藤哲夫先生をお招きし、「われらにとって国家とは何か―『令和の時代』を迎えてわが日本国家を考える―」との演題でご講義をいただきました。《国家とは歴史基盤があつてこそ国家なのであつて、歴史を否定してしまふと国家では

なくなる。占領軍起草の日本国憲法は、「社会契約説」で国家の成り立ちを説明したものであり、歴史・共同体といふ觀念なき「個人」を「価値の中核」とした憲法理論で、日本の歴史は一切視野の外におかれたのである」と指摘されて、『わが国は「歴史喪失」の戦後から「歴史回復」の新たな日本へと生まれ変わらなければならない』と強く参加者に語りかけられました。講義概要は53頁〜54頁を（覧下さい）。

この他に、会員による三つの講義が行われました。山内健生氏『いま』を生きる者の使命―過去・現在・未来―、西山八郎氏「聖徳太子に学ぶ日本人の心―維摩経義疏にふれて―」、大岡 弘氏「日本の国柄と皇室祭祀」の三つです。三つの講義概要は55頁〜56頁、57頁、60頁を（覧下さい）。

この「合宿教室」の特色である、歴史に残されたすぐれた短歌を読み味はひ、参加者全員が少なくとも一首の歌をつくり、自分が詠んだ歌を他の参加者と相互に批評し合ふことを「主会場」の参加者は経験しました。「熊本会場」では講話「短歌創作の手引き」に基づいて短歌をつくり、感想文に添へて提出しました。かうして、主催者と参加者が心をひとつにしてテーマに取り組んだ結果、参加者の心の中に自分が日本人であることの自覚や自国の現状と克服すべき課題などが次第に感じ取られていったやうに思はれません。

この「感想文集」は合宿最後の帰り際に「走り書き」で書かれたもので、充分意を尽くしたものではありませんが、懸命に取り組んだ日程最終日の率直な思ひを書き留めてくれたものです。ご一読戴ければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、この合宿教室を実施するにあたり、今年もまた、各界からお寄せいただいたご支援に対し、会員一同に替り心から厚く御礼申し上げます。



第 64 回全国学生青年合宿教室（熊本会場）（令和元年 5 月 25 日～26 日）
於「熊本県立あしきた青少年の家」

参加者

（学生）（算用数字は参加学生数）

熊本大学 2

計 二名（うち女子二名）

（社会人参加者）二十五名（うち女子二名）

（国民文化研究会）二十一名

総計 四十八名



第 64 回全国学生青年合宿教室 (主会場) (令和元年 8 月 30 日～9 月 1 日)
於「モロロジー研究所・柏生涯学習センター」

参加者

(学生班) (算用数字は参加学生数)

國學院大學栃木短期大学 1 早稲田大学 2

奈良大学 1 福岡教育大学 2 九州共立大学 1

九州工業大学 1 中村学園大学 2

佐賀大学 1 長崎大学 2

計 十三名 (うち女子三名)

(社会人参加者) 九名 (うち女子三名)

(招聘講師) 一名

(国民文化研究会) 五十三名

(事務局) 一名

総計 七十七名

— 「合宿教室」64年の歩み —

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・瀬下安正・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野 晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下 彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山 優・野口恒樹
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡 潔・花見達二・木内信胤
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川 尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林 房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡 潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松 剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡 蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松 剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松 剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤 忠・村松 剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤 忠・黛 敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤 忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤 淳・村松 剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木 一・關 正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島 襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松 剛・山田輝彦・國武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛 敏郎・小柳陽太郎・古部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・坂東一男・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松 剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松 剛・佐伯彰一・白濱 裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村聰一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	徳岡孝夫・小堀桂一郎・志賀建一郎
44	〃 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿 蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
46	〃 13年	富 士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・今林賢郁
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・小柳陽太郎・名越二荒之助
48	〃 15年	富 士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃 16年	阿 蘇	169	中西輝政・小田村四郎・石村善悟
50	〃 17年	伊 勢	219	長谷川三千子・松浦光修・山内健生
51	〃 18年	霧 島	191	井尻千男・占部賢志・山内健生
52	〃 19年	奈 良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	〃 20年	伊 勢	150	伊藤哲夫・占部賢志・岸本 弘
54	〃 21年	厚 木	160	長谷川三千子・ペマギヤルボ・占部賢志
55	〃 22年	阿 蘇	151	中西輝政・志賀建一郎・國武忠彦
56	〃 23年	江田島	141	小堀桂一郎・山内健生・廣木 寧
57	〃 24年	阿 蘇	152	竹田恒泰・小柳志乃夫・今林賢郁
58	〃 25年	厚 木	142	伊藤哲夫・國武忠彦・山口秀範
59	〃 26年	淡 路	108	中西輝政・小柳左門・岸本 弘
60	〃 27年	富 士	115	長谷川三千子・小柳志乃夫・國武忠彦
61	〃 28年	福 岡	74	今林賢郁・山口秀範・廣木 寧
		富 士	69	石 平・今林賢郁・伊藤哲朗
62	〃 29年	福 岡	83	山内健生・小柳左門・内海勝彦
63	〃 30 年	福 岡	53	折田豊生・廣木 寧・與島誠央
		富 士	63	江崎道朗・國武忠彦・青山直幸
64	令和元年	熊本	48	今村武人・伊勢雅臣・小柳左門
		柏	77	伊藤哲夫・山内健生・大岡 弘
累計・参加人数				15, 283名

「合宿教室」
熊本会場



あしきた合宿研修日程表

月/日	時刻	事項	備考
5/25 (土)	09:30	受付開始(～10:20)	ロビー(現地案内表示参照)
	10:30	開会式(本館 大研修室)	司会: 河崎
		オリエンテーション	開会挨拶: 国民文化研究会事務局長 磯貝保博 合宿研修運営委員長 藪田誠一 諸注意: 合宿研修運営本部 久保田 真
	10:50	講話1: 国民文化研究会 今村武人氏	短歌創作のてびき 司会: 河崎
	12:00	昼食	
	13:00	講義Ⅰ: 伊勢雅臣先生(～14:30)	司会: 白濱
	14:40	記念写真撮影	
	14:50	班別研修(各宿泊室)(～16:50)	講義内容の確認・意見交換
	17:00	入浴・夕食	夕食は17:30～
	19:00	挨拶 芦北町役場 講話2: 肥後の偉人顕彰会 外口榮一氏 講話3: 知道会 牧 俊郎氏 講話4: 拉致被害者を救う会 布田 悟氏	大研修室 司会: 折田
	20:30	意見交換会(～21:30)	
	22:00	就寝	
5/26 (日)	06:30	起床・洗面	7:00 朝の集い(広場)
	07:30	朝食	
	09:00	講義Ⅱ: 小柳左門先生(～10:30)	司会: 吉村
	10:40	班別研修(各宿泊室)(～11:50)	講義内容の確認・意見交換
	12:00	昼食	
	13:00	感想文執筆(本館 大研修室)	
	13:40	閉会式 挨拶: 白濱 裕	司会: 福田

第六十四回「合宿教室」(熊本会場)のあらまし

第一日目

(五月二十五日・土曜日)

第六十四回全国学生青年合宿教室《熊本会場》は、令和元年五月二十五日から二十六日まで、九州全域を対象として、熊本県立あしきた青少年の家において学生、社会人四十八名の参加を得て開催された。

初日に伊勢雅臣氏による講義と四人の講師による講話、翌日、小柳左門氏による講義が行われた。各講義の後には班別研修が、講話の後には意見交換会が設けられ活発な論議が交はされた。短歌は、休憩時間を利用して創作された。

一泊二日の短期間ながら密度の濃い合宿研修となった。

開会式

東京から馳せ参じた磯貝保博氏(本会事務局長)は、主催者代表挨拶で、「本会の研修の特徴である班別による宿泊研修の特異性を十分に活かして交流を深め、日本について大いに学んでほしい」と語りかけた。また、地元小学校の校長を勤める蓑田誠一氏(本会会員・あしきた合宿研修「運営委員長」)は、年齢差を超える「人と人との横の繋がり」、「歴史を貫く縦の繋がり」を意識しながら研修に臨んでほしいと語った。

講話1 「短歌創作のてびき」

熊本県立第二高等学校教諭 今村 武 人 氏

短歌の心は永遠に残る。だから、私達は万葉集や古今和歌集等を通して、今も古代の人達の心情を知ることができる。日本人



は、古来、人と人の繋がりを大切にしてきた。その表れの一つが短歌である。その短歌を最も大切に守ってこられたのが皇室であり、歴代の天皇方はたくさんの短歌（御製）を残してこられた。短歌は日本人にとってなくてはならない文化であり、伝統なのである。短歌は理屈を詠まない。誰かにメッセージを送るやうに、そこに映る真心を写生するやうに詠む。だからこそ、そこに感動が生まれる。

短歌は詠む人の心に映る五感が大事であり、五感を大事にするからこそ、日本人の瑞々しい心を取り戻すことができる。短歌を創るルールは、少しも難しくない。自分の思ひを五七五七七（三十一文字）の韻律に乗せて、一文になるやうに詠めばいい。

古代より祈りを込め、思ひを込めて詠まれてきた短歌、その日本固有の伝統文化をこれからも大切にしていきたいものである。

講義Ⅰ 「グローバル時代に日本人としていかに生きるべきか？」

「国際派日本人養成講座」編集長 伊勢 雅臣 氏



現代は好むと好まざるとにかかはらず海外とやり取りをしなければならぬ時代である。文化も言語も価値観も違ふ人々との交流は「以心伝心」でやり取りすることは難しく、自分自身の考へ方、感じ方を言葉で正確に表現する必要がある。

「川を上り、海を渡れ」といふ言葉がある。これは、自国の歴史を知り、海外に広く目を向けよといふ意味である。自国の歴史や文化を知ると他国の文化や歴史に興味を持つやうになる。自国の歴史を正しく知っておくことは海外の人々とコミュニケーションを取る上で非常に重要であり、国際派日本人となるために歴史の素養が必要不可欠である。

今月、元号が改められたが、「令和」の「令」とは「礼冠をつけて、跪ひざまづいて神意を聞く人の意」と字通（漢和辞典）にある。また、「和」は「声符は禾（か）。籥（やく）は笛。楽音のととのふことをいふ」とある。つまり令和とは「神意の適った美しい和」
Ⅱ「大いなる和の国」といふ意味になる。大いなる和の国、つまり大和の国を肇められたのは神武天皇であるが、一万年以上も続いた縄文の和の文明をもって国を肇められたのである。

縄文時代の大きな特徴は、遺跡から戦争の武器が出土しないことである。しかし、弥生時代になり、水稻農作が広まると人々は武器を手に取り争ひをはじめた。そこで神武天皇は宮崎から奈良へ東征され、天皇として御即位になり、次のやうな詔を出される。

「大和の国の礎をしっかりとしたものにすむやうお互ひに豊かな心を養はう。人々がみな幸せに暮らせるやうに努めよう。天地四方に住む者全てが一つ屋根の下の大家族のやうに仲良く暮らさう」

この詔から神武天皇がいかに和の心を大切にされてゐたかが分る。この和の心は歴代天皇をはじめ、多くの先人達が大切にしてきた。

しかし今、その和の国を守れるかどうかの瀬戸際に来てゐる。マスコミは連日謀略報道を繰り返し、子供達が犠牲になる事件が多発し、社会から寛容さが失はれつつある。「和」は皆が同じことをすることではない。自分の得意分野や個性、長所を活かして国に尽くすことである。

「二灯照隅 萬灯照國」といふ言葉がある。一つのろうそくでも万の灯火が集まれば国を照らすことができるといふ意味である。時代がどのやうに移り変らうとも縄文時代の頃のやうに和の心を大切にして皆で国を照らしていくこと、それがグローバル時代になっても変らない日本人の生き方なのではないだらうか。

講義、記念撮影終了後、内容を確実に把握し、理解を深めるための班別研修が行はれ、休憩時間においても時を惜しんで意見交換が行はれた。この班別研修は、以後の各講義・講話の後にも行はれた。緊張のせみか始めのうちは意見も少なく発言も限ら

れてみたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、班員相互の交流が深められていった。

講話2 「令和にこそ取り戻そう あなたのの中に眠る大和魂（大和心）」

肥後の偉人を顕彰する会会長

外 口 榮 一 氏



古今、偉人と呼ばれる人は皆、大和魂を發揮してきた。大和魂とは神代から続く日本人の精神、日本人の心に本来備はつてゐる感性性である。

戦前、アメリカで生れ育ち、アメリカ陸軍で戦闘訓練を受けた日系二世の兵士達にも大和魂は生きてゐた。アメリカ陸軍の日系部隊である四四二部隊にダニエル・イノウエといふ人がゐた。アメリカに忠誠を誓ふために四四二部隊に志願することを決めたダニエル・イノウエは父にそのことを話すと、父は「井上家はアメリカから大きな恩を受けてゐる。今こそ恩返しする時である。お前は母親にとつても、わたしにとつても大事な長男だ。しかし、やらなければならぬことはやらなくてはならない。たとへそれが死を意味しても、井上家の家名に恥を塗るやうなことは決してするな」と言はれた。

父はダニエル・イノウエが幼い頃から常に「義務」「名譽」「恥」「誇り」「大和魂」について教へてゐた。ダニエル・イノウエも父から教はつたその言葉を常に胸に抱いて生きてゐた。そのためか、激戦地で右腕を吹き飛ばされても勇猛果敢に戦ひ、「まるで日本人のやうだ」と周囲から讃へられた。

復員後、ダニエル・イノウエはアメリカ初の日系人議員となり、アメリカと日系人のために尽力する。二〇一二年十二月十七日、八十八歳で人生に幕を下ろしたダニエル・イノウエに当時の大統領・オバマは「真の英雄を失つた。彼が示した勇氣は万人の尊敬を集めた」と称賛した。

戦後、大和魂に恐れをなしたアメリカの占領政策によつて日本人は大和魂を奪はれてしまった。大和魂が軍国主義をもたらし、

侵略戦争を扇動した元凶であるといふのである。戦争に負けて自信をなくした日本人はその主張を受け入れ、最近でも大和魂を口にすれば冷ややかに見られることもある。だが、大和魂は私達の心の奥に常に存在してゐる。平成は自然災害の多い時代だったが、その災害に負けず、互ひに助け合ひ一致団結して困難に立ち向つたその姿勢こそが大和魂なのである。

アメリカのジョージ・ウエスト博士は次のやうに言つた。

「アメリカの占領政策でアメリカの教育哲学が日本に持ち込まれたことが、教育の荒廃をもたらした。個人尊重と称して子供を甘やかし、学校も親も道徳教育への自信を喪失した。それは、日米共に同じである。教育の再建の為にアメリカは開拓精神に還り、日本は教育勅語を復活させねばならない。日本人は失つた魂を取り戻すべきである」

偉人と言はれる人は、有名無名を問はず、日本民族であるとないつに聞らず、皆、大和魂(大和心)を持つてゐる。私達自身が自らの中に在るその価値に気づき、それを取り戻していかねばならないのではないだらうか。

講話3 「外野から見た地域の高校」

知道会(元 菊池市長)

牧 俊 郎 氏



熊本県内は中学校だけでなく、高校もどんどん閉校してゐる。球磨郡の熊本県立多良木高校は今年の三月に閉校したが、私が住む菊池市にも母校が閉校してしまつたといふ人がたくさんゐる。山都町の矢部高校は数年前までは生徒が六百人以上ゐたが、現在は百四十人ほどになつてしまつて閉校の危機にあり、阿蘇郡の高森高校も似たやうな状況となつた。

以前、鹿児島県伊佐市では、地元の大口高校から東京大学や九州大学に合格したら最大百万円の報奨金を支給するとして批難を浴びたが、地域活性化のためには教育インフラが必要であり、その中でも高校が不可欠だといふ信念のもと、市長が報奨金の支給を決定した。その結果、東京大学や九州大学などの難関大学への合格者は増え、

地元高校に進学を希望する中学生が急増した。

良い教育を行へば噂が噂を呼ぶ。良い教育を循環させることで人口が増え、地域が活性化する。人口対策、地域の振興を考えた時に教育の振興こそが一番の対策になる。

菊池市は文教の町、昔から勉学に切磋琢磨するDNAがある。そのDNAを活かすこと、伝統を活かすことを考へなければならぬ。教育を通して町の活性化をどう図っていくか、これこそが地方の重要な課題であらう。

講話4 「拉致問題の現状」

北朝鮮による拉致被害者を救出する熊本会長 布田 悟氏



警察庁は「北朝鮮による拉致の可能性を排除できない行方不明者（特定失踪者）」は八百八十三名あると発表してある。政府が北朝鮮による拉致被害者として認定したのは十七名で、そのうち五名は帰国を果たしたが、まだ帰国されておられない十二名を合せると約九百名が依然拉致されたままといふのが現状である。昭和五十二年（一九七七）十一月に失踪した横田めぐみさん（当時十三歳）が北朝鮮に拉致されたと判明したのは二十年後の平成九年二月であった。御両親の悲嘆はいかばかりであったらうか。以後、娘を返してほしいと二十年以上に亘り日本全国を巡って訴へ続けてをられる。横田めぐみさんの御両親だけでなく、北朝鮮に家族を拉致された方々は今も救出を訴へ続けてある。

しかし、拉致問題は未だ解決されず、その間に家族の方々は高齢化してしまひ、我が子が帰国する前に無念の想ひを残して他界されてしまふ方も出てきた。拉致問題はもう時間がないのである。

私は、菊陽町出身で、熊本の拉致被害者である松木薫さんの姉・斎藤文代さんが菊陽町にお住ひだったことがきっかけでブルーリボン運動に取り組むやうになった。また、教育現場や行政においても拉致問題について取り組んでほしいといふ思ひで菊陽

町議にもなった。拉致問題解決のためには国民の大きな声が必要である。一日も早く拉致問題を解決するため、多くの皆様の御理解と御協力をお願いしたい。

第二日目

(五月二十六日・日曜日)

講義Ⅱ 「世界に誇るべき日本の国柄」

社会医療法人原土井病院院長

小柳 左門氏



令和の御代を迎へ、即位後朝見の儀において新帝陛下がお言葉を述べられた。そのお言葉には上皇陛下への尊敬と御即位への決意が込められてゐた。新帝陛下はそのお言葉の中で、「歴代の天皇のなさりやうを心にとどめ、自己の研鑽に励むとともに、常に国民を思ひ、国民に寄り添ひながら」と仰せられてゐる。そこに、新帝陛下の御決意が偲ばれるが、実は、これは歴代の天皇方に共通する御姿勢なのである。

日本の長い歴史の中で大変な時代は幾つもあった。土御門天皇の頃はお金がなく、四十九日間葬儀が挙げられなかった。後柏原天皇の時も同様で二十年間即位の礼を挙げる事ができなかった。後奈良天皇も十年間即位の礼を挙げられなかったが、飢饉や疫病が流行し、それによって苦しむ国民を見て心をお痛めになられた天皇は、紺の生地に金文字で般若心経を書かれ、「この般若心経が妙薬にならんことを」といふ思ひを込めて全国の一の宮に奉納された。国民のため般若心経を奉納することは嵯峨天皇の頃から行はれてゐたが、このやうな歴代天皇のなさりやうを新帝陛下は常に心におとどめになってゐるのである。

現在の皇室のお世継ぎ問題も深刻であるが、光格天皇の頃もさうだった。光格天皇は傍系の閑院宮家から見出され幼少であられたので、天皇になる教育を受けてをられなかった。そこで、後桜町天皇が教育係となってお育てになった。後年、光格天皇が

後桜町上皇に宛てて書かれた書簡には、「天下万民をのみ慈悲仁恵に存じ候事、人君なる物の第一の教へ」とあり、そのみ教へを受けたことに絶大なる感謝の言葉が記されてゐた。

身のかひはなにを祈らず朝な夕な民やすかれとおもふばかりを

光格天皇に限らず、歴代天皇は、歌を詠むことによつて絶えず御自身の心を省みられ、国に災ひが起れば民を護ることを神々にお祈りになる。国民の平安をお祈りになるのが、天皇の一番のお務めであり、明治維新の御宸翰にも見られるやうに、歴代天皇は、常に、国民と一体となつてこの国の安全と繁栄を維持していくことを願はれ、それが叶はないときは御自身にその罪があるとお思ひになるのである。

それは昭和天皇も同じであつた。戦後、占領軍総司令官マッカーサーは、最初、天皇に対して横柄な態度を取つてゐたが、会談後、丁重に天皇を玄關まで見送り、後に、「天皇は世界最高の君主である。かつてこのやうな君主はゐなかつた」とコメントしてゐる。

昭和天皇のお人柄は様々な資料で垣間見ることが出来る。昭和天皇の侍従次長であつた木下道雄氏の『宮中見聞録』には、「天下の分列行進」など、感動的な逸話が数多く記されてゐる。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

戦後、昭和天皇は、敗戦によつて打ちひしがれた国民を多くの御製によつて、また、全国御巡幸によつて励まされた。この昭和天皇の御姿勢は、上皇陛下に受け継がれてゐる。

大嘗祭

父君のにひなめまつりしのびつつ我がおほにへのまつり行なふ

サイパン島訪問

あまたなる命の失せし崖の下海深くして青く澄みたり

沖縄県訪問

あまたなる人ら集ひてちやうちんを共にふりあふ沖繩の夜

内外の行幸啓に伴ふ御製と御歌は、何れも感動と涙なくして読むことはできない。天皇の御心情は、御製を丁寧に拝読すればよく分かるのである。

歴代天皇の「なさりやう」は、もちろん、新帝陛下にも受け継がれてゐる。

次は、平成二十九年の歌会始の折、「野」をテーマに新帝陛下が皇太子時代にお詠みになった御歌である。岩かげにしたたり落つる山の水大河となりて野を流れゆく

新帝陛下は早くから水問題を大切に思はれ、世界水フォーラムの名誉総裁を務めてをられる。一滴の水が大河となつていくことを詠まれたこの御歌には、水のこと、国民のこと、全てが込められてゐる壮大な御歌である。

令和は決して優しい時代ではないかもしれないが、陛下は国民とともに力強く生きていかれるであらう。皇室、国民、国家の安泰を心から願ふ。

閉会式

主催者を代表して挨拶に立った白濱裕氏（本会参与、元県立高校校長）は、この「あしきた合宿研修」《熊本会場》に続いて、八月三十日から九月一日まで柏生涯学習センター（千葉県）で開催される全国学生青年合宿教室《主会場》を紹介しながら、「世界における日本のあり方を考える」「わが国の歴史と文化をより深く理解する」「短歌や古典を通じて豊かな感性を育む」といふ合宿教室の三つの研修テーマに沿つて本研修の講義・講話を感想を交へて振り返り、「短い期間ではあったが随分長く感じられるほどの内容が詰まったもので所期の成果が得られた」と所感を述べ、「研修後も、家族や友人にそれぞれの思ひを伝へ日本の文化伝統の精髓を後世に繋ぐ努力をしてほしい」と訴へた。

合宿運営

【本部】

運営委員長

八代市

熊本市

熊本市

熊本市

熊本市

熊本市

箕田 誠一

白濱 裕

久保田 真

河崎由紀夫

永田 誠

吉村 浩之

【事務局】

事務局長

国民文化研究会事務局長

菊陽町

益城町

磯貝 保博

福田 誠

折田 豊生

走り書きの感想文

これは閉会聞きはの四十分ほどで参加者全員に、一泊二日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。



第一班

常に国民と共にある皇室の御姿

〔菊陽町 布田 悟〕

二つの講義と短歌創作手引きの講話により、日本の歴史、文化のつながり、とりわけ、天皇を中心とする皇室の方々の国民を思うお姿がいつも御製や御歌を通じて表現されている、ということがよく理解できました。それは、常に国民と共にある皇室の御姿です。

私は本研修会のみでしか短歌に触れる機会はありませんでしたが、日本人として恥ずかしくない、誇りを持った生き方をもっと深め、求め続けなければならない、と心に誓った貴重な時間を持つことができました。

一流の講師陣をお呼び頂き、有難うございました。このような研修の機会を、日本の将来を背負う若い青少年にこそ持つて頂かねばならない、と強く思いました。

不知火の海に連なる漁火は令和に続く御代のかがり火

「一灯照隅万灯照國」を信じて実践して参ります

〔北九州市 森田仁士〕

すばらしい環境で充実した二日間を過ごさせて戴き有難うございました。志を同じくすることの出来る人々と集ふといふ合宿体験により新鮮な学びとすることが出来ました。伊勢雅臣先生が最後に語られた「一灯照隅万灯照國」を信じて実践して参ります。

朝の集ひ

静まれる不知火の海望む岡に君が代歌ひ日の丸掲ぐ

朝風の海に向かひて声合はせ「浜辺の歌」を歌へばすがし
新しき友と出会へし合宿を催しくれし先輩ありがたし

「和」の精神に触れることができた

〔熊本市 諸熊弘毅〕

講義、講話、班別研修のどれも充実した内容で、ありがとうございました。特に、二つの講義は印象深かったです。伊勢雅臣先生の講義にありました「和」の国の誕生、グローバル時代の「和」、「一人も其処を得ざる時は」の「和」の精神の理想が日本を昔から導いてきたことをお聴きしながら、世界は「和」の理想に反する「恨」「勝敗」の思いに衝き動かされ、身動きが取れなくなっていること、「令和」の時代がこれからをリードすることの大切さを感じました。小柳左門先生のお話では、「和」の精神を展開してこられた歴代の天皇方、上皇・上皇后陛下、新天皇陛下のお言葉や御製等に触れることができ、ありがたく思いました。

芦北の海辺で唱歌を歌ひて

「浜辺の歌」波静かなる岸辺にて歌へば昔のことぞ偲はる

桜町天皇の御製を知りて

君も臣も身をあはせむと国の道宣りたまひける大君たふとし

今一度振り返りたい

(鹿児島市 京田清人)

「令和」といふ新しい時代を迎へ、一人の日本人としていかに学び、いかに生きていくべきかを改めて問ひ直す合宿であつたと思ふ。

いづれのご講義でも、冒頭「令和」に触れられた先生方の、思ひの深さを感じた。伊勢雅臣先生の「元号に名前を付けるとは、自分の子供に名付けると同様、理想をもつて、かうなつてほしいといふ祈りを込めた行為である」、また、小柳左門先生の、「旅人の言葉は、妻を亡くしたその悲しみのうちに集つた人々とともに宴した際のもので、深い悲しみをみんな持つてゐるけれども、さういふ思ひがあるからこそ力を合はせて生きていける」といふお話は心にしみた。

私自身、昭和、平成、令和という三つの時代を生きていくことになる。漠然と、漫然と生きてきたかもしれない。今一度振り返りたい。

大伴旅人を思ひて

亡き妻を偲びつつ集ふ宴まつりにて紡ぎ給ふか「令」「和」の言の葉

カメラ・レポート1



開会式 東京から馳せ参じた磯貝保博氏（本会事務局長）は、主催者代表挨拶で、「本会の研修の特徴である班別による宿泊研修の特異性を十分に活かして交流を深め、日本について大いに学んでほしい」と語りかけた。

旅人の思ひ千四百年の時を経て花開きしかこの日の本で
令和とふ新たな時代を今日よりは刻みゆきなむ思ひも新たに

思いを共有していかなければならない

(熊本市 内田圭介)

この度、勤務している会社の社長から国民文化研究会の合宿研修というものがあるから行ってみないかと進められて初めて参加させていただきました。

どのような方々が参加されているのかも分からず不安の中での参加になりましたが、年齢も職業も違う方々とのディスカッションの場で、いろいろなお話をさせていただき、いま日本が置かれている状況などを知ることができたことで考え方の幅を広げることができました。

今村武人先生の短歌のお話では、学生時代以降まったく言っていないほど触れることがなかった短歌についてお話を聞くことができました。短い歌の中に日常の出来事の中で自分の感じたこと、考えたことを詠み込んであり、それが千年以上の年を超えて人々の心の動きが伝わることに感動を受けました。

伊勢雅臣先生からは、グローバル時代に日本人としていかに生きるべきかというテーマで、実際に国際社会で世界を渡り歩いてこられた講師から、身近なことから世界のことまで幅の広いお話をお聞かせいただいたことで、グローバル化し

ていく時代だからこそ、自国の正しい歴史を知っておくことが重要であるということを学びました。

これまで、マスコミや教科書問題など聞いていたことの真相が少しではありますが、分かったように思います。今回の学びで、私たちが今生きている日本が、自分が生きている時だけでも平和ならいいと思わず、これから先も素晴らしい国として存在し続けるように、子どもや孫、親しい人たちに話して思いを共有していかなければならないと感じました。

あしきたの海辺で学ぶ我々の想ひは国の長き繁栄

第二班

大変ためになった

(熊本市 今村武人)

今回の合宿は、いろいろな団体の協力を得て開催された。一泊二日といふ短い期間ではあったが、これまでの国文研合宿では聞けないやうな地元文化再興に関する御講話もあり、大変ためになった。逆に、国文研の活動についても参加者に理解してもらふことができたと思ふ。従来の合宿とは異なる内容だったが、大学生の参加者が少ない今日における一つの試みであらう。

講話について、発表原稿作りには時間をかけた、発表の練

習まででは十分でできず不安があった。しかし、与へられた時間の中で精いっぱい話させてもらふことができ、伝へるべきこととは伝へたと思ふ。貴重な経験をさせてもらった。感謝したい。

二つのご講義について、①グローバル社会において、日本人の心を失はないこと、②令和の御代になつても歴代天皇の民を思ふ御心が連綿とつながつてゐることなど理解でき、日本人としての誇りを持つことができた。

「短歌創作のてびき」の講話を担当して

友しらの熱きまなざし感じつつ次第に声も強くなりゆく

夜の懇親会にて

地元なる棚田の米にて作られし「湯の神さん」は口に香ばし御友らと心打ち解け語る夜は虫の声さえ楽しくなりぬ

朝のつどひにて

はるかにも浮かぶ島々眺めつつ声高らかに唱歌を歌ふ

思ひの深いお話

(長崎市 橋本公明)

『皇室の祈り』（伊勢雅臣著）、『皇太子殿下の御歌を仰ぐ』（小柳左門著）を読んであしきた合宿に臨みました。伊勢先生は、あしきたに関する萬葉集を詠まれ、このあしきたでの合宿の喜びを語られ、自分も嬉しく思いました。夕方の講話も、講師の方々の思ひの深いお話でした。かうした合宿を開



講話1 熊本県立第二高校教諭今村武人氏は「短歌は、誰かにメッセージを送るやうに、そこに映る真心を写生するやうに、丁寧に具体的に詠みます」と歌を詠むときの勘所を示した。

催して頂き、有り難く思ひました。

知道会牧俊郎氏の講話を聞いて

菊池なる土地に再び学ぶ場を起こしゆくとのみ思ひ切なり

芦北の海は青く美しかった

(宇城市 五嶋和明)

折田豊生・白濱裕両先輩と北濱道君の勧めで約四十年ぶりに合宿に参加した。故北島照明先生のお導きだったのだろう。講師の方々、同班の方々の熱意に触れ、合宿に変わらぬものがあるのだなと感じ、嬉しかった。

ことに、伊勢雅臣先生に私達日本人が世界史の中で果たす役割(可能性)を示唆していただき、その素晴らしい見識に敬服した。小柳左門先生には心の広さを感じ、聴講しながら陛下の御言葉ひとつひとつに涙がにじんだ。子ども達の心に届いたらいいなと思う。

合宿に集う人達は様々な経験を積みつつ、学生の頃の気持ちを忘れていない。実に不思議である。運営の方々に深い謝意を申し上げます。

芦北の海は青く美しかった。

学生時代を想ふ

若き日にもともに学びし御友等と再び会ひて語りゆきたし

日本の伝統文化を維持したり伝へたりする

活動を具体的ににしていく必要を感じる。

(福岡市 藤 寛明)

風光明媚な環境のもと、一泊二日の充実した研修ができた。今回の合宿では、夜の講話の中で「あしきた」の紹介や菊池地域の人口減に対する危機意識の高さが心に残った。過疎化を何としても防がうと奮闘される牧俊郎先生の具体的な取り組みの数々が成果を上げることが願はずにはゐられない。また、その話を聞いて、最近、年齢的に氏子の役が回って来て宮総代の役目を務めた時の事に考へが及んだ。宮総代の仕事を引き受ける者が少なく、特に氏子が高齢化して若手の氏子が増えないため、神社の維持が段々難しくなりつつあるからである。日本の伝統文化を学びながら、一方、地域において、それを維持したり伝へたりする活動を具体的にしていく必要を感じる。

目交ひに広がる海にエンジンの音響かせて漁船出て行く
漁に出る船あればまた港へと戻る船あり遠くに見ゆる

同志の士であるような班の方々

(熊本市 田尻 誠)

ほぼ情報のない中で参加させていただいた会でした。

建物に近づいたはずなのにどんだん道はせまくなり、多少の不安がよぎる中、着くなり真つ青な空と海。それがこの会の第一印象となりました。

これはなにかあるぞ。この時の予感はいい意味であたりました。

心地よく心引き締まる号令とともに始まる講義は、長く忘れていた学生の雰囲気を思い出させるのに十分で、ここ最近の仕事の忙しさにあえて忘れていた和歌やその後の講話は、思いを新たにしようにとのおしかりと思いつながら、それでも嬉しく拝聴させていただきました。

そして何より貴重なものと感じたのは、初めて会う方々であるにもかかわらず、同志の士であるような班の方々の存在でした。班に分かれてのフリートークは、互いの興味溢れる表情と笑顔に満ち、徐々に夕日に染まっていく芦北の海の光景とともに忘れることはないでしょう。

運営の方々には心より感謝申し上げますとともに、今後この会を広げ続けていただけることをお願いできればと思います。

ありがとうございました。
空と海に分かちありしもたそがれにひとつとなりぬ色も思ひも



講義 I 「国際派日本人養成講座」編集長伊勢雅臣氏は「時代がどのように移り変はらうとも縄文時代の頃のやうに和の心を大切に皆で国を照らしていくこと、それがグローバル時代になっても変はらない日本人の生き方なのではないでせうか」と指摘した。

第三班

私には窮屈であつた

(菊池市 牧 俊郎)

黙想及び国旗掲揚時の国歌斉唱に違和感あり。前者は子供
の教育には適切だが、大人には日がな一日黙想で煩わしい。
後者は、批判するものではないが、個人的には国旗つまり国
歌に対する感謝敬意の念があれば足りる。

皆さんは知見を重ねておられるので、話の内容についてい
けなかった。議論の場が感情的感覚的なものになってはいけ
ないし、普段から考えの浅い自分にとっては、出席する場所
ではないような気がした。

グローバル化、拉致問題、大和魂など、グループ単位であ
るいは食事時の雑談の中で話が出たが、このような問題は研
修で議論すべきではないか。

私はやがて八十の坂を登りつめる。今は本当にいろいろな
ことから自由でいたい。その意味で今回の研修は、私には窮
屈であつた。

願はくは令和の御代もたひらけく我が民族に誇りあれかし

有意義な合宿となりました

(北九州市 松田 隆)

「短歌創作のてびき」において『本居宣長』の「姿ハ似セ
ガタク意ハ似セヤスシ」の部分が理解できたようで理解でき
ませんでした。今一度、解説をお願いしたいと感じました。

伊勢雅臣先生の御講義では、「令和」の「令」は「礼冠をつ
けてひざまづいて神意を聞く人」という意味であること、「和
の国の誕生」の部分で、縄文土器が世界で最古の土器である
こと、貝塚が単に貝殻を集めたものでないことも知り、大変
勉強になりました。

外口榮一先生の講話では、ヨーロッパ戦線で戦った第四四
二部隊のことを再度勉強できて感動しました。

小柳左門先生の御講義では、各天皇様の御製から御苦労の
ほどをお偲びすることができ、先生の感動が伝わってきて、
「わが国は神国なり」ということが実感として伝わりました。
今回は、場所、天候、班友にめぐまれて有意義な合宿とな
りました。

潮風の吹きくる浜辺は万葉の歌の世界を見せてうるはし
さやかなる五月さつきの海は波もなく万葉歌人の心偲ばゆ

各講義、各講話、班別研修の全てが感動的でした

(入吉市 藤崎喜久夫)

初めての参加でしたが、各講義、各講話、各講話、班別研修の全てが感動的でした。

伊勢雅臣先生は、これからますます厳しくなる世界情勢の中で我が国が「平和な強国」として世界的地位を維持していくには「現実を直視」することが重要であることを指摘されましたが、M・ペンス米副大統領の「ハドソン研究所」でのスピーチ(二〇一八・一〇・六)にあるように、同じ価値観を有する諸国が「同盟」を再確認し、「一带一路」の帝国主義を押し進める中共との冷戦の時代になることを自覚しながら「大和心」を以て乗り越えねばと思えました。幸い我が国が国際的な政治感覚を持った希代の名宰相「安倍晋三氏」を有していることに「神は日本国を見捨て給わず」と感じます。

小柳左門先生の御講義もすばらしかった。平成の両陛下が築かれた象徴としての天皇と国民との絆をさらに強固にし、新しい令和の時代を我々国民も心一つにして築いていくべきものです。

おほきみの国民を思ひてつくされしお姿拝し感きはまれりたな

目頭が熱くなった

(合志市 岩元克雄)

今回、伊勢雅臣先生のご講義のなかで「和の国の誕生」のお話がありました。その中で「一万五千年前、縄文人は世

カメラ・レポート4



班別研修

界に先立って定住生活を始めた。その時代の遺跡から戦争の武器が出土していない」とおっしゃっています。

日本民族は、「和」の心をもって誕生したのです。

聖徳太子の「十七条の憲法」に「和を以て貴しとなす」とありますように、日本人はもともと平和を愛する民族なので、

す。
日本国は「大和」といいます。「大いなる和」を大切に、そして国家の中心に天皇様をいただいでどんな国難にも屈することなく、今日の繁栄と世界でも稀にみる文化歴史伝統を築いてまいりました。

二日目の小柳左門先生の「世界に誇るべき日本の国柄」を拝聴して、感動のあまり何回も目頭が熱くなりました。

西行法師が伊勢神宮を参拝した折の、「何事のおはしますかはしらねども かたじけなさに 涙こぼるる」という歌を思い出しました。日本人に生まれてきた喜びを感じます。

小柳左門先生に木下道雄著「宮中見聞録」のお話がございました。私もかつて拝読し、昭和天皇の御心の忝さに感じ入ったことがございます。

ところで、このような研修会を企画し実行する、大変な時間と労力、そして気配りを必要とします。国文研の皆様が、「合宿研修」を行っていらつしやることに對し敬意を表しますとともに、心から感謝を申し上げます。願わくは、高校生大学生など多くの若い人たちに聴いてもらうにはどういった法があるのか、考えるところですよ。

この「合宿研修」に参加すれば、日本人の心が覚醒させられます。

これから「グローバル化」が一層進むものと思われれます。であればあるほど「日本人としての誇りと自信」を持ち、「日本人としての立ち位置」をしっかりと確立させなければなりません。そのためには、国文研の「合宿研修」のような勉強会が必要となってまいります。国文研は貴重な存在です。

あしきたの静かな海に我思ふ拉致されし人いかにおはすや
あしきたに国憂ふ人集ひ来て我も我もと熱弁奮ふ
夕陽落つるあしきたの海にひとり居ていかに生きむと自問自答す

思いを伝える大切さ

(宇土市 拂山裕一)

多くの方々とお泊りがけて勉強する初めてのことが、私には衝撃的な経験となりました。日本人としてどうあるべきかを常々考えて生きているつもりでいた私は、知識を学ぶ機会があつても表現することを学ぶ機会がなかったことに気付かされました。自分の考え方、感じ方を正確に表現することができなければ、相手に伝えたいことが形式的にしかならないこともあり得ます。知識や情報を得る機会には幾らでもあるのでしようが、思いを伝える方法を学ぶことは貴重だと思えます。短歌を詠む。この大切なことにまるで目を向けていなかった

た私は、まだ日本人としての生き方が始まっていないのかもしれない。日本人として古より伝えられてきた短歌を用いることができるよう努力しなければなりません。それが私の務めでしょう。

太古より続き来りし和歌の糸を切らぬやう努めむ我が言葉も
て

「川を上り、海を渡れ」

(熊本市 高藤 誠)

伊勢雅臣先生の講義の中で「川を上り、海を渡れ」、「根っこを伸ばせ」という言葉が強く印象に残りました。

グローバル時代において、自分(および自国)の歴史を知り、海外へ行き、また自分の足元をみつめ、事実を知ることが大事であることをお話いただきました。国家観は、他国の文化や人と接することを通して湧き上がり、自己との違いや共通点を知ることによって徐々に育っていくのだと思います。「和の国の根っこ」として、お話しいただいた終戦後のご巡幸にまつわるエピソードは、私がつまっている日本人としての心になんたりと入ってくるものでした。

目頃から、日本人の国家観や日本人の感性を言葉で定義し伝えていくことは難しいと感じていましたが、ひとつひとつの歴史やエピソードをできるだけ具体的に日本語で伝えていくことが重要であることを教えていただきました。世界の国

カメラ・レポート5



班別研修

第四班

の人たちと関わり合うグローバル化の時代に、縦軸となる歴史とその中にある「和の国の根っこ」を感じるために、歴史を学び、言葉を学ぶことは不可欠なものであると再認識しました。

川を上り海を渡れと語られし師のみ言葉の耳に残れり
古き世の歴史を聴きて見渡すは芦北の海の風ぎたる水面みなも

一日も早く「公」の有難さを知ってほしい

(熊本市 外口榮一)

初めて参加させていただきました。

伊勢雅臣先生の御講義では、日本の歴史が一万年も前から「和の文明」を持つていたという事実に驚き、感動しました。

私はグローバルな時代だからこそ日本人としての原点に立ち返り、自分達が何者であるかを知る必要があると思えました。大和魂も日本精神も私達日本人のDNAに確実に組み込まれていて、血液の中にも脈々と流れていると確信しています。

「個」に生きることとは「公」の中で生きていることです。「公」を忘れて「個」は生きて行けません。日本国民が一日も早く「公」の有難さを知ってほしいと思えました。

小柳左門先生の御講義では、歴代天皇のお心の有難さに涙

がこぼれました。新帝陛下の御言葉に「歴代の天皇のなさりようを心にとどめ自己の研鑽に励むとともに、常に国民を思い、国民に寄り添いながら」とありました。

ドイツ人医師ケツペルはかつてこう言いました。「日本人は常に祖国祖先の偉業を記憶して自己練磨の糧とし、それによって常に勇気を養い、胆を練る」と。今上陛下の御言葉と同じ主旨であることを不思議に思うと同時に、天皇も国民も古から同じ考えであったことを有難く思います。

あしきたの海に真向ひ日の丸を掲げてうたふ老いも若きも

熊本の皆様に感謝します

(宮若市 小野吉宣)

この合宿研修を企画し、一期一会の出会いを生み出してくれた熊本の皆様に感謝します。またいつか、この海を眺め、再会したいものです。

うなも

不知火の静かなる海面夕日受け茜に染まりまはゆきさばかり

御代替はり令和となりて初めての「君が代」唱ふ御園生しのび
新生の御代は開かれ深刺と希望膨らむ若き日本に
天孫の降臨したまふ荘厳の山並つづく悠々然たり

天皇の御存在と国民との関係をより深く理解できた

(合志市 尾方康平)

今回初めて参加させていただきました。

日頃からマスコミの報道や学校での歴史教育の内容に疑問を感じていたため、合宿研修のちらしを見て参加を決めました。

講師のお話や班別研修で、班員の方々とお話をさせていただく中で、今まで自分が目を向けてこなかった「文化」の深さ、大切さに気付かされました。

今までは、表面的な歴史や地政学などを勉強していましたが、今回、皇族方の御製を解説していただくことで、天皇の御存在と国民との関係をより深く理解できたと感じております。

今回の合宿で志を同じくする方々と思いを共有できたこと、また、横のつながりを作ることができたことが大きな収穫です。ありがとうございました。

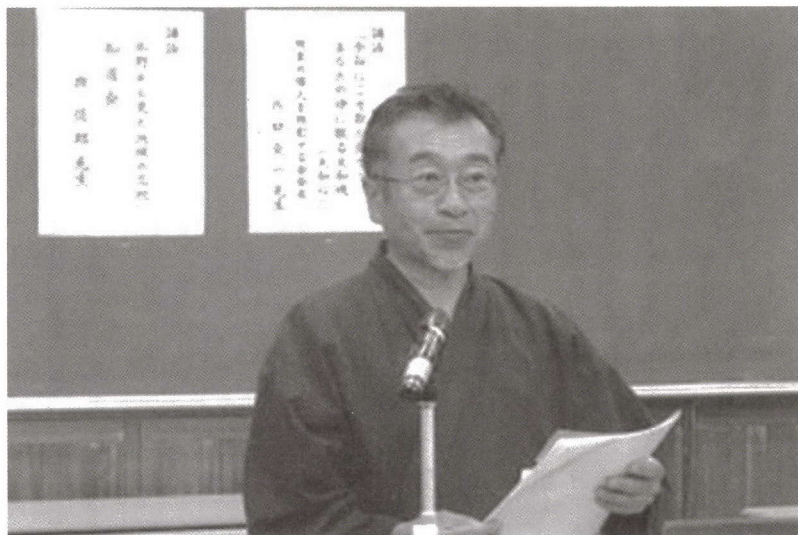
あしきたの海を眺めて朝の集ひ節々痛むラジオ体操

とても自分のためになりました

(熊本市 永田真一)

たくさんの話を聞いて、とても自分のためになりました。これらの話を思い出しながら、これからの生活につなげていくように思います。

このような研修会に参加させていただき、ありがとうございました。



講話2 肥後の偉人顕彰会会長外口榮一先生は「偉人と言はれる人は、有名無名を問はず、日本民族であるとないとに関らず、皆、大和魂（大和心）を持ってあります。私達自身が自らの中に在るその価値に気づき、それを取り戻していかねなければならない」と訴へられた。

ゆうゆうと静かにゆれる芦北の海自然ゆたかな芦北の町

残る人生を^{うら}令わしく歩んでいきたい

(熊本市 真子秀樹)

皇室と国民の関係性や大自然と私の関係性などを御代譲りの節目の機会に考察することができ、日本人としての矜持を深くすることができました。

短歌創作の体験は、言葉のちからやひびきを改めて感じることができ、還暦を過ぎた我が身をふり返り、感謝の気持ちと和気をもって残る人生を令わしく歩んでいきたいと心静かに意を新たにしております。

芦北の間近に浮かぶ島々の静かなること令はしきかな

日本人の精神文化の中核とも言える短歌

(小国町 廣瀬 勝)

日本人の精神文化の中核とも言える短歌の意義を改めて認識させて貰いました。実践こそが大切であることもまた痛感した次第です。

伊勢雅臣先生の御講義を拝聴しながら、企業利益の追求と法令遵守の要請が衝突した場合に、大企業の多くが前者を選ばせぬ様に日本人が意識を覚醒させ、国家利益との整合性を包含した経営計画を策定させるべく尽力すべきであると思ひ

ました。

合宿から帰りに我が宿の看板猫シロのことを

肥満猫永遠に生きよと願ひつつ撫つる白髭ぐうと鳴るのみ

第五班

皇室の伝統そのもの

(福岡市 久々宮 章)

伊勢雅臣先生は、経営者としての視点や豊富な海外経験を踏まえて「自分のよって立つところをしっかりと見つけてそれを自分の言葉で正確に伝える」ことの重要性を訴えられた。

また、明治天皇が五箇条の御誓文と同日にくださった「明治維新の御宸翰^{しんかん}」において、「天下億兆一人も其処を得ざるときは皆朕が罪なれば」と仰せられたことを知り、大御心の深さと御覚悟に驚き、胸が熱くなりました。

また、小柳左門先生が、新天皇「即位後朝見の儀」における御言葉に触れ、「上皇陛下のこれまでの歩みに深く思いを致し、歴代の天皇のなさりように心をとどめ、自ら研鑽に励む」との御姿勢は永い皇室の伝統そのものであると言われたことが強く印象に残りました。

君が代を友らと歌ふ広庭に日の丸の旗翻りたり
天草の島かげかすむ八代の海目の前に広がりに見ゆ

言葉で正確に表現する事の大切さとその難しさ

(多良木町 山田信雄)

研修を通じて感じたことは、自分自身の思いや考え方を言葉で正確に表現する事の大切さとその難しさでした。今村武人先生の「短歌創作の手引き」では、特に自分の思いを言葉で表すことの難しさを実感しました。元々万葉集や天皇陛下の御製、維新の志士たちの和歌が大好きでしたが、自分で歌を詠むということになると楽しいけれどもなかなか自分の思いが表現できず、いつも苦勞しています。しかし、今回改めて短歌の素晴らしさを実感することができました。

伊勢雅臣先生の講義からは、グローバル時代の日本人の在り方を学びました。花園にたくさんのお花が個性豊かに咲き香って調和している姿を思い起こし、グローバル化とは花園をバラだけにする事ではなく、それぞれの花が生かされ調和している花園を作る事だと思います。日本は「和」を大切にしながら、その国柄を大いに發揮すべきであると感じた次第です。

野坂の浦

いにしへの歌に詠まれし葦北の海たひらけく波静かなり

初任の地にて當時を思ひて

葦北の子らと遊びし砂浜にほがらに響きし声なつかしき

班別研修にて

カメラ・レポート7



講話3 知道会・元 菊池市長牧俊郎先生は「教育を通して町の活性化をどう図っていくか。これこそが地方の重要な課題でせう」と強調された。

初めての友にしあれど沸き起こる思ひ語りつ時をわすれて

日本の国柄を伝えていきたい

(八代市 福田善之)

今回の研修で大事だと思つたのは、伊勢雅臣先生が「自身
自身の考え方、感じ方を自分の言葉で正確に表現する」とい
う事であり、今の自分に最も不足していると実感しました。
昨今、我が国における様々な問題、例えば、女性宮家、皇統、
尖閣諸島、等々の諸問題を正確に理解し、それをマスコミ等
の報道を鵜呑みにしている人達に伝え、目覚めて貰いたいと
思いました。

小柳左門先生の御講義では、歴代天皇の御製やそれにまつ
わるエピソードを涙なくして拝聴することが出来ませんでした。
研修を通して、このような天皇を戴く日本に生まれて本
当に幸せだと思いました。この事に気付いていない日本人は
何ともつたないことでしょうか。今後、若い世代にこのよ
うな素晴らしい伝統文化を持った日本の国柄を伝えていき
たいと思います。

あしきたの海にはいまだ船ひとつ見えず明けゆく涼しき朝よ

それぞれの立場で発信する必要を強く感じます

(熊本市 原 明宏)

現在、日本をとりまく国際情勢は厳しさを益しております。
特に近隣国の行動は目に余る状況です。戦後七十四年が過ぎ
ましたが、未だに憲法改正も拉致問題も一センチメートルも
改善に向けて動いていません。結果を見る限り、やってこな
かったのか、出来なかつたのかと考えてしまいます。

嘘の情報や誤った歴史観から正しい判断は出来ません。今
のマスコミには期待するだけ無駄でしょう。史実、正しい情
報をそれぞれの立場で発信する必要を強く感じます。

憲法の改正ならず拉致されし人も帰らず今の日本は

新しき御代になりてもこの海の彼方に同胞帰る日待つ

マスコミの嘘にのせられ世の人はまだへるままに時の過ぎ行

く
教科書もテレビ新聞どれもこれも曲げて伝ふる誰がためなら
む

若い世代に呼びかけてまいりたい

(福岡市 藤新成信)

熊本地区の皆様のご尽力に感謝申し上げます。

今回の合宿研修は、芦北の地元の方々と熊本の諸団体の協
力が反映された貴重なものであり、このような地道な地方合
宿の積み重ねが大きな成果に繋がっていくものと改めて感じ
ました。

伊勢雅臣先生のご講義は、現代の日本人が考えるべきテー

マが凝縮されており、班別研修も実に充実したものとなりました。

現代は、我々日本人が自発的にものを考え、主体的に生きていくべき大事な時期になっていると思います。今後、福岡でも若い世代に呼びかけてまいりたいと思います。

静かなる海のはたてに天草の島影見ゆるあしきたの丘ゆ

第六班

充実した二日間

(熊本市 諸熊由美)

今回の合宿は、主人の希望で参加することになりました。主人の体調も随分安定し、夫婦そろって参加できたことが何より有難いことでした。

伊勢雅臣先生のお話の中の「貝塚は貝のお墓だったのです」のひと言により、私の心は一瞬に溶けてしまいました。先生の豊富な海外生活体験に基づく日本人としての「根っこ」のお話についても、表現のあり方の大切さを確認しました。一億数千万人の各々が天分を発揮して「其処を得る」生き方をすれば、マスコミ等に振り回されないですむ様にも思い、光明を感じました。

小柳左門先生のお話もすばらしく、生き生きとした御表情

カメラ・レポート 8



講話 4 北朝鮮による日本人拉致被害者を救出する熊本会長布田悟先生は「拉致問題解決のためには国民の大きな声が必要です。一日も早く拉致問題を解決するため、何卒ご理解、ご協力のほどよろしく願ひします」と訴へられた。

に元気を頂きました。

女子班は二十代〜七十代で年齢差はありましたが、各々に熱い思いを持っておられ、楽しい時間を共にしました。学生さんの一人が「私は社会に出たくないと思っていました。この合宿に参加して、真剣に考えている大人がたくさんおられることを知り、安心しました」と言われたことにショックを受けるとともに、この合宿の意義をきちんと受け止めて下さったことを有難く思い、学生さんを誘って下さった方にも感謝しました。

充実した二日間を本当に有難うございました。

伊勢雅臣先生の御講義を拝聴して

貝塚を「貝のお墓」と説き給ふ師のみ言葉に心躍りぬ

新元号発表の瞬間

新元号「れいわ」と声に出したければ清水我が身を貫く心地す

「喝」を入れられた思いがしました

(朝倉市 吉田喜久子)

令和元年最初の合宿が風光明媚な芦北の地で行われ、熊本で御活躍の女性六名の皆様と日本の国柄、皇室、社会情勢等について、親しく楽しくお話しすることが出来ました。

今回はまた、地元熊本の有志の方々の御活躍ぶりが伺える御講話を拝聴し、「喝」を入れられた思いがしました。

伊勢雅臣先生と小柳左門先生の御講義は心に深く響きまし

た。百二十六代続く皇室を戴くこの日本の伝統・文化を誇りを持って子や孫の世代にしっかりと伝えていかななくてはと改めて思いました。

心細きおもひは一度に吹き飛びて旧知のごとく話弾むも

七浦のかなたに沈む太陽を遥かに仰ぎ話に花咲く

グローバルな今を生き抜く講義うけ班別研修盛り上がりたり

控へ目に話に加はる学生の「若き」まはゆく力もらひぬ

研修に疲れしからだ熱き湯につかりてはぐす至福の宵よ

翌日は卓球顧問の仕事として帰る仲間を拍手で送りぬ

天皇の尊きこころ沁みること伝はる御歌に涙あふるる

日本人はいかに生きるかを問うことが大切だ

(熊本市 外口キヨ子)

合宿案内ちらしに「激動の世界と新生日本 新たな時代をどう生きるか」とあり、これからの日本をどうするのかを考へることについて重い気持ちでしたが、世界と日本の関係より日本人はいかに生きるかを問うことが大切だと気がきました。日々、生活に追われている私ですが、伊勢雅臣先生のお話を伺いながら、今の私に不足しているのは自分自身の考えや感じたことを言葉で正確に表現することであり、それは短歌創作で修得していくことが出来ると思いました。

小柳左門先生のお話では、歴代天皇の御製を知ることが出来る、すばらしい国に生まれたことに誇りを持ち、もつと胸を

張って生きていこうと思いました。

牧俊郎先生は菊池の現状を一所懸命考えておられ、感動しました。

布田悟先生も外口榮一先生もいつも一緒に活動していますが、頭が下がる思いです。国の為頑張っておられる姿は頼もしいと思います。

あさほらけ心静かに眺めやるあききたの海はうつくしきかな
神々に祈りまつらむ心こめ令和の御代も國やすかれと
ありがたく仰がむ先の大戦に國守りたる若き英霊

少しだけでも希望を見出すことができました

(熊本市 熊谷ひかり)

初めてこのような会に参加させていただきましたが、普段の生活では体験することができないような話し合いをすることができ、自分の将来を考えなおすという意味でもよい機会だったと思います。自分が研究している分野と近い所もあり、新たな視点を持つことができ、これから役立てることができそうです。一方で、自分たちのやっている事の成果が正しく世に広まっているとは言い難い事実も確認し、これからの研究そのものだけでなく、それを伝えていく努力をしなければならぬとも思います。皆様のお陰で暗い話しか聞かないようなこの世の中に少しでも希望を見出すことができました。これからも、自分自身、真剣にこの世の中を考えていき

カメラ・レポート9



意見交換会 岩元克雄さんの開会挨拶。

ながら、様々な視点を持つて研究に臨みたいと思います。
潮風のなまあたかきを頼にうけ浜辺に想ふ令和の初夏を

日本人とはなんぞやと思ひめぐらす

(熊本市 岩下時子)

今までの学生生活で学んでこなかったことを、この合宿の講義や班別研修でたくさん知ることができました。ここで見聞きしたことは入口にすぎないとは思ひ、自分の中で落としこめていない部分も多いので、これから、自分の軸を形作っていくために、勉強、特に本を読むことに力を入れていこうと思います。何も知らない若者をあたたかく迎えてくださってありがとうございます。班別研修や食事時や懇談会などで、話をきくことができて楽しかったです。

また、自分は、自分の意見を持っていないのだと思つていたので、話していく中で、考えを整理できたり新しい考えを得ることができたり、自分自身を見つめなおすきっかけにもなりました。その中で、自分は教育に関わりたいという気持ちを思い出しました。

あしきたの海眺めつつ日本人とはなんぞやと思ひめぐらす

天皇方、先人の方々の思い

(熊本市 大塚千春)

芦北の海が、地平へと続いていく広大な地で皆様方と再びお会いして、話を交わす中で縁を感じました。また、今村武人先生の講義を拝聴し、短歌は、日本人の心を表すものであり、その長い歴史に刻まれた天皇方、先人の方々の思いを心に刻み、また、大事にしていかなければならないと改めて思いました。再び、皆様方と再会する日まで、日々、自己研鑽に励んでいく思いを再確認することができました。
いにしへの時を重ねて映え亘るいのちみなぎ漲る芦北の海

時代を大切に生きていかなければならない

(熊本市 山方富美子)

「令和」の御代を迎え、「平成」の時代を振り返るテレビ番組や報道を目にすることが多く、改めて日本の国を意識する機会が増えました。こうした時期に今回の「あしきた合宿」に参加させていただいたことで、時代を大切に生きていかなければならないことを再認識することができました。

また、和歌に流れる伝統、国際社会の中で日本人としてどのように意識して生きていくべきかを改めて考えさせられました。

芦北という自然豊かな場所で自国のことをじっくりと考えながら過ごす時間は、充実した思いに浸ることができ、感謝しております。

芦北の海に臨みてひらけゆく令和の御代の生き方学ぶ

素晴らしい合宿でした

(小柳左門)

合宿の準備、進行、まことに有難うございました。景色もよく、人もよく、素晴らしい合宿でした。

加藤大人の育ち給ひし八代の海青くして波静かなり

(加藤敏治先生・国文研先達・元八代市助役)

おだやかなる海のかなたに天草の島山並みのうち続く見ゆ
 戦に征く日を前に若人はあまた集ひき日奈久の里に
 不知火の日奈久の宿に限りある命燃やして語りたまひき
 別れゆく時近づけば肩いだき歌ひ踊りきますらをの友

○

講堂の窓辺に立てば広々と波静かなる八代海見ゆ

静かなる海に浮かべる芦北の三つの小島姿美し

緑こき小島のかなた広ごれる八代海の沖かすみたり

この海の沖辺はるかにかすみつつうすき島影連なりて見ゆ

山陽が雲か山かと詩に賦しし天草灘を遠望むかな

(頼山陽の詩「天草灘に泊す」)

平らなる八代海を朱にそめ夕日かたむく彼の島山に
 新しき友とめぐるもめづらしく語れば楽しく芦北の夜は



朝の集ひ

ほろ酔ひの身に心地よく芦北の海風わたる夜もふけゆけば
たえだえに虫は鳴きつつ真闇なす海のかなたに灯の見ゆ

○ 熊本の縁集めて立ち上げし合宿研修の集ひたふとし

日頃の連携の様がよくうかがはれました

(伊勢雅臣)

すばらしい景色の中、立派な施設で合宿を開催・運営された熊本の諸兄の御尽力に謝意と敬意を表します。

私の講義がどれだけ諸兄姉の御期待に沿へたか心許ない思ひがしますが、小柳左門先輩の露払ひになればといふ気持ちでお話しさせていただきました。

熊本の諸団体からの幅広い参加があり、日頃の連携の様がよくうかがはれました。ありがたうございました。

○ 幾年も逢はざりし友らと久々に言葉交せりこれの集ひに
歳ふりて変はれる面輪に御友らの歩みこし道の長さしのばる
年月をふれどたゆまず国のため尽くす友らの歩み貴し

○ 天草や長島に囲まれ波もなき海面に三つの小島浮かべり
海面背に立ちたる石碑にいしへの万葉人の歌刻まるる
芦北の野坂の浦ゆ船出してと詠みたる人も見し景色かも
足下の岸邊をおほふ丸石に寄する小波の澄みに澄みたり

運営本部

世代を越えて「心を開いて語り合う」経験の場を

提供することは我々の使命である

(熊本市 白濱 裕)

今回の合宿は、八月三十日から千葉県柏市で開催される「第六十四回全国学生青年合宿教室」に先駆けて熊本を会場として実施されたものである。

開催に当たっては、国文研会員だけではなく、日頃、会員が付き合ひのある志を共有する熊本の諸団体にも呼びかけ、百名の参加を目標に準備に当たってきた。日程も短期間で十分な成果をあげたとは言えないかも知れないが、時あたかも、新しい御代「令和」改元後初の合宿となり、今後の合宿教室の一つの試みとして参考になればと願っている。

国文研が一貫して掲げてきた、日常生活の中で生業に紛れて殆ど意を用いることの少ない「学問」「人生」「祖国」という合宿教室のテーマについて、参加者が充実した講義や班別討論等を通して共に考えることにより、今日の我が国における内外の様々な危機的状況を認識共有し、局面打開の端緒を掴むことのできた合宿になったのではないかと思う。

今後の課題は、次世代を担う学生や若者にどう参加を促していくかということである。

二十年前に自裁された江藤淳氏が「忘れたことと、忘れさせられたこと」の中で述べられたように、七年間に及ぶGHQの占領政策の中で、日本罪悪史観を植え付けられ、学校教育の中でも真実の歴史や天皇・皇室のことを学ぶ機会を奪われた私を含む戦後世代にとって、この合宿教室は、これまでも戦前と戦後の世代の断絶を埋める大切な役割を果たしてきた。

これから、物質的には豊かな時代に生まれ、あらゆる情報をネットで入手出来る環境にありながらも個我的殻に閉じこもりがちな若者達に、わが国が幾多の貴い先人の営みにより護られ今日があることを歴史に学ぶことにより、「国」と「自分」との繋がりを自覚させ、世代を越えて「心を開いて語り合う」経験の場を提供することは我々の使命である。

荻田誠一運営委員長へ

会場に幾度も足を運び来て合宿準備に当たりし君はも

巧まざるユーモア交へにこやかに語る姿に心和みぬ

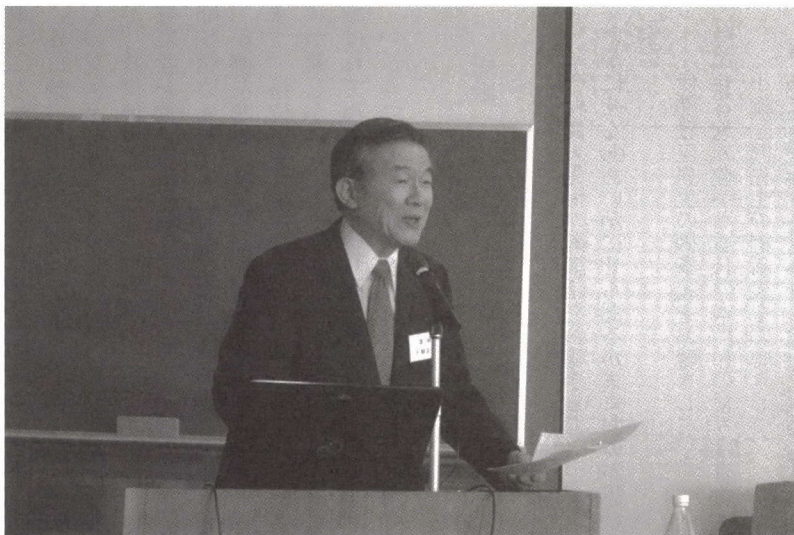
いつの日か訪ねてみたし山間の君預かれる学校まなびのの子らを

「世界に誇るべき日本の国柄」を学ぶことができた

(八代市 荻田誠一)

運営委員長を仰せつかり、地元の人間として何か皆様のお

カメラ・レポート 11



講義Ⅱ 社会医療法人原土井病院院長小柳左門氏は、「内外の行幸啓に伴ふ御製と御歌は、何れも感動と涙なくして読むことはできません。天皇の御心情は、御製を丁寧に拝読すればよく分かります。たくさんの御製がありますので、ぜひ、心を込めてお読み頂ければ、と思ひます」と示した。

役に立てないかと思つておりましたが、多くの参加者があり、皆さんが「よかつた」と思つて帰つて頂ければ何よりです。

志を同じくする人々が九州一円からこの芦北に集い、横のつながりを深め、日本人として生まれ育つたことに感謝し、「世界に誇るべき日本の国柄」を学ぶことができたことは、実に有難いことでした。

七浦の海は静かに横たはり天草を背にうたせ船行く
大君の御歌学びて溢れくる畏敬の念と感謝の涙

印象に残つてゐること

(熊本市 久保田 真)

今村武人先生は、よどみなく言葉が出てきて講師としてのすこみを感じた。日々、短歌と向き合はれてゐる修養の成果なのだらうと思ひます。万葉集の歌を引かれ、「短歌で言葉に尽くせない思ひを表した」「(古代から)問ひかけられてゐる。私達も問ひかけなければならぬ」といふ言葉が印象に残つてゐます。

伊勢雅臣先生のお話では、「日本ほど景色がきれいで、食べ物がおいしくて、気候がよくて、人がやさしい所はない」と仰つたのが印象に残つた。三十四カ国を訪問し、十年以上の海外生活をしてをられるだけに説得力があつた。また、野坂の浦から水島までの航海の安全を願つた万葉集の歌を紹介されたが、講義室から見える海を見ながらその様子が浮かんだ。

地元にあながら知らなかったのは恥づかしいと思つた。

外口榮一さんのお話は、日本人二世部隊への感動と外口さんの覚悟が伝はつてきた。私は以前菊池高校に勤務してゐたが、牧俊郎さんの菊池の高校への思ひが伝はつてきた。拉致被害者を救ふ会の会長さんにお会いするのは初めてだった。布田悟さんの明るいお話の中にも運動の大変さを感じた。

小柳左門先生の歌の理解の深さには、いつも目を開かされます。皇位継承が問題になつてゐますが、光格天皇の頃も継承が難しかったこと、今上陛下の御製が国民を広くとらへて歌はれてゐるといふ内容が印象に残つてゐます。

いにしへの船出の歌に詠まれたるあしきたの海の輝き広がる

短歌

(熊本市 河崎由紀夫)

今村武人先生の御講話をお聴きして
いかにせんあいかにかにせんあるがままおのが思ひを三十一文字に

伊勢雅臣先生の御講義をお聴きして

弓なせる恵み豊かなる日の本に和の営みは育まれけり

小柳左門先生の御講義をお聴きして

古ゆ易らず守りたまひける慈悲仁恵のありがたきかな

外口榮一先生の御講話をお聴きして

我と彼と国は違へどあはれにも易らぬものは大和魂

地域の発展に貢献できるよう励みたい

(熊本市 永田 誠)

伊勢雅臣先生と小柳左門先生の御講義に共通するのは、天皇の「仁」すなわち「真心」だったと思います。

今年五月から元号は令和に改まりましたが、新しい御代でも天皇の祈りに感謝し、この合宿に集われた皆様と一緒に、少しでも地域の発展に貢献できるように励まねばと思えた素晴らしい合宿でした。

次回もまた親子で参加したいと思います。

芦北に広がる雲を映す海時折眺め真心字ぶ

「和」をテーマに日本の国柄を今一度

見つめ直す機会となりました

(熊本市 吉村浩之)

令和の御代を迎えて「和」をテーマに日本の国柄を今一度見つめ直す機会となりました。

伊勢雅臣先生の講義の中で、一万年以上にわたる縄文時代の特徴として「三内丸山のような巨大遺跡からでさえ、武器が出土しない」との話は、興味深く拝聴しました。

久しぶりに会う方々もあり、ひと時の間語り合うことが出



受講の様子。

来、快い合宿となりました。

朝風の不知火の海しづまりて白き霞のうすくたなびく
静かなる不知火の沖御所浦の島影遠く浮かび出で見ゆ

事務局

これぞ熊本ならではの合宿なるべし

(府中市 磯貝保博)

熊本の皆さんのご尽力により、四十八名の参加者を得て、
盛会のうちに合宿研修が終了することに、心から御礼申し上げ
ます。

特に今回は、日頃熊本で交流されている「肥後の偉人顕彰
会」「知道会」「拉致被害者を救う会」の相互協力により、意
見交換の場が設けられました。

これぞ熊本ならではの合宿なるべしと感服致しました。他
地区では出来ない研修でしょう。

今回を期に来年もまたということで取り組まれる意気込み
を頼もしく思います。

朝の集ひにて

いにしへも行き交ふ舟の多かりし不知火の海広こりて見ゆ
不知火の海にやさしき朝日さし舟のあなたに島々浮ぶ

充実した研修になりました

(菊陽町 福田 誠)

一泊二日の短期間でしたが、充実した研修になりました。
素晴らしいロケーションで天気にも恵まれ、講義、講話の内
容も大変よかったですと思ひます。

今村武人兄の講話は熱気がありましたし、伊勢雅臣先生の
講義では、大きな視野で日本の素晴らしさを教へて頂きまし
た。

小柳左門先生の講義はしみじみとした内容で、皇統を戴く
日本の国民としてありがたく思ひました。

初めて事務局として参加し、少しですが、裏方の大変さも
わかりました。

あしきたの海みわたせる高殿に学ぶ友らの集ひ貴し

みはるかす海の涯はたてに天草の島影たどらる霞みたれども

悠久の神代の昔ゆ受けつぎてきたる景色と思ふゆかしさ

世の中を見る目を磨き合ひ、それぞれ

疑義の一石を投じたいものである

(益城町 折田豊生)

「地球市民」に代はって「グローバル」といふ言葉が頻り

に使はれるやうになった。グローバル化を唱へる人々の意図するところは明らかだ。民族固有の文化（延いては国家）の否定、行き過ぎた個人の権利の主張（公共の軽視）等々、現実を無視した夢想的平等社会の啓発である。あらゆる場面において都合よく使はれるこの言葉の使ひやうによって得をするのはいったい誰なのであらう。ゲーテが「最も民族的なものが最も国際的なものである」と言ったのは二百年も前のことであるが、今の世にして顧みるべき至言である。

今回の研修のテーマは国の命運に関はる重たいものであったが、二つの講義と四つの講話は、参加者のそれぞれに明快な切り口を与へてくれたやうに思ふ。参加者それぞれの真摯な取組みにより、今後に明るい展望が開ける思ひがしたこと、企画した者の一人として、何よりも有難かった。

世の中を見る目を磨き合ひ、意図的なグローバル化に疑問もなく順応していく世相に対し、それぞれ疑義の一石を投じたいものである。

美しきあしきたの海眺めつつ学びし集ひの樂しかりけり
常の日は世界を股にかけめぐる友の講義のさやかなりけり
大御歌つばらに先輩が説かるるを聴きまつりつつ涙落ちけり
おのおの心尽くして訴ふる講話に心揺さぶられけり
思ふこと思ふがままに語り合ひし夜の集ひを忘れせぬかも
かしのみのひとつ心に学び合ひし集ひは早も終はらむとして
窓の外は遠くかすみて不知火のわだつ御神の鎮まりたまふ



閉会式 主催者を代表して白濱裕氏（本会参与、元 県立高校校長）は「研修後も、家族や友人にそれぞれの思ひを伝へ日本の文化伝統の精髓を後世に繋ぐ努力をしてほしい」と呼び掛けた。

「合宿教室」
主会場



第64回 全国学生青年合宿教室日程表 (主会場)

	8月 30日(金)	8月 31日(土)	9月 1日(日)	
6:00		起床・洗面	起床・洗面	6:00
7:00		朝の集ひ・散策	朝の集ひ・散策	7:00
8:00		朝食	朝食	8:00
9:00		講義 「聖徳太子に学ぶ日本人の心 — 維摩経義疏にふれて—」 西山 八郎 氏	創作短歌全体批評 岸本 弘 氏	9:00
10:00		班別研修	班別短歌 相互批評	10:00
11:00				11:00
12:00	(受付開始)	昼食	昼食	12:00
13:00	(13:00 開会) 開会式 オリエンテーション	学生・若手会員 所感発表 椎木 政人 君/高橋 俊太郎 氏	合宿をかへりみて 今林 賢郁 氏	13:00
14:00	講義 「われらにとって国家とは何か? — 新たな御代を迎えて考える—」 伊藤 哲夫 先生	短歌創作導入講義 森田 仁士 氏	全体感想自由発表	14:00
15:00	質疑応答 写真撮影	散策	感想文執筆	15:00
16:00	自己紹介・班別研修		短歌創作 (短歌提出)	閉会式 15:30 解散
17:00	夕食 休憩	夕食 休憩		17:00
18:00	講義 「『いま』を生きる者の使命 — 過去・『現在』・未来—」 山内健生 氏	講義 「日本の国柄と皇室祭祀」 大岡 弘 氏		18:00
19:00	班別研修	班別研修		19:00
20:00	入浴・休憩	入浴・休憩		20:00
21:00	就寝 消灯	就寝 消灯		21:00
22:00				22:00
23:00				23:00

第六十四回「合宿教室」(主会場)のあらまし

第一日目

(八月三十日・金曜日)

第六十四回全国学生青年合宿教室《主会場》は、千葉県柏市の公益財団法人モラロジー研究所「柏生涯学習センター」で開かれた。参加者は、東京や神奈川など関東各都県をはじめ、福岡県や佐賀県、富山県など全国各地から集まった。

開会式

合宿教室は早稲田大学教育学部四年、嶋田裕一君の開会宣言で幕を開けた。冒頭、主催者代表挨拶で澤部壽孫・国民文化研究会副理事長は自身の学生時代の合宿教室を振り返り、「万葉集の防人の歌が心に強く残った。こんなにも悲しく力強い歌があるのか。かうした心によって日本は守られてきた。先の大戦後、占領軍はこの美しい日本の心を消さうとした。私達はそれを取り戻す努力を重ね、祖先の心と繋がる体験をしなければならぬ。この恵まれた施設で、それに取り組みませう」と呼び掛けた。次いで、池松伸典運営委員長が「古典に触れると、君の心は生きてゐるのかと問はれてゐるやうで、古典の世界に呼び戻される思ひがする。さういふ経験をこの合宿で味はってほしい」と訴へた。

講義 「われらにとって国家とは何か―『令和の御代』を迎えてわが日本国家を考える―」

日本政策研究センター代表 伊藤 哲夫 先生



占領軍起草の日本国憲法は、日本の歴史を断罪し、平和と民主主義を掲げ、人権を守るために社会契約によって新たに国家をつくる、それが人類普遍の原理である、との認識を示した。日本そのものは一切視野の外におかれてゐたのだ。

ところが、今回の御代替りで、「令和」の大典が国書の万葉集であると聞いた途端に、日本人のDNAにはスイッチが入った。皇位継承の場で、神器が恭しく捧持される様子を目の当りにした。悠久の日本の歴史が感じられ、何か尊いものがあると感じた。これこそが本来の日本である。だが、憲法の認識が虚構だとまでは言はれない。憲法の認識を日本人が信じたのは米国をモデルと考へたからだ。だが、その米国も、実は英国の歴史を背負つてゐる。歴史の基盤なくして国家はない。フランス革命では歴史を否定し、全てを合理的にといふ狂気の中で殺戮が起きてゐる。

我々は単なる個人ではない。歴史といふ相続財産を後世に伝えていくべき駆伝チームの一員である。個人でも、誕生直後からの日本語（国語）のシャワーを浴びることで、日本人の脳細胞や感性が形成される。心の底に根をおろしたこの相続財産に目覚める時に日本人としての確信が生まれる。

実は明治時代初期にも欧米崇拜で歴史喪失の危機にあつた。明治憲法を作つた伊藤博文は、ドイツで歴史の重要性に目覚め、井上毅は古典研究で確信を得た。そして、憲法草案第一条に「日本帝国は万世一系の天皇の治す所なり」と立国の大義を掲げた。

歴史を最も正しく継承され、大切にされてこられたのは皇室である。「即位後朝見の儀」において、天皇陛下は「歴代天皇のなさりようを心にとどめ」とお述べになつてゐる。

講義後は質疑応答が行はれた。続いて講師と共に写真撮影。その後、参加者は宿泊寮の建物に移動し、各班ごとに最初の研修を行った。班別研修では、まづそれぞれが自己紹介し、伊藤哲夫先生の講義の内容を正確にたどりながら、講師の伝へたかったこと重要なことは何かを確認した上で、おのおのが思ふことを述べ合った。

『いま』を生きる者の使命―過去・『現在』・未来―

元 拓殖大学日本文化研究所客員教授

山内 健生 氏



題目にある「使命」であるが、キリスト教世界では「罰としての労働」観が、宗教改革で転換して、労働はGODのお召し（呼び出し）にお応へすることとなった。このプロテスタントの職業召命観をヒントにしたもので、『いま』を生きる者』には、先人の声なき声に耳を傾ける「使命」があるといふことである。

ことし来日した外国人は既に一千六百万人を超えて、日本人も九百万人が海外に出た。人の往来は盛んだが根本的に内外で喰ひ違つてゐることがある。安全保障で憲法上の制約を理由に自国の手足をどう縛るかで議論してゐる国は日本だけだらう。教科書まで「平和憲法」などと記述してゐるが、敗戦時の武装解除状態を法定化したものだ。日本の弱体化を企図する占領軍が草案を書いたものだから国防努力を否定してゐる。この憲法のもとでは自国の手足を縛ることが議論の前提となつてしまふ。帝国憲法の改正手順を踏んではゐるが、主権喪失の被占領期のものであるから、その前文は欧米の各政治文書からの引用で成り立ってゐる。日本の歴史とは無縁のもので、この憲法に拠つてゐては先人の声は聞えない。

今や当然のやうになつてゐる「現代かな遣ひ」も、被占領期のもので歴史との繋がりを見えなくしてゐる。国語表記の伝統に繋がる歴史仮名遣ひを「旧かな」などと呼んで軽視してゐる。憲法だけでなく日常の身近なところでも連続する歴史が断絶されてゐるのだ（皮肉なことに被占領下初期の日本国憲法は歴史仮名遣ひだ）。

民俗学の柳田国男は、国家は「現在生存する国民」だけでなく「我々の祖先」「将来生れる子孫」で構成されると言った。エドマンド・バークもG・K・チェスタトンも同趣旨のことを言つてゐる。福田恆存は「私達は歴史の子供なのだ」と言った。『い

『ま』を生きる者」が先人の心に思ひを馳せることは人間の人間たる所以であり、現在を生きる者の裡に「過去」があるはずであつて、そこから誇りも口惜しさも生じてくるし、将来への責務も出てくる。先々のあり方をどんなに強調してもそこから誇りや口惜しさが湧き出ることはないだらう。

過去との繋がりを断つてゐる日本国憲法を仰ぐべきものとして実施されてゐる「憲法学習」は単に非武装謳歌だけでなく、人としての生き方からも根本的な問題を孕んでゐる。

第二日目

(八月三十一日・土曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。研修棟(柏生涯学習センター)前の広場に集まり、参加者全員でラジオ体操をした。続いて折田豊生氏(元熊本市役所)により、明治天皇の御製四首の紹介・解説が行はれ、一同で拝誦した。四首は次の通りである。

惜春

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるここちこそすれ(明治四十五年)

天

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな(明治三十七年)

虫声非一

さまざまの虫のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは(明治四十四年)

寒草

おのづからたえなむとする冬がれのつたのかづらに嵐ふくなり(明治四十三年)

講義

「聖徳太子に学ぶ日本人の心―維摩経義疏にふれて―」

みどりヶ丘保育園園長

西山 八郎 氏



岡潔先生は松尾芭蕉や道元禅師のことを良く調べていくうちに自分が純粋な日本人であることに気付いたと言はれたが、古典の文章に触れることで私たちは自分の中に眠つてゐる日本人としての心を再発見することができる。

聖徳太子は、維摩経義疏の中で經典の「等しき慈」といふ言葉を「分別する所無き」と、如来となるための元となる「煩惱」について、「塵勞（俗世間の煩はしい苦勞）」と解釈され、仏教の教へを誰もが理解できるやう現実生活に即して読み解かうとされてゐる。

義疏の解釈を辿っていくと、太子が經典の研究を通じて、常に国民生活に思ひを寄せながら安寧と幸せを一心に祈られてゐた姿がしみじみと伝はつてくる。

義疏を読んで、何か心と呼び掛けてきた箇所があつたなら、太子の心が届いたといふことであり、心の中に太子の心に通じる日本人の心が残つてゐたといふことである。それは不思議なことではない。私たちの心は両親の心の揺りかごに育まれた心であり、この日本列島に生き続けてきた多くの日本人に連綿として受け継がれてきた心を、今に受け継いでゐるのが私達だからである。そのことに気付くかどうかは私達次第だ。

学生発表

早稲田大学基幹理工学研究科博士課程一年

椎木 政人 君



本居宣長の「うひ山ぶみ」を読んで感銘を受けたのは、「栓ずるところ学問は、たゞ年月長く倦ずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、学びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみかゝはるまじきこと也（中略）とてもかくても、つとめだにすれば、出来るものと心得べし」といふ箇所だ。本居宣長は学問に対して「はげみつとむる」ことが大事であると繰り返し言っているのだと私は考へてゐる。

そして「倦まず怠らずはげみつとむる」といふ学問に対するまっすぐな態度は、私の研究に生かされてをり、研究とはかうすれば成果が出るといふやうな方法論があるわけではなく、「倦まず怠らずはげみつとむる」態度が大事であると日々身に染みて感じてゐる。

若手会員発表

(株) エイチ・アイ・エス本社情報システム本部 高橋 俊太郎 氏



大学時代の輪読会で読んだ吉田松陰の『講孟箴記』の「序」に「道は即ち高し、美し、約なり、近なり。人徒其の高く且つ美しきを見て以て及ぶ可からずと為し、而も其の約にして且つ近、甚親しむ可きことを知らざるなり」とある、この「約なり、近なり」といふ点から学んだことを実践するために、「社会の土台を守るエンジニア」を志した。社会人になり、日々の多忙な業務の中でも当初の志（初心）を思ひ出す場として、学生時代に参加したこの合宿がある。近年転職活動を続けたが、その過程でも初心をあらためて確認した。引き続き社会の土台を守る仕事を続けていきたいと思つてゐる。

短歌創作導入講義

新門司病院診療放射線技師 森田 仁士 氏



短歌創作の意義は、自分の作歌体験からも「自分の感情を短歌に表現することで、その体験の意味や価値が分かって来る。その積み重ねから、自分の心を知ることが出来る」といふことだ。敷島の道について夜久正雄先生は御著書に「和歌は修養。鏡に自分の姿を映すのと同じやうに、心をうつして、人の心を養ふ力があると記されてゐる。万葉集の防人の歌や東歌、源実朝の歌を読み味はって欲しい。

短歌創作時の注意点としては、感じたことを正確に、一首一文で詠む。歌の「焦点は一つで、一つの文章で一つの歌」が構成される。長塚節の「垂乳根の母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども」の短歌のやうに日常の小さな出来事からでも優れた歌は生れる。

短歌によって他者との心の交流がなされる。この合宿で共に学んだ友人の故・山根清君（防衛施設庁勤務）は、仕事で幾度も訪れた硫黄島での平成十五年の慰霊祭の際、「追悼の辞」を奏上してゐる。そこには、栗林忠道中将の辞世の歌と慰霊のため、平成六年、硫黄島に行幸なされた折の天皇陛下のお歌が引かれてゐて、時空を越えて陛下と英霊と山根君の心を通ひ合った世界を偲ぶことができる。もちろん友人や知人との間の心の交流もなされるが、山根君が報道関係者を前に、島の歴史と英霊の慰霊を語った折の「友どちゆたびし短歌をば御守りとポケットに入れ語りゆきけり」との歌から察せられる友人との歌による交流には感銘を受けた。

先づは「うまく」詠まうとするよりも「正確に」詠むやうに心がけることが大切だ。

散策（短歌創作）

短歌創作に先立ち、国文研会員の小柳左門氏編『親子で楽しむ新百人一首』を使つての「かるた会」を各班ごとに行つた。読み手の歌に耳を傾け、歓声を挙げつつ「かるた取り」を楽しんだ。

その後、創作の時間に移り、班ごとにモラロジー研究所の敷地内を散策した。中にはモラロジー（道徳科学）の創唱者である廣池千九郎氏の記念館を訪れる班もあった。幸ひ好天に恵まれて、様々な木々が植ゑられた緑濃い自然豊かな環境の中でゆつた

りとした時間を過ごすことが出来た。

講義 「日本の国柄と皇室祭祀」

元 新潟工科大学教授 大岡 弘氏



日本の国柄の特徴は、日本人が独自の民族信仰を持つてゐることである。その民族信仰の根幹をなすものは、天皇陛下の御存在と天皇祭祀である。

天皇祭祀は、大別すれば、宮中での皇室祭祀（親祭祭祀、親拝祭祀）と、伊勢の神宮での神宮祭祀（代行祭祀）に分けられる。毎年行はれる恒例の皇室祭祀の中で最も重要な祭典は、十一月二十三日の夕刻から宮中の神嘉殿で行はれる「新嘗祭」である。

本年は、特に、十一月十四日の夕刻から十五日にかけて、即位継承儀礼の一環として大嘗祭が行はれる。

大嘗祭とは、新帝陛下が一世に一度、即位後に齋行される大規模な新嘗祭のことである（ここで講師は、まづ新嘗祭について詳しく説明し、次に大嘗祭と新嘗祭の相違点について説明した）。明治政府は、記紀万葉時代に確立された天皇祭祀を見直し、近代中央集権国家にふさはしい皇室祭祀制度の拡充を図った。それは、祭日・祝日の制度や皇室祭祀令、登極令となつて結実した。

戦後、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領政策によつて、皇室祭祀は、教育の場や国民の祝日から切り離され、記紀神話とともに、国民の間から忘れ去られようとしてゐる。令和の御大札を機に、我が国独自の民族信仰を思ひ起さなければならぬ。それは令和の御代に生きる我々の務めであらう。

第三日目

（九月一日・日曜日）

「朝の集ひ」が行はれ、短歌鑑賞では、青山直幸氏（元三菱地所（株））が、川出麻須美の歌を紹介、一同で唱和した。紹介された歌は次の通り。

羽根折れてつちに落つとも生けるまは光れほたるこあめのまにまに

世にあるもなきも同じぞたまきはる命はかよふ万代よろづよまでに

墓碑銘

極きげまればまたよみがへる道ありていのち果てなし何かなげかむ

創作短歌全体批評

元 富山県立富山工業高等学校教諭 岸本 弘氏



前日の「短歌創作導入講義」のあとの散策の時間に詠まれた参加者全員による短歌がお手許に配布した十三頁からなる「歌稿」にまとめられてゐる。この「歌稿」をもとに行はれる「班別短歌相互批評」では、どんなことを大切に語り合ふべきなのか。この合宿教室で行はれてゐる「班別輪読」や「短歌の相互批評」は、遠くは聖徳太子が三経義疏を編纂なさった過程にまでさかのぼることが出来るやうに思ふ。互に相手の言葉に耳を傾けながら正確な表現を求めて語り合ふ場であるからだ。

歌稿の中の、男子学生の詠んだ「みづからのところに刻みし先人の歌聞こえしときのうれしかりけり」といふ歌や、「お互いに思うところを語り合う皆と過ぎ行く時間の早し」との女子学生の歌が心に留まつた（いづれも提出歌稿のまま）。平生使ひ慣れてゐない文語体で歌を詠むとき、かな遣ひや文法の誤りは往々にしてみられるが、それは相互批評などで指摘されたときに一つ一つ学んでゆけば良いことである。それよりも何よりも、相互批評で大切なことは、素直に正確に、作者の気持ちが表示されてゐるだらうかといふことであらう。合宿後も継続して短歌に親しんでいきたいと願つてゐる。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝えることの難しさ、また人の言はうとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを学んだ。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にするため力を尽し、自分の心、相手の心をじっくりと見詰めるといふ貴重な体験をすることができた。

「合宿をかへりみて」

公益社団法人国民文化研究会理事長 今 林 賢 郁 氏



第一日目伊藤哲夫先生の御講義では、国家には歴史的基盤が必要であり、令和への御代替りで国民が歴史意識に目覚め、「DNAのスイツチが入った」と説かれた。山内健生氏の講義では、今を生きる者の使命を説かれ、私たちは「歴史の子供」であり、「歴史に仕へる」との言葉に心を打たれた。この二つのお話に共通するのは、現行憲法の価値観を打破し、歴史に連なる日本を取り戻す、といふことであった。

第二日目の西山八郎氏の講義では聖徳太子の維摩経義疏を読み味はひ、古典から何かを感じたらそれは「歴史につながってゐる」ことの証しであるとされた。また大岡弘氏の講義からは、新嘗祭や祝祭日により皇室祭祀を学び、我々は古より独自の民族信仰を持つてゐたことを実感した。

これらの御講義で明らかにされたことは、戦後の「七十四年のわが日本」の姿は本来のものではなくて、歪いびつであり、私たちは先人の文献や古典を通じて二千年の歴史を持つ日本を取り戻さなければならないといふことである。

歴史を正しく知り、歴史に自信を持つ国民だけが国を支へることができる。合宿教室が終り、それぞれの持ち場に戻つても学

びを続けていくことが日本を取り戻すことに繋がる。

全体感想自由発表

登壇した参加者からはこもこも左記の感想が述べられた。

「日本の歴史を見つめ直し、歴史に基づいた自分の使命について考へた」「日本についてしっかりと理解するために歴史を学んでいかうと思った」「先人の意思を受け止めて歴史を尊重するため、正しい歴史の学び方を身に付けたい」「古典の原典に触れ、自分の感性と照らし合はせつつ、仲間と議論を深められて良かった」「聖徳太子がどんな人にも等しく真心をかけるべきであるといふ思ひを持たれてゐたことを知り感銘を受けた。私もそのやうな人になりたいと思った」「国家は歴史基盤があつてこそものといふ話が印象に残った」「万世一系という観点から日本をつなぐための先人達の努力が垣間見られてよかった」「講義後の班別研修では、さまざまな年齢層の考へ方を聞けた上、議論を通じて初学者であっても講義の内容について理解を深めることができた」「これまで自分で短歌を詠むことはなかったが、今回の合宿でも刺激を受けた。今後は自分も短歌を詠んで行きたい」

閉会式

国歌斉唱に続き、主催者を代表して小柳志乃夫国文研副理事長が「感想自由発表の言葉に心を打たれた。この合宿では、日本の歴史を貫く『縦』の世界を学んだ。また、短歌相互批評では、素直な言葉が人に伝はる事を体験された。この内なるものを大事にしてほしい。合宿後は現実の『横』の世界に戻るが、目に見える一步を踏み出すことから始めたい。全体発表での『国旗掲揚といふ、できることから始めたい』との言葉が有難かった。また、各地の短歌の会や輪読会などを通して学びとつきあひを深めて頂ければと思ふ。祖国、学問、人生を総合的に学ぶこの合宿は稀有だと思ふ。来年もぜひ参加してほしい」と述べた。

最後に奈良大学文学部一年、大津圭吾君が閉会宣言し、合宿教室（主会場）の全日程が終了した。

合宿運営

【本部】

運営委員長

若築建設(株)

エムジーリース(株)

元(株)アルバック

池松 伸典

小柳志乃夫

北濱 道

【指揮班】

指揮班長

(株)茨城新聞社

医療法人豊司会新門司病院

(株)アイセルネットワークス

(株)エイチ・アイ・エス

佐川 友一

森田 仁士

最知 浩一

高橋俊太郎

【事務局】

事務局長

国民文化研究会事務局長

国民文化研究会職員

元 東急建設(株)

埼玉県庁企業立地課

磯貝 保博

栗方惠美子

奥富 修一

飯島 隆史

走り書きの感想文

これは閉会開きはの三十分余で参加者全員に、二泊三日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。



第一班(男子学生)

真に歴史を学ぶ意味を感じた

(奈良大学 文 一年 大津圭吾)

私はこの合宿教室で真に歴史を学ぶ意味を感じ取りました。私は大学で歴史(世界史)を学んでいます。初めてこの合宿教室に参加して、知らないことが多すぎると反省しました。今回、憲法について考える機会が多くありました。私は政治は特別な能力を備えた人だけが担って、一般市民は実際に政治を動かすわけではないからあまり考えなくても良いだろうと思っていました。ですが、講義を受けるうちに、これは自分を含めて日本人として生まれた者全員が考えるべきことなのだと感じました。私はこれまで歴史と現在とを結びつけて捉えています。古代から現在まで続くものがあるからこそ、今考えるべきことがある。また、今現在のことだけを考えていては将来のためにならないのだと、この三日間学ぶ中で痛感しました。私が今なすべきことは、歴史を知り、正しく考え、これからの日本をどうしていくかを考えることだと思います。世界に誇れる日本人になりたいと思いました。

全体感想発表の折に

緊張し言葉出で来ずもどかしく何を言ひしか分らざるなり

これからも歴史の学び続けむと胸に抱きて故郷目指さん

閉会式で閉会宣言を担当して

恐縮し言葉足らずで宣言し胸焦がしつつ故郷目指さん

日本に生まれることと日本人であることは違う

(中村学園大学 教 一年 佐々木俊治)

私は初めてこの合宿教室に参加させていただきました。今まで小学校、中学校、高校と勉強に励んできましたが、今回の講義内容はどれも初めて聴くものばかりで、勉強の足りなさを痛感しました。講義を通して、日本の歴史を知らずして日本を語ることはできないのだと思いました。ある方もおっしゃっていました。日本に生まれるということと日本人であるということは少し違うことなのだと感じました。

班別研修では、最初は口数の少なかつた班員のみんなや、班長、班付の方とも時間が経つにつれて日本の歴史について語り合うことができるようになりました。日本について「知る」ことを通して日本の歴史を「理解する」ことができたと思います。将来私が教師になつて教える側に立つた時も、歴史を知らずしては日本のことは語れないと感じました。ぜひ今後も合宿教室に参加したいと思いました。

日本とは歴史なくして語れない今回を機に勉学励む

歴史について語り合ひたる三日間は我が人生の宝となるらむ

先人の想いに応える私でありたい

(長崎大学 環境科学 三年 植田祐樹)

「歴史なくして国家なし」という伊藤哲夫先生の言葉が心に残りました。私は日本国憲法に正しい歴史が書かれていないことが当たり前になっており、違和感を感じていませんでした。歴史を学ぶことの大切さが今の日本では教えられておらず、どこか歴史を軽く扱っているように思えます。今の日本があるのは先人たちが懸命に国を守ってきたからだと、いうことを忘れず、先人の想いに応えられる私でありたいです。また私は憲法改正はすべきだと思っていました。では具体的にどのように変えたいのか、自分のはっきりした意見を持つていませんでした。伊藤先生のように、疑問を持つたらとことん追求していく学問の姿勢を持ちたいと思いました。まずは現行憲法、そして大日本帝国憲法について勉強したいと思えます。

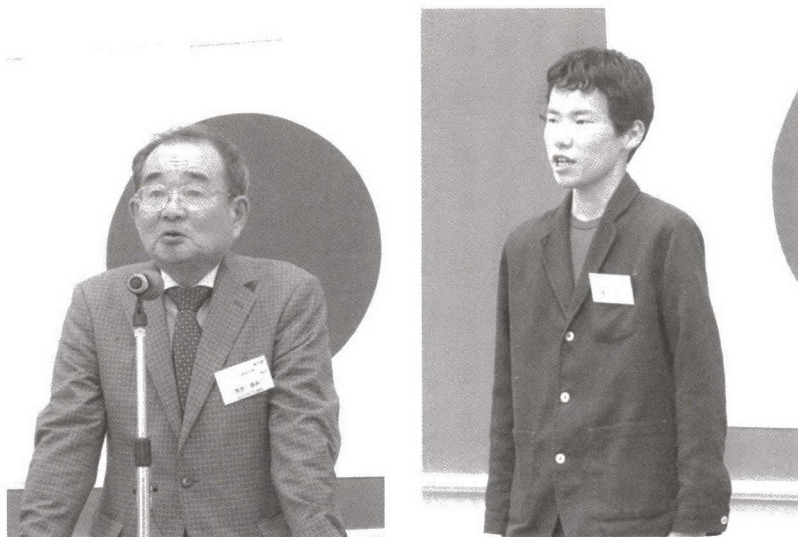
先人の築きし歴史を憲法に刻みゆくため吾たたかむ

初めはとても不安だったが…

(九州共立大学 経 四年 内海 徳)

私は今回初めて合宿に参加させていただきました。今までこういったお話しや短歌に触れたことがなかったので不安な

カメラ・レポート1



開会式 早稲田大学教育学部四年の嶋田裕一君(右)の開会宣言で合宿教室は幕を開けた。主催者を代表して澤部壽孫副理事長(左)は、「私達は、占領軍に消された美しい日本の心を取り戻し、祖先の心と繋がる体験をしなければならない。この恵まれた施設で、それに取り組みませう」と述べた。

気持ちもあつたのですが、先生方に分かりやすく説明していただき、その後の班別研修で私に分らなかつたことや、どういうことを意味しているかなどをみんなで話し合い、説明していただいたのでよく理解できました。

短歌も初めて詠みましたが、相互批評でみんな意見を出べ合つて、短歌と真正面から向き合うことができたのでとても勉強になり、同時に短歌をもっと知りたいと思ひました。この貴重な体験をこれからの自分の将来に活かして、もっと学ぼうと思ひました。

喫煙所にて

タバコ吸ひ話のはづみまた一人仲間ができて楽しくうれし

心に残つた伊藤哲夫先生のお言葉

(福岡教育大学 教 四年 土井一鷹)

伊藤哲夫先生の御講義が非常に心に残つた。「国家は歴史の基盤がなければ成り立たない」との言葉が印象に残つた。班別研修で、古事記にはどんなことが書かれているかと尋ねられたとき、何となくは覚えてはいるが語れない自分に気付いた。そして日本の歴史が全く表されていないのが現行憲法なのだというのを再認識した。今の憲法は変えなければならぬとの思いを持っていたが、それは国防の観点からのみであつた。しかし伊藤先生の「国家は歴史の基盤があつてこそ」という言葉、そしてその後の班別研修での「我々が作りた

本にとつての理想の憲法とは何か。歴史を学ばなければ理想の憲法の姿も見えてこない」という言葉を聞き、日本の成り立ちや国柄、皇室についての学びを深めたいと思つた。日本に生きる国民として、「日本人」たるべく努力していきたい。先人の残されし文や言の葉ゆ日の本の歴史しのびゆきなむ

強い気持ちで学生生活最後の合宿に臨んだ

(早稲田大学 教 四年 嶋田裕一)

今回は学生生活最後の合宿だったため、これまで参加してきた合宿でできなかったことを成し遂げるんだ!という気持ちで臨んだ。具体的には「緊張せずに自分の気持ちを論理的に伝える」「講義後に先生に質問をする」ということである。前者についてはある程度できたと思う。論理的にはともかく、あまり緊張せずに自分の意見を伝えることができた。来春からは社会人になるため、これまでの合宿とはまた違つた経験ができるだろう。それを楽しみにしながら、一年間精進していきたい。

学び舎で出会ひし友らと語るうちいつしか心の友となりゆく

先生方の御言葉が重なつて迫り来た

(税理士法人あおぞら 北村公二 52歳)

憲法について歴史について語られた先生方の御言葉がそれ

ぞれ期せずして重なって迫ってくる、そのやうな合宿教室でした。

班員たちもそれぞれ自分なりに御講義の内容を受け止めようと努めてくれ、有難く思いました。「これからもっと勉強して行きたい」「来年も参加したい」と感想発表をしてくれた学生諸君の言葉は何よりも嬉しいものでした。

全般に亘ってサポートしていただいた班付きの折田豊生さん、どうも有難うございました。

山根清先輩のお歌が講義で紹介されるのを聴きて

ありし日の大人の御姿まなかひに浮び来るなり歌の言葉に

大津圭吾君の恩師絹田洋一さんに

壇上に上りて思ひをとつとつと語る姿を見せしと思ふ

共にタスキをつないで行きたい

(元 熊本市役所 折田豊生 68歳)

合宿も終り間近となり、若い参加者の皆さんの所感発表を伺つてみると、何とも言へない有難さに恵まれる。慌しい日程の中で交した言葉はそれ程多い訳ではないが、共に抱へた課題は国家の根幹に関はるもので、力を共にしなければ支へ切れないものである。老いも若きもない駅伝の混成チームの一員として、それぞれのチームの責任を果たすまで。カ一杯、そして楽しみ乍ら、先輩方から預つたたすきを若い友らへつないでいけるやう努めて行きたい。



オリエンテーション 池松伸典合宿運営委員長(右)は「古典に触れ、古典の世界に呼び戻される思ひを味はって欲しい」と示した。佐川友一合宿指揮班長(左)は、合宿生活を送る上での諸注意を説明した。

全体所感発表

壇上に思ひ定めて登りゆくその胸のうち思ひやるかな
言の葉につまりながらも懸命に語らむとする友のいとほし
一人立てばまた次ぎて立つ壇上の友の姿を嬉しく仰ぐ
学び得し喜びこれより学ばむと語る言の葉光るがごとし

森田仁士大兄の御講義を拝聴して

君が説くしきしまの道へのいざなひは明るくやさしく温かな
るかも

数々の名歌引きつつこまやかに歌のいのちに迫るみことば
亡き友のみふみ読むさの君がおも仰ぎもあへず胸のふるへて
心込め友らとかたみに呼び交すまことの歌の道聴きまつる

第二班(男子学生)

「塵労を猶ほ仏種と為す」との言葉を心に刻んで

(全日本学生文化会議 清川信彦 29歳)

今回の合宿教室では、維摩経義疏の「塵労を猶ほ仏種と為す」との言葉が心に残りました。仕事や日常生活の中で、煩わしいと感じることやきついと思うことに対して、逃げたい、避けたいと思うことが多々あります。しかし、聖徳太子は、そのような「塵労」を、これから芽を出し、生長していく種と捉え、「善は悪に由りて起り、善として自ら生ずるはなし」

として、前向きに捉えていたことを知って、私もそのように受け止め、毎日を前向きに生きていきたいと思いました。

万世一系の皇統を守ることや他国の侵略から国を守ることなど、さまざまな課題が山積している日本の現状ですが、「塵労を猶ほ仏種と為す」との聖徳太子の言葉を思い返し、日本はこれから必ずよくなっていくとの確信を持つことができました。

短歌相互批評

お互ひに心の内をありのまま語らふときぞ楽しかりける

合宿でのかけがえない学びを人生の糧として

(九州工業大学 情報工 三年 桑野雅行)

自分は、合宿で学んだ憲法も、聖徳太子も、皇室についても、今まで勉強したことがありませんでしたし、短歌も触れたことはありませんでした。今回の合宿で初めて学ぶこと、聞くこと、考えることの連続で、初日はついていけないかとても不安でした。

しかし、講義とその資料をもとに行う班別研修では、自分とあまり年齢の離れていない人達のしつかりとした考え方を聞き、自分のような知識不足の者にも分かりやすく、発言することができる討論の場がありました。

今回の合宿を通して得られたことはたくさんありました。知識と考察、それを人に伝えようとした経験、短歌をつくる

ために使った時間、そのすべてがかげがえのないものになったと実感しています。この合宿で得たことを必ず今後の人生の糧にしたいと思います。

合宿を終へて得たのは数あれどまづ浮ぶのは友への感謝

自らを省みる機会となった

（早稲田大学大学院 基幹理工学研究科 一年 椎木政人）

初参加の合宿でしたが、学生発表をさせて頂き、貴重な講義を聞かせて頂いて、とても有意義な合宿でした。

ただ、それ以上に、自らを省みる機会を頂けたことが非常に良かったと思います。

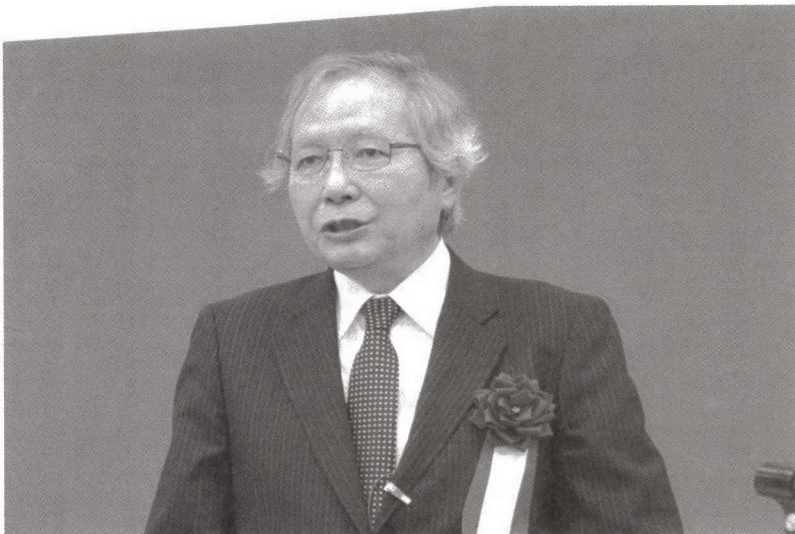
今回の合宿は、「温故知新」がテーマでしたが、日本には自分の知らない「温故」する歴史が多くあることを改めて感じさせられました。それらの原文に触れ、声に出して読み、それらを議論し、また自分が感じたことだけでなく、他の人の感じた意見を取り入れることで、さらに理解を深めてゆく「知新」もしっかりと出来たのではないかと思えます。

仲間らと声を出し読むいにしへのふみより学ぶ日本のこころ

太子の心を学んでいきたい

（長崎大学 教 四年 戸川裕介）

聖徳太子の維摩経義疏の中の「等しく慈をもつてし分別す



講義 伊藤哲夫先生は「我々は単なる個人ではない。歴史といふ相続財産を後世に伝えていくべき駆伝チームの一員である。個人でも、誕生直後からの日本語のシャワーを浴びることで日本人の脳細胞や感性が形成される。そして、心の底に根をおろしたこの相続財産に目覚める時に日本人としての確信が生れる」と強調された。

る所無きことを明かす」という文章が大変心に残りました。聖徳太子については、二年前に勉強し、太子がどれほど大変な状況に置かれていたかを知っていたこともあり、どのような人でも慈をもつて接するという太子の言葉が、一層重みのある言葉として感じられてきました。その太子の心を学んで、自分も他のサークル員にみんな平等に、まごころをかけられるような存在になっていきたいと思いました。

日の本の歴史伝統守るためこれから先も学んでゆきたし

普段学べないことを多く学んだ

(中村学園大学 流通科学 一年 山口大輔)

今回の合宿を通じて、私は普段学ぶことができないことを多く学べたと思う。まず講義である。私は今まで維摩経義疏も、憲法についても、皇室祭祀についても全くとって良いほど学んでいなかった。正直、今まで年上の方々が憲法のことについて熱く語っていることも理解せずに生活してきた。しかしそれは、大変な間違いだと思った。なぜ憲法改正を強く言っているのか、今の憲法の問題点は何なのか、皇室で行われている祭りや仕事はどういったものなのか、そもそも天皇とは何なのかなど、多くの問題を知ることができた。

次に、講義の後の班別研修も素晴らしいものだった。知識も何もないまま、今回の合宿に参加した自分が得た知識・見方は正しいものだったのか、確認することができ、さまざま

な年代の方がその問題に対して、どのような見方やとらえ方をしているのか学べ、様々な観点から、その問題を吟味し、納得したり、悩んだりすることができた。

聞き慣れぬ言葉も多く学ぶれど忘れてなるかと内で復誦す

友らと共にこれからもしきしまの道を歩みたい

(宮崎県弁護士会 砂川高道 25歳)

各講義では、先生方が究められた分野・専門について、直接伺ふことができ、十分に消化したとはいへませんが、今後の糧となる多くの事柄に触れることができました。講義後の班別研修では、班付の青山直幸さんも加はり、時には白熱、時には爆笑の議論が生まれました。

短歌創作では、緊張し、悩みながらも一〇二首捻り出すことができ、森田仁士先生や班員の皆様の温かい助言を頂くことで、しきしまの道を歩む準備・気概が整ったことを実感しました。

麗澤の地にて学びし朋ともがらと共に歩まんしきしまの道

自分の生き方を見つめ直した三日間

(菊地建人 29歳)

五年ぶりの参加となったが、今回も自分の在り方、生き方について見つめ直し、また、新たなことを学ぶ非常に良い機

会であったと思う。

まず、様々な講師の方々から、今まで知らなかった事柄を教えていただき、また、日本の国、我々が如何にあるべきかということについて、鋭い示唆を与えていただいた。伊藤哲夫先生、山内健生先生からは、日本国憲法の存亡問題点等について、西山八郎先生からは、維摩経義疏を例に挙げ、聖徳太子の御心について、大岡弘先生からは、日本の国柄というものについて、そして、森田仁士先生、岸本弘先生からは、短歌の詠み方や味わい方等について、教えていただいた。

来るにつけ新たな気付きを賜りて再び来ばや合宿教室

班員とありのままに心の内を語らひて

(元 三菱地所(株) 青山直幸 70歳)

今回の合宿は、伊藤哲夫先生のご講義に始まり、テーマが国家の基盤たる歴史、日本の国柄、そしてその根幹をなす天皇陛下の御存在と皇室祭祀と一筋に一貫したものとなってをり、参加者にとって、理解し易い流れになってみたと思ふ。運営委員の企画に感謝したい。

班員は、学生、社会人が混在し、年齢の差が多少あったにもかかはらず、最初から、きさくに言葉を交し合ひ、率直に意見を述べ合ふことができた。班長のリードもあって、議論の焦点をぼかさずに、各自の思ひをありのままに引き出すことができ、時間がたつのを忘れる位であった。



班別討論 講師の最も伝へたかったことを確認し、その上で各々の思ふことを論じた。

班別短歌相互批評にて

初めての作品なりしといふ歌を心を込めて共に読みゆく
言の葉の一つ一つを選びつつ作者の気持に添ひてゆくなり
心ぬちに沸きし思ひに適ひたる言葉見出し皆で喜ぶ
良い歌になりぬと皆で讃へたればしらず明るき笑み浮かびたり

川出麻須美の和歌を自らの生き方と重ねて

(元 福岡県立直方高等学校教諭 小野吉宣 72歳)

二日目の朝のつどひで折田豊生君の明治天皇御製の解説を
聞き、皆で一緒になつて声を上げて御製を拝誦したことは、
大変有難かつた。

三日目の川出麻須美の三首の歌の解説も良かった。「羽根折
れてつちに落つとも生けるまは光れほたるこあめのまにま
に」との和歌に詠まれてゐるほたるは、他ならぬ自分自身の
ことのやうに思はれてならない。「光れ吉宣あめのまにまに」
で地に足をしつかりつけて生きてゆかねばと思ふ。

森田仁士学兄の『しきしまの道』へようこそを聴く折に
美声もて講義したまひ「はい次へ」と皆をひき寄せ次に進みき
もやもよとかすむ思ひは消え去りてあきらかに知る我心をと
参加せる学生さそひ「しきしまの道」の修練始めゆかめや

第三班(女子)

先人に自分の心をよせていきたい

(佐賀大学 農 三年 伊藤陽奈子)

三日間を通して、日本の歴史をより学ばなければならぬ
と思ひました。「私たちは歴史の子供であり、歴史は親であ
る。」という言葉を軸にこれからの学びに励んでいきたいです。
親である歴史を自分に伝えさせたり雑に扱うのではなく、
丁寧に向き合い先人の心に自分の心を寄せていきたいと強く
思ひました。

占領政策の期間は終わったものの、日本人の心は占領され
ているかのように日本の伝統や皇室の存在をないがしろにし
ていると感じます。その実態に気付くことさえできない今を
どのようにして変えることができるのか、を常に考え自分か
ら行動を起こしていきたいと思ひました。

正直、聖徳太子の姿などまだ分からないことが多くありま
した。しかし、分からないから考えないのではなく知らない
者同士で共に学んだりして一人でも多くの日本人の姿を心に
刻みたいと思ひます。国家とは、歴史基盤があつてこそです。
一つ一つの歴史に付き合い先人の言葉に触れ日本人の心を自
分に蘇らせたいです。三日間有難うございました。

天照す日の大神の守りますす日の本の歴史さらに学ばん

心に残った岡潔先生のお言葉

(福岡教育大学 教 三年 幸地梨香)

西山八郎先生の資料にあります岡潔先生の「その民族の色どりと、その人の心の色どりが一致する人を、私は純粹な日本人といっているわけです。」といふ言葉が心に残りました。私は福岡に大学進学してから沖繩出身といふことに囚はれてゐます。日本人と沖繩の人は少し違ふと感じる中で自分が日本の歴史・伝統・文化に感動してしまふことに罪悪感を感じてゐました。しかし、聖徳太子の維摩経義疏を読み、心を知ると、私も常にそのやうな心でありたいと強く思ひました。そのやうに感じた後、再び岡先生の言葉に触れるとやはり沖繩出身であっても日本人の心はあつて呼び覚ますことは出来るのだと思ひました。何があつても十万年は日本民族の心の色どりは変はらないのだと思ひます。米国に占領されたり、憲法を虚構のものにされても。しかし、確実に米国産の虚構憲法の影響は出てをり、歴史を蔑ろにし自分達がおかれてゐる現状も知らず、再び外国に祖国を奪はれる一歩手前となつてゐます。学生時代に深く祖国の歴史を学び、日本人としての誇りと使命を持つていきたいです。そして日本、沖繩を護るために憲法改正にむけて取り組んでいきたいです。有難うございました。

民族の心の色どりを学び日本人と胸張り言はむ

カメラ・レポート5



講義 山内健生氏は先づ題名に挙げた「使命」について、キリスト教世界の「罰としての労働」観から転換したプロテスタントの職業召命観（労働はGODのお召しにお応へすること）をヒントにしたとし、「『いま』を生きる者」には先人の声なき声に耳を傾ける「使命」があるとした。

西山八郎先生の講義が心に残った

(國學院大學栃木短期大學 教 二年 佐藤理那)

私の父が会員であり高校の社会科の先生で、中学や高校の社会を試験前に教えてもらった事がありました。その時に、学校では習っていないことを言われて、試験前に困惑し、説明の途中で教わるのをやめました。

今回合宿に参加するきっかけとなったのは、父が「真実を自分で見極めないと子供の前に立った時に説明できない」と言った言葉が心にささり真実を知りたいと思ったからです。

三日間の合宿中の講義で一番心に残ったのは、西山八郎先生の『聖徳太子に学ぶ日本人の心』です。私が学校で習った聖徳太子は、仏教を広めた人だったのですが、仏教を広めただけでなく日本にあったやり方を悩み求められていたことを班別研修で知りました。講義の中にもある『日本人の心』としては、今は震災などが起きて水をもらうために一列に並ぶのが日本にとって当たり前ですが、海外の人にとっては驚かれることで、これは国の個性であり先人が築き上げて下さったものだと思われかされました。また、「これはしてはいけない」と自分で気付くことができるのは『言葉のシャワー』のように幼い頃からの日本人としての心があるからなのだと思います。聖徳太子という一人の人物から学べるのが沢山あったことを今回初めて知ることができました。私は父の説明を

途中で止めてしまいました、きちんと最後まで聞いたり、今回学んだことを次の世代に教えていこうと思いました。

国のこと聴けば聴くほどおもしろくさらに詳しく次を知りたい

新たな気づきに更なる勉強を

(元北九州市立小学校教諭 久米由美子)

とても貴重な充実した三日間を過ごさせていただき誠にありがとうございました。運営に当たり細やかな準備を長きにわたりしていただいた池松伸典運営委員長をはじめ事務局の皆様誠にありがとうございました。

講義をしていただきました伊藤哲夫先生、山内健生先生、西山八郎先生、森田仁士先生、大岡弘先生、岸本弘先生、今林賢郁先生、誠にありがとうございました。どの講義も心こもるすばらしい講義で新たに気づかされたことが多々ありました。これから、私自身ももっとしっかり勉強し少しでも伝える人間になりたいと思います。

班では、若き方、経験ある女性の方、素晴らしい先輩先生方にいろいろお話をお聞きすることができ楽しい時間となりました。この合宿がこれからも多くの若人を招きつつ末永く続けていかれることを望んでやみません。私自身も新しき人をお誘いできるよう努めてまいります。ありがとうございます。

若きらの語る言葉の頼もしく明日の日本と力強けり

学んだことを若い学生に伝えられるようになりたい

(太成殿本宮 高見澤玉江)

今回の合宿では、自分が学ぶだけでなく学生の皆さんに対してどの様に接するかを課題に参加しましたが、意識はしても短歌に詠んだ通り力不足を痛感しました。しかし、日頃から年配者の多い環境のため、この合宿は実に貴重な場です。学ぶことそのものはいつまでも尽きないとはいえ、自分より若い方の思うところを聴く、引き出す、といった交流を身につけつつ、学んだことを伝えることが出来るようになりたい、と改めて思いました。

また、短歌の相互批評では、自分で引き出しきれなかった部分を先生方、班員の皆さんに大いに助けて頂き、感謝するばかりです。率直に、正直に、簡潔に、自分の思いを伝えられるよう訓練し、これからまた歌を詠む力を養いたいと思います。

合宿でお世話になりました全ての皆さまありがとうございます。言の葉に素直な心をうつしゆく力つけたし学び続けました。

若い学生さんに大きな希望を感じた

(寺子屋モデル 武田真理子)



朝の集ひ 合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。研修棟（柏生涯学習センター）前の広場に集まり、参加者全員でラジオ体操をした。続いて折田豊生氏により、明治天皇の御製四首の紹介・解説がなされ、一同で拝誦した。

今回二回目の合宿に参加させて頂き、日頃私は福岡の寺子屋モデルで山口秀範先生の勉強会等を通して色々な日本の事を学ばせて頂いています。その一つ一つを更に深める事ができました。私達にとつて国家とは何か、歴史の基盤を持つ事の大切さ、講義の一つ一つがとても勉強になりましたが、「我々は歴史の子供である」ということと「民族の心の色どりは十万年続く」という言葉が特に心に残り、目を開かれた心地がしました。西山八郎先生が講義の始に「ハイ、パンと手をたたきますから心の基本ソフトを入れ替えまっさらの心で憲法の事も考えましょう」というような事を仰いました。魔法のように一瞬に入れ替えは難しそうですが、今回の合宿が私にとつて大きなヒントになった事だけは確かだと思えます。これからも倦まず弛まず私なりに学びを深めていきたいです。又若い学生さん達の素直でまっすぐ日本の事を学び愛しておられるのを肌で感じ、日本の将来明るいなど、大きな希望を感じとても嬉しかったです。

短歌創作と相互批評もとても楽しく有意義な体験でした。
爽やかな合宿の朝の最終日トンボと共にラジオ体操

学生の熱意と姿に感心させられた

(日本生命 野々村美紀子)

今回で三回目の参加となる合宿でしたが、毎年、参加されている学生の方々の素晴らしい熱意と姿に感心させられます。

日本の国柄について学び、語らう、そのひたむきさに我が身を省みて反省するばかりです。次の代へ繋ぐ使命を若い内から真剣に考えている様子が班別研修でも感じられました。講師の先生方のご講義も深く考えさせられるものばかりでした。これまでの歴史があり、日本という国が存在している。また「私達は歴史の子供」という言葉が心に残りました。現代の価値観で過去を捉える事なく、正しい歴史認識、この先も連続と続く日本の国柄に対し、もっと深く学び、次の世代へと繋ぐ必要があると痛感し、この日の本の国について引き続き学んでいきたいと思えます。

蝉鳴きし集ひの庭で語りあふ友らと学ぶ時早過ぎゆく

合宿の準備運営に当たった諸兄に感謝

(元 日商岩井(株) 澤部壽孫 78歳)

雲仙に初に参加たる彼の夏ゆ五十余り九年はやさちらにけり
若き日の志忘れぬ友らとの年に一度会ふ縁かしこき
眼りたる心目覚めて老いには早きと気づきし合宿なりき
若きらの輝く眼見るにつけ日本の正しき歴史教へむ
学生の数は少なくなりたれど続けゆきたし合宿教室
世に出でて教へる場に立つ友ら三人のま幸くませと祈りぬ

歴史を繋ぐ事の大切さ

(元 皇宮警察本部長 小田村初男 69歳)

本合宿教室では、戦後占領軍によって押しつけられた憲法を始めとする様々な施策により、如何に我が国の歴史、文化、國體が歪められてきたのかを、伊藤哲夫先生を始めとする諸先生方によって、様々な切り口から明らかにされ、また、それを正すために何をなすべきかを共に考えるという統一されたテーマがあり、素晴らしい合宿教室であった。

先人の積み重ねてきた我が国の歴史を如何に繋いでいくかは、大事な問題であるが、今回班に若い学生三名がおり、皆よく学んでおり、今後教職に就くなどしつかりと次の世代に繋いでいきたいとの思いが見られ、非常に頼もしく感じた。

強いられし憲法より来る禍事を正すべしとの師の思ひ尊し
戦には敗れたれども古ゆ積み重ね来たる国柄守らむ

第四班(女子)

国柄を大切に良き日本を築かう

(主婦 野々村悦子)

静かな学び舎の中に一歩踏み入れると、穏やかな空気が感じられ、モラロジー研究所での合宿が始まりました。会ふ人の皆さんに、ここの道徳教育が行き届いてあるやうに思へました。令和の御代になり、困難なこともあります、古から

カメラ・レポート7



短歌鑑賞 朝の集ひの中で短歌鑑賞が行はれた。二日目は折田豊生氏(右)が明治天皇御製を、三日目は青山直幸氏(左)が川出麻須美の歌を紹介し、参加者とともに拝誦した。

伝はる国柄を大切に、さらに良き日本を築いていかねばなりません。この大切な秋、一つひとつ若い人々に伝えていかねばといふ熱意が、伊藤哲夫先生を初め、講師の先生方からヒシヒシと伝はつてきました。私も女性は、憲法は身近なものとは思へない人が多いですが、家庭生活は憲法に密接な関わりがあると思ひます。特に教育には正しい国の方針を定めて、子供を育てていかねば、国も滅びてしまふと思ひます。今の学生さんたちが、子育てをする頃には、日の丸を掲げ、国歌を堂々と歌へるやうな国にならねばと切に願ひます。学生の純な心に触れて思ふ国柄正しく伝へ残したし

「歴史回復」の日本を目指して

(葉剤師 吉田喜久子)

夏の名残を惜しむように蝉しぐれ降る麗澤の森で、二泊三日の合宿を終えることができ感謝の気持ちで一杯です。

伊藤哲夫先生の「われらにとつて国家とは何か」の迫力あふれるご講義にまず感動致しました。「歴史喪失」の戦後日本から、「歴史回復」の新たな日本へという大きなテーマについて、三日間それぞれの先生方が心を込めてご講義して下さいました。一方、その学びを伝え広めて行くことの大切さ、責任の重さをひしひしと感じる三日間となりました。感動を与えて下さった講師の先生方と、合宿を成功させるためにご尽力下さった

方々に心から感謝申し上げます。

教授職ありながらなほ皇統をあらたに学び説きたまふ師よ
神代より一系つづく天皇は国民護り祈りたまへる

敷島の道のたふとき伝へむと昂るみ声に胸熱くなる

日の本を磐の上の国たらしめんと尽くせし先人ただただたふ
とし

今を生く我が日の本の「歴史の子」学び深めて広めつたへむ
仲間等と熱く意見を交はしつあたらたなテーマ湧きいづるな
り

日本本来の姿に目覚めよう

(全国仲人連合会鎌倉支部 田中三智子)

伊藤哲夫先生のご講義をお聴きし、憲法改正が真に必要であることを納得出来ました。賛成です。でも、現在巷で言われている自民党の改正案については反対です。今の方法は、誠が感じられない姑息な方法として、日本人の直感として受け入れられないものと思ひます。憲法改正の真の狙いを、正々堂々と日本の民に本気で問ひかけるべきだと思ひます。

さらに、私は大岡弘先生のご講義を受け、現憲法を部分的にいじるのではなく、大岡先生の四つの課題解決のご提案をこつこつと実現していつて、日本の民が自然に暮らしの中で日本本来の姿に目覚めて、自発的に憲法改正の必要性に思い至る道もあるのではないかしらと思ひました。御代変わりの

今なら実現可能ではないかと思っただのです。

天皇と力合はせて守りたる万世一系子らに伝へむ

日本人の心を伝えたい

(モラロジー研究所 内山慶子)

二泊三日大変有意義に過ごすことができました。今回四回目の参加になりますが、ぜひこのモラロジー研究所のキャンパスで開催して頂ければと数年思い続けておりましたが、本年実現することができ、念ずれば叶うとの思いで、本当にありがたく思っております。

日本の古典に触れること、伝えることの大切さを常々思っています。この夏、サマースクールに於きまして、小学一年生から四年生の児童に偉人伝と古典の素読の時間を二度持つことができました。子供たちは、多分初めて古典に触れたと思います。七百年前に作られた「実語教」の言葉を十分間ではありましたが、大きな声で唱和することができました。その時間の大切さを私は感じましたが、子供たちもきつと何か大切なものとして受け取ってくれたと信じています。本当に微力な私ですが、日本人としての心、日本の大切な歴史を少しでも伝えて行けるようにと努力していきたいと思えます。

歴史あるこの合宿を柏にて開き給ひしことの嬉しさ

カメラ・レポート8



講義 西山八郎氏は「義疏を読んで、何か心に呼びかけてきた箇所があったなら、それはその人がこの日本列島に生き続けてきた太子をはじめとする多くの日本人に連綿と受け継がれてきた心を今に受け継いでいるといふことであり、不思議でない。そのことに気付くかどうかは私達次第である」と示した。

「本当の学び」ができる合宿

(公財) 郷学研修所・安岡正篤記念館 嶋田元子

この合宿では、内容の濃い各講師の方々のご講義に加へ、班別研修といふ時間を沢山取って、班員各々の考へを述べ合ふ。また、各自の創作短歌に対しては、「かう表現したらどうか」とか、「ここはこの言葉を用ゐたら」……などと相手の想ひを想像しながら言ひ合へる。この合宿ならではのプログラムは、「本当の学び」ができる、いつも痛感してゐます。学生の参加者、とりわけ教職に就く予定の学生の参加者で講義室が満たされることを期待してゐます。

来る毎に良き出会ひあり学びありこの感動をいかに伝へむ

「国家とは何か」を学ぶ

(華泉書道会 坂本和代)

伊藤哲夫先生のご講義に聞き入りました。国家とは何か？歴史基盤あつてこそその国家であり、憲法の前に歴史がある、ということを知りました。我が国は歴史を忘れさせられ、思い出そうとすると、以前の歴史は犯罪の歴史と言われる。……何と悲しいことでしょうか。でも、何か出来ることはないか。大岡弘先生の皇室祭祀のご講義で、「国民の祝日」が民族信仰に基づくもので、皇室祭祀から来たものであると伺いました。

今年の大嘗祭は、皆さん関心があると思うので、紀元節祭、明治節祭が停止されたこと、新嘗祭が勤労感謝の日になったことなど学んだことを伝えていきたい。

早起きし朝の集ひの体操で体の硬さにおどろかさされる

熱意溢れるご講義に感動

(元)神奈川県立小田原高等学校教諭 原川猛雄 71歳)

二泊三日、本当に中身の濃い合宿でした。先生方のご講義は何れも熱のこもった素晴らしいものでした。また、資料を読み返して咀嚼したいと思ひます。

西山八郎さんのご講義は、難しいお経の話を分かりやすい言葉で、穏やかに話されてしたので親しみやすくとても良かったと思ひます。いきなりお経や義疏の話に入らず、岡潔先生の話から始め、最後は仏像の話に触れるなど、展開に工夫されてゐることを感じました。また、大岡弘さんのご講義には、最後まで気迫の籠ったお声で話をされたお姿が印象的でした。四班の班員の皆さんには、ご一緒に忌憚なく語り合ひ学べたことに感謝してゐます。日本の本来の姿を取り戻すため皆さんと一緒に研鑽していきたいと思ひます。

班別研修にて

むつかしき太子のみ文を皆共に声出し読めば楽しかりけり

古典を学び直したい

(寺子屋石塾主宰 岩越豊雄 75歳)

令和元年の初めての合宿教室は、どの講義も事前に打ち合はせたことではないのに、万世一系の天皇を中心に頂く日本の国柄の素晴らしさを学ぶ内容で統一されてゐた。

万葉集からの元号、令和の時代は、正に合宿教室の目標に「温故知新」とあったやうに、古典から日本の文化伝統の素晴らしさを学び、今に生かす時代であることをつくづく感じました。それには、先ず自分自身が古典をしつかり学び直し、次代の日本を背負ふ子供たちに伝えていくことの使命を改めて強く感じました。時代の変換期に立つ素晴らしい合宿でした。

令和の日人々集ひて日の本の国柄のよき学び合ひたり

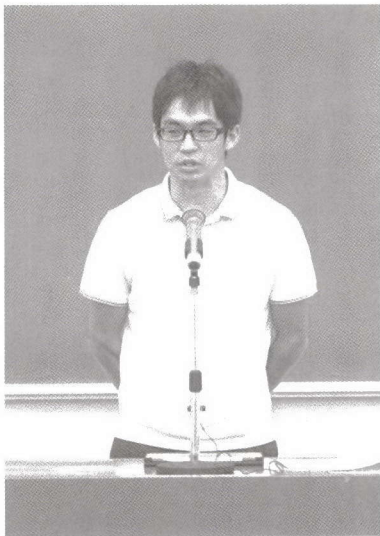
第五班(社会人)

充実した二泊三日を過ごした

(天本和馬 69歳)

充実した二泊三日であった。ひとつひとつの講義が充分に練られかつ力強く訴へる内容でありどれもが心に残った。班

カメラ・レポート9



学生発表・若手会員所感発表 早稲田大学基幹理工学研究科博士課程一年椎木政人君(右)は、本居宣長の『うひ山ぶみ』の「倦まず怠らずはげみつとむる」大切さを、自身の研究での体験を踏まへ話した。(株)エイチ・アイ・エス 高橋俊太郎氏(左)は、吉田松陰『講孟箚記』の序について、自身の就業体験を交へ感想を述べた。

別討論はやや時間が足りない場面があつたが全員が心を傾けて参加し、講義の内容を掘り下げることができた。

合宿地は設備・施設がすばらしく心おきなく講義や班別討論に集中することができた。以下、特に印象に残つた講義等。

一 一日目の伊藤哲夫先生の「憲法改正はゴルフでいふ、グリーンにのつた段階まで来た。一か所の改正でも突破口になる。」とお言葉に長い長いトンネルの出口の光が見えた思ひがして強い印象に残つた。

二 大岡弘先生のご講義は氏の生き方そのものを見た思ひがした。皇室祭祀のあり方が日本を国家として在らしめてゐると思つた。そのために陛下御自身が熱心に取り組んでをられることがありがたいと思つた。

大岡弘先生の新嘗祭のくだりをお聞きして

新嘗の祭の様を語らるる師のお言葉は強く響きぬ

その昔小林先生語らるる祭の様の思ひ浮び来（小林秀雄先生）

寒きなか館に籠りて何ごとか長き祈りをささげ給はむ

今後も継続して学んたいきたい

（学校法人中村学園 阿久根 透 34歳）

全ての講義において学ぶ事が多く、自分がいかに勉強不足であるかを実感しました。参加者の皆様は勉強熱心な方ばかりで班別討論では基本的なことや深い内容まで丁寧な教えていただき大変お世話になりました。

どの講義も印象深かつたのですが特に山内健生先生の『いま』を生きる者の使命―』について過去の歴史やその時代に生きた方々のことをしつかりと理解した上で新しいことにチャレンジしていく事が大切であると再認識しました。個人的には本合宿に参加させていただくにあたり、「一 できるだけ多くの事を吸収する」、「二 合宿後も自ら学ぶ気持ちを醸成する」という二つの目標を立てて臨みました。一つ目の目標は講義とその後の班別討論で自分の中に落とし込む事ができました。二つ目の目標は班別研修で博識な方々の中で発言できない自分を恥ずかしく思う一方で、自分も我が子に祝日の成り立ちなどを教えられるように学んでいきたい気持ちになりました。

班別討論にて発言できない時に

博識の参加者の意見耳にして知識不足を恥しく思ふ

憂いていたものの真因に改めて気付いた

（国土交通省関東地方整備局 小林忠和 57歳）

憲法改正、国がら、ご皇室のあり方等モヤモヤと憂いていたものが歴史の断絶（をさせられた）によるものが大きいという事で頭を整理できたと思います。あらためて気づかせてもらいました。班の議論では色々な考え方に接する中で、自説に固執する方がおられる一方、柔軟な方など方向性は同じでも意見の出し方は違うものだと勉強になりました。最初は

受身の姿勢で参加していましたが討論や短歌創作に入ると非常に頭を使い(悩まし)主体的に思考することの大切さを学びました。

最後に運営に対する希望ですが、班構成を男女、学生、社会人、老若を分けずに行ってみてはいかがでしょう。また班を越えて他の班とも接する企画があればと感じました。御縁があれば又参加したいと思います。ありがとうございます。

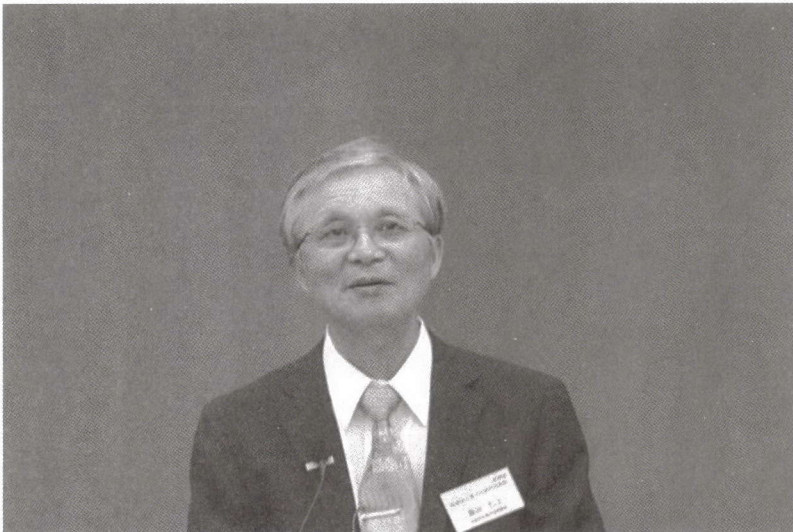
過ぐる夏青年会(宿学)び終へ熱き心でいざ帰りなん

天皇祭祀から日本の国柄が見えた

(佐藤忠道 79歳)

「みことのり研究会」の野々村悦子様から、「伊藤哲夫氏の講演会がある」と誘われて参加できました。井上毅の「歴史上の沿革及び典故慣例は憲法政治の源」はスゴイ視点と認識していた私は、大岡弘氏の講義で日本の国柄の特徴は「天皇陛下の御存在と天皇祭祀」にありこれこそが「伝統的権威の源泉」であって「統治すれども政治せず」に本質があるとの説明に納得しました。

各回の班別研修ではメンバーの発言や幅広い見方で考え方を変えることが多々あつてありがたかったです。講義で山内健生氏が引用した柳田國男の「国家は現在生活する国民のみならず、死し去りたる祖先も将来生じ出づべき子孫も国民



短歌創作導入講義 森田仁士氏は、短歌創作時の注意点として、感じたことを正確に一首一文(一首の中で感動の焦点が一つに絞られるやうに表現する)で詠むことを説かれた。そして長塚節の歌「垂乳根の母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども」のやうに日常の小さな出来事でも優れた歌が出来ると指摘した。

なり」に心を惹かれました。

短歌には汗をかきました。因みに「みこと」の普及の云(渡部昇一氏が設立)「会長国学院大学神道文化学部教授茂木貞純伊藤健二著」時代を動かした天皇の言葉」が発行されました。

合宿後三年程、「無沙汰」の先輩を訪ねるにあたって訪ねたとき卒寿を越えし先輩ゆ金曜いかの返事に歓喜す

憲法の欠陥について理解が進んだ

(中村正則 70歳)

七十歳にして初回の参加でしたが期待以上の手応えを感じることが出来感謝しております。在京短歌の会にこの二年程入れていただき拙き技に多少とも磨きをかけたいたとの動機での参加でした、講義、相互批評の事、嬉しさ、楽しさに加え合宿会場施設の良さに助けられ樹木やその細部を観察した和歌が創作出来ました。ただ何よりもありがたいのは伊藤哲夫、山内健生両先生の講義によりかねてより断片的に考えていた現行憲法の誤り、欠陥について、日本民族の歴史の視点等から体系的に整理して理解が進んだことであります。その思いを創作短歌として提出しました。又、今次合宿を準備され運営される国文研の方々の同志愛と使命感にささえられた高い志と献身的活躍も頭が下がりました。参加した若い方々の感想発表会にその成果がみてとれるのをともに喜びたいと存じます。御苦労さまでした。ありがとうございます。

麗澤の森に楷の樹(孔子木)を仰ぎて

曲阜より種子で移せり孔子木八十年を経て尊え鎮もる人の道訓ふる学庭に鎮もりて若きら仰ぐ標となれり

誇りを持った日本人になれるように努力を重ねたい

(令和ライフタスク研究所 細谷真人 57歳)

二回目の参加となった合宿教室にてまた多くの学び・気づきと次に向ってのやるべきテーマをいただくことができたと感じている。それは合宿教室のテーマである「温故知新」新しい時代に活きる日本の心」に沿って、改めて日本の歴史や文化といった「温故」の部分学び直し、また自分の身の周りの方々に伝えていくということである。更に「知新」というイメージで新しい令和の時代の日本を創っていく地道な行動を始めていくことである。

その際にキーワードとして心に留めておく必要があると感じていることは「日本に生まれた」とことと「日本人になる」ことはイコールではないということである。日本の歴史や文化を理解しそれを次の世代に向けて価値を膨らませて引き継いでいく「誇りを持った日本人」になりたい。自分も少しでも近づき、また周囲にそうした人達を増やしていくことを目指し日々の営みを積み重ねていきたいと思う。

第六十四回合宿教室を終へて

麗澤の森にて立てし志日々の暮らしの中で果さむ

日本人としての誇りをとりもどさなければならぬ

(アサヒ飲料株 澤部和道 45歳)

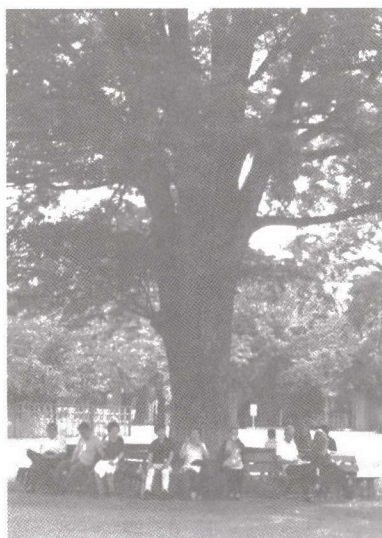
今回の合宿で諸先生方から多くの事を学ばせて頂いた、とりわけ大岡弘先生のご講義は印象的であった。天皇陛下の祭祀について漠然としていたものが具体的なものとなり本当に勉強になりました。本来、全ての日本人が自然と身につけていくべきことだがそれが占領政策によつてがんじがらめとなり、むしろ不自然なこととさえ受けとめられている。「いま(現在)」に大きな問題があると痛感した。天皇陛下が父のような存在として祈りを捧げておられることを「知らない」ということが問題なのであつて、我々一人ひとりが日本人としての民族の誇りを取り戻さなければならぬと感じた。最後に一緒の班になった皆さんは日頃から勉強されており刺激になりました。ありがとうございます。

日の本の心の色どり仰ぎつつ我も染まりて生きてゆきたし

国家に不可欠なものを学んだ

(株)IHイエアロスペース 内海勝彦 64歳

山内健生先生のご講義での「国家の独立に不可欠なものである一祭祀、二国防、三教育の自由が現憲法によりままたらなくなつてゐる」とのご指摘に改めて今の日本が直面する問



散策(短歌創作) 短歌創作に先立ち、国文研会員の小柳左門氏編『親子で楽しむ新百人一首』を使つての「かるた会」を各班ごとに行った(右)。読み手の歌に耳を傾け、歓声を挙げつつ「かるた取り」を楽しんだ。その後、創作の時間に移り、班ごとにモラロジー研究所の敷地内を散策した(左)。

題であることを考へさせられた。又その中の「祭祀」に関しては大岡弘先生の詳細なご講義を通して国家は民族の歴史・伝統の基盤なくしては存在しないことを、そしてその基幹をなすものは皇室のご存在と天皇祭祀であることを深く学ばせていただきありがたかった。

その大岡先生がご講義で提言された現下の諸課題のうち、まずは自分として、「記紀神話」及び「皇室祭祀」に係る知識の普及、教化に努めてゆきたいと思ふ。

大岡弘先生のご講義を聞き

片時の休みもとらず力こめ九十分を話し給ひぬ

幾年も研鑽積みて学ばれし跡しのぼるるこれの資料は

日の本の国柄をなす皇室の祭祀の貴さ伝はりてきぬ

第六班(国文研)

大嘗祭の歴史的意義の大きさを教へていただいた

(日本港運協会 久米秀俊 62歳)

皇室祭祀についての大岡弘先生のご講義をお聴きして、日本の皇室祭祀が継承されてきた先人たちの知恵、工夫、思ひの強さに触れることができた。その最大の祭祀が新嘗祭であることを知り、今年十一月に催される大嘗祭の歴史的意義の大きさを教へていただいた。

西山八郎先輩の聖徳太子のお話では、先輩が長年学びを続けてこられたこと、その学びを実生活に活かしてをられることを実感し、かくありたしと思はされた。

また、新しく出会った同年代の方々に大変刺激を受けた。現在の日本が抱える教育問題、憲法の問題などの大課題を自分自身の課題として取り組み、著述活動などの具体的な行動をされてゐる。これからも交流、学びを続けていきたい。

椎木政人君の学生発表を聴きて

発表を前にいつもの笑み消えて前をみつむる面のしまりぬ

小林秀雄氏の書を読み来しことを語りゆく君の言葉に力こも

りぬ

一週間で『本居宣長』読みしとふ君の言葉に驚かさるる

おこたらず倦まずたゆまず励みたしと語る面のいきいきとして

専門の研究忙しき中時間見つけ発表準備せし君のたふとし

さまざま文章にふれて感動した

(JA長野厚生連 市川絢也 29歳)

大学二年生の時、初めて合宿に参加してから八年が経ちました。残念ながら毎年参加できていませんが、年々、合宿室で過ごす時間が短く感じられます。勿論日程が短縮されたことはありますが、それとは別に、一つ一つのご講義が大変身に沁み、様々な文章に触れて感動したからだと思えます。社会人になって以降は、心を動かされることが無く、むしろ

る無心に仕事に取り組みことに多くの時間を費やしています。そんな中でこの合宿教室では、講義や班別研修において、一つ一つで感動することがあります。今年は、短歌創作導入講義で紹介された先輩方の短歌でのやり取りに感動しました。

このような合宿を企画されている先輩方に感謝したいです。自分も誰かを感動させることができる人間になりたいです。

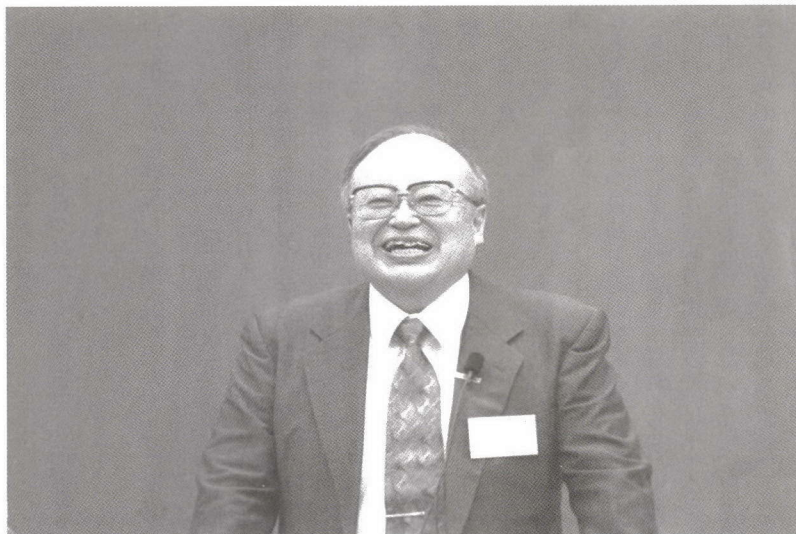
たくさんの先輩方に「よく来たね」と言っていたくださうれしく思ふ

言葉を通して心を通はせることが出来た

(伊佐ホームズ(株) 小柳雄平 38歳)

今年も、本合宿で、言葉を通して心を通はせることがいくつも出来たと思ふ。岸本弘先生の「創作短歌全体批評」に先立ち前夜にご一緒して、講義内でご紹介される短歌選びのお手伝ひをさせていただいた。お互ひに感動する歌を挙げる中で、合宿参加者の短歌を通して、先生と感動を共感し合へ何とも言へない、心地よい時間を過ごすことが出来た。

また、班別短歌相互批評では、班の方々の素直なお心に触れることが出来、まことに楽しく充実した時間であった。殊に、私が「アブラゼミの声すずしく」と表現したことになかなか共感を得られなかった際に、ユーチューブでセミの声を再生すると一斉に皆からの共感を得られたときは、蝉の声を再生、また詠んだ題材の、森田仁士先生の御講義の内容を通し、班



講義 大岡弘氏は「戦後、GHQの占領政策によって、皇室祭祀は、教育の場や国民の祝日から切り離され、記紀神話とともに、国民の側から忘れ去られようとしてゐる。令和の御大礼を機に、我が国独自の民族信仰を思ひ起さなければならない。それは令和の御代に生きる我々の務めであらう」と強調した。

員の心が結ばれた様でとてもありがたい瞬間だった。言葉を正し、素直な心で日々を送っていききたい。

市川絢也君に会ひて

講堂の参加者の間になつかしき市川君のおもわの見ゆる

目の合ひて「おお」とぞ声を掛けられたればおどろき笑顔をかへし
くれたり

なつかしき友とし会へばいよいよに夏合宿に来しと心ととの
ふ

日本人としての根っ子を確認できた

(日本ベーリンガーインゲルハイム 出村信隆 62歳)

新しい時代令和を迎へたが、継ぎゆくべき日本の心は消え
つつある。我々が新しい世代にたすきをつなげなければ、二
千年の歴史と伝統ある皇室を守ることができず、日本の心も
国家も永久に失ふであらう。各講義を通してそれを痛感した。

若者の感想発表には感激した。彼らにとり日本人としての
根っ子を確認できた合宿であったのだらうが、それは私自身
も同じである。芯があり、瑞々しい感性を持つ若者と接する
ことは、本当にいい刺激となる。日本が記憶喪失の国家とな
らぬやう危機感を持ち、若き世代へたすきを渡さうと実践し
てゐる同志とも知り会へた。心強く思ふ。

若い世代の人たちには十分な素養がある。良きものを次の
世代につなげてゆきたい、切実にさう思へた合宿だった。

学生の感想発表を聴きて

若人に日本の心をつながんと切に思へり発表聴きつつ

祖先から継承して来た歴史の大切さを改めて学んだ

(元 神奈川県立高校教諭 中村正和 63歳)

令和の時代となり、もう一度しっかり学びなおそうと考へ、
四度目の合宿に参加致しました。

日本国憲法以後の歴史的断絶に対し、祖先から継承して来
た歴史の大切さを改めて伊藤哲夫先生と山内健生先生から教
えていただきました。また、西山八郎先生の聖徳太子のご講
義から「悪心によつてこそ良い行いをしようとする志が生ま
れる故に、良い行いだけを説くのではダメだ」と教えていた
だきました。

そして、大岡弘先生の天皇祭祀のご講義は、私の心を最も
強く打つ御教えでした。全体感想発表で発言があつたように、
私も天皇というご存在とその祭祀を守り続けて来た日本人の
姿を眼の当りにしその御言葉に触れたように感じました。

また、最後の全体感想自由発表で、日本人としての誇り、
日本人としての歴史を取り戻したいと述べる勇氣ある素直な
若者たちの言葉に大きな感動を覚えました。

西山八郎先生の聖徳太子のご講義を受けて

善きのみを説くことなかれ悪なるも尊きことをゆめ忘るなど

大学生の参加者を増やしたい

(元)株講談社 藤井 貢 68歳

初めての千葉県柏市での合宿は、交通の便もよく日和にも恵まれ、学生参加者が少ないことを除けば、参加者の意識も高く、素晴らしいものになった。ひとへに運営委員の尽力によるものと思ふ。昨年も思ったことだが、日常の付き合いが国文研の活動の基本だと思はされた。

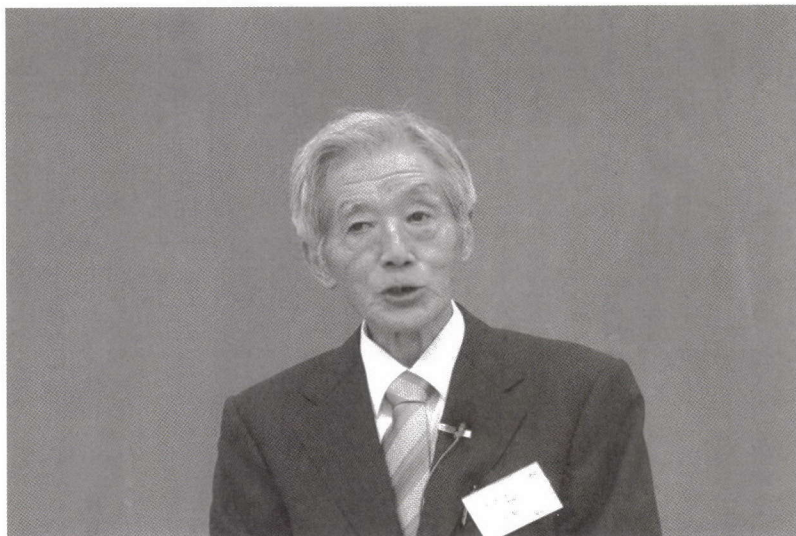
さて、唐突な提案を一つしたい。産経新聞の元アメリカ特派員の古森義久氏がコラムに書いてみたことだが、アメリカの定年退職者は年会費三千円ほど出して同じ志の団体に入り、世を正す活動してゐるといふ。日本の退職者も連帯し、同じ志の団体を組織しては如何だらうか。国文研の組織もさらに活性化するのではないでせうか。

五十年前つなかりを得てこの道に入りしことのありがたきかな

自然豊かな会場での素晴らしい合宿

(日章工業株) 藤新成信 59歳

池松伸典運営委員長はじめ皆様のおかげで、素晴らしい会場での良い合宿であったと存じます。自然豊かで落ち着いたキャンパス、班別研修スペースが隣接している宿泊施設など



創作短歌全体批評 岸本弘氏は「相互批評で大切なことは、素直に正確に、作者の気持ちが表示されてゐるだらうかといふことであらう。合宿後も継続して短歌に親しんでいただきたいと願つてゐる」と述べた。

の細かな配慮には、この学園の方針が反映されてをり、行き届いたものと感じました。短歌創作にも適した場所と思ひます。

合宿のテーマについても、国文研の合宿が目指す日本の国柄、歴史に基づいた憲法問題であり、聖徳太子に学ぶ日本人の心であり、そして現在日本にとつて最も大切な皇室祭祀の問題であり、期待以上の成果があつたやうに思ひます。

東京を中心として、九州、関西、そして各地の勉強会をつなぎ合ひ、連携して来年につなげて行きたいと思ひます。

自由感想発表での最後の久々宮章先輩の発表を

お聴きして

壇上ゆ若き友らをいたはりつ励まし給ふみ姿たふとし

参加する度に初めて経験することが多い

(折尾愛真短期大学 松田 隆 63歳)

平成の初めの頃より合宿に参加して、もう幾年も過ぎましたが、参加する度に初めて経験することが多く、今回の合宿も同様でした。

班員の方々が皆、自分と同じ年代の方々で、その方々に今までの人生の生き様を自己紹介で語っていただき、いまさながら自分自身のいたらなさを痛感いたしました。

何か行動しなければならぬと思ひながら日々の仕事に追はれてゐる怠惰な自分自身に鞭を打って、これからも頑張っ

ていかなければと正に痛感した合宿でした。

第六十四回全国学生青年合宿教室に参加して

合宿に集ひし大人らの生き様に感動したりて我も学ばん

第七班(国文研)

令和元年を迎えて

(元 座間市立中原小学校教諭 松本洋治 69歳)

歴史の曲がり角に来ている今、合宿教室に参加し講師の先生方からその方向について講義をいただき、先の見通しのヒントを得られた気がしました。班別の時間では会友の方々と一緒に研鑽できたことも大変有意義な時間でした。

人と人とのつながりが歴史を育み継承していくのではないかと感じますこの頃。五十余年前恩師と共に参加した合宿教室を懐かしく思い出し、その教へをどう整理し引き継いでいくか、思いを新たにしています。

ここで学んだことをもとに、先人が苦勞して築き上げられた国柄をどのように取り戻していくか、同じ志を持つ方が近くにあることに感謝しながら、皆さんと研鑽を積んで生きていと考えています。

朝の集ひの折り

大櫓幾年月を経にけるか朝の集ひを見守りてあり

友どちと共に学びしこの合宿朝の集ひの清々しかな

令和の御代を迎へて

(元三菱重工(株) 島津正数 74歳)

伊藤哲夫先生の『令和の御代を迎へて』日本人としてのス
イッチが入った」とのご講義を聞いて、誠に然りと私も思ひ
ました。

令和の元号の出典が万葉集(国書)によると報道されるや
否や国民の多くが明るく元気になったやうな気がしてゐる。
これを契機に、万葉集、国書、国家といふものを皆で考へる
世にしたく思つてゐる。

大岡弘先生の「日本の国柄と皇室祭祀」のご講義は素晴ら
しかった。平成の「国民の祝日」と平成「皇室祭祀」の表を
見て国民の祝日が皇室祭祀とかくも似て非なるものかと再認
識した。これはGHQが目論んだ日本の文化の破壊であり、
その破壊が今も続いてゐる。何とかして皇室祭祀の復活を図
らねば、日本の伝統、文化が失はれると思つた。先生が掲げ
られた四点の諸課題の解決に私も少しでも貢献したい。

「日本の国柄と皇室に関する研究会」への参加を期し
日本の国柄守る国民となるを望みて「会」に出でなむ

温故知新新しい時代に活きる日本の心

カメラ・レポート 14



創作短歌全体批評 適確で軽妙な批評に思はず笑顔に。

(日本大学名誉教授 夜久竹夫 71歳)

今回の合宿の主題は「温故知新く新しい時代に生きる日本の心」であった。

その中で私は大岡弘先生の、日本の国柄の特徴が民族宗教を持つていること、というお話しが印象に残った。ここではその中の、日本の民族宗教は自然崇拜と祖先崇拜があるという趣旨のお話しに注目したい。

日本では伝統的に自然保護や大小の遺跡保護が行われてきたが、それらを支えてきたのは自然崇拜と先祖崇拜の心に見える。昨今政治や行政にも自然軽視や墓地を含む遺跡軽視の風潮が目について、自然崇拜や先祖崇拜の心が薄れてきているように見える。

国柄の事は現代の憲法や法律の条文に直接記載することではないかもしれないが、憲法前文や各国の忠誠の誓いのような形で国の原理として明示することが必要に見える。

日本の伝統保持のために

(元 マツダ(株) 久々宮 章 70歳)

めぐまれた環境の中で得るものの多い合宿生活を送ることができました。合宿を支へられた皆様に心より感謝申し上げます。

講師の先生方から「日本の国家とは何ですか」と問ひかけられたと思ひました。新しい天皇は二〇〇〇年の歴史を背負

はれて即位なさいました。私は国民の一人として、真に日本が国家として生まれ変はるために、微力ではありますが、できることから一つ一つ取り組みたいと思ひます。

合宿感想自由発表をききて

素直なる思ひを語る学生の言葉たのもしく力湧きいづ

充實した合宿教室

(元 富士通株) 古賀 智 66歳)

まことに良い環境での合宿であった。およそ十萬坪の敷地を有する廣池學園の生徒諸君は大變に行儀が良い。この良好なる環境と高尚なる教育理念とが相俟つて次代を擔ふ青年を育てるのであらう。

三日間ではあつたがこの教育環境の中に身を置く事が出来たのは幸せであつた。おのづと熱心にならざるを得ない。自分の知識の浅さを恥ぢて耳をすまして目をもこらして先生方の御講義に神經を集中させた事であつた。

御講義の内容のどれ程が身に着いたのか、或いはそれらを元にしてどれ程發展させる事が出来るのかを考へつゝ更に精進に努めたきものと考へてゐる。

三日間の講義を拜聴して

かいなでの知識にあかて耳すまし目をもこらして講義を聞けり

令和の時代「日本再生」に向けて

(元 川崎重工業(株) 山本博資 78歳)

今年は何年ぶりに班に入り、班員の皆さまとともに班別討論や和歌の相互批評を経験させて頂きました。班の中で意見を交換することで、人を知り、親しくなることが、合宿教室の主な目的であることを改めて実感しました。班別討論は合宿教室の中核であり、この時間は、さらに充実し、会員や賛助者獲得に活用されたと考へます。

今回の令和の年の始めの合宿は、これからの会の活動に供する指針が示された大変意義深いものと思われました。伊藤哲夫・山内健生・大岡弘三氏の講義には、奇しくも同じテーマ「日本再生」を取り上げられておられると思われました。大いに学ぶことがあり、これから取り組んでいく課題が具体的に提示されたと思ひます。今後の展開が待たれます。

令和元年八月 第六十四回全国学生青年合宿教室に

参加して

上総なる柏の里の麗澤の学びの舎にわれら集ひき

日の本の国柄今こそ見直して正すべきときになりけるかも

天皇をいただき受継ぐ我が国の国柄守るはつとめなりけり

令和なる年のはじめにあまたなる取り組む課題われらに示せ



班別相互批評 全体批評のあと班別短歌相互批評(右男子班、左女子班)が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝えることの難しさ、また人の言はうとしておることを正確に受け止めることの難しさを学んだ。

合宿教室継承の重み

(株)柴田代表取締役 柴田悌輔 79歳)

六十四回の合宿教室の営みが私たち国民文化研究会会員にきざみつけた道統といふか、歴史といふ事実の多いことに、改めて気付かされました。

今回の合宿は会員が講師として出講されるケースが多かったと思ひます。その一つ一つの講義の内容を拝聴しながら遠い昔から、国文研の諸先生たちが、私たちに語り継いでくれたことが何と多かつた事でせうか。まさに思ひは語り継がれてきたのだと思ひます。

合宿教室への参加は、今年かぎりと思ひ定めて参つたつもりですが、どうやら、その決心もゆらいできたやうです。先人達が私たちに語り継いできたものを、又若い人たちに語り継いでいく事、それが伝統といふもので、私もその伝統の火を運ぶ役目を負つてゐる。そんなことに気づかされた合宿教室でした。

全体発表の時間に

おのもおのも語りゆきける友の顔を窓からさす陽が照らしゆきける

講師

内容ある学びの場だった

(元) 拓殖大学日本文化研究所客員教授 山内健生 74歳)

二泊三日といふ考へ方によつては短い日程であつたが、内容のある学びの場であつたと思つた。かういふ場で登壇できたことを(始めは迷つたが)本当に感謝しなければならぬと考へ直してゐる。参加者それぞれの求める姿勢が感じられて、力をもらつた感じである。私の講義はともかくとして、会員講師のお話には皆力がみなぎつてゐた。日頃の御精進ぶりが察せられて、そこからも新たな力を得た思ひがして、また新しい一年が始まる。

日本の国の歴史的な真姿がゆがめられることなく長く久しく伝はつて行くことを願ふばかりである。そのために若い参加者が少しでも多くなるやうに努めたいと思つてゐる。

大岡弘兄の御講義

力ぶよきみ言葉あふるる御講義をつつしみうれしく心して聞く

つね日頃のみ心がけのしのばるる壇上のみ姿たのもしかりけり
次々につよきみ言葉わきいづる壇上のみ姿かがやきて見ゆ

伊藤哲夫先生の御講義をお聴きして

(元 新潟工科大学教授 大岡 弘 72歳)

伊藤博文の「我が国にありて機軸とすべきは独り皇室あるのみ」と、井上毅起草による大日本帝国憲法第一條の草案「日本帝国は万世一系の天皇の治す所なり」の重要性に気づかせていただいた。「大日本帝国は万世一系の天皇これを統治す」。我が国の機軸、立国の大義が帝国憲法の第一條にこのやうに掲げられてゐることの重要性に気づいた次第である。

日の本のいのち首めに掲げたる帝国憲法すばらしきかな

古典の講義担当、機会いただき感謝

(みどりヶ丘保育園 西山八郎 66歳)

今回の合宿で始めて古典の講義を担当させていただきました。不勉強な私にこのやうな機会を与へていただいたことに感謝致します。

充分読みこなせてゐなかつたこともあり、学生の皆さんに果して内容が正確に伝はつたのか不安も残つてゐますが、一人でも古典に興味を持っていただくきっかけとなつてくれればと願つてゐます。

維摩経義疏の中には、今回取り上げた箇所以外にも教へられる箇所が何箇所もありますので、これからも少しづつ勉強

カメラ・レポート 16



合宿をかへりみて 今林賢郁理事長は本合宿での諸講義を一つ一つ振り返り、「これらの講義で明らかにされたことは、戦後の『七十四年のわが日本』の姿は本来のものではなくて、歪であり、私たちは先人の文献や古典を通じて二千年の歴史を持つ日本を取り戻さなければならない」と示した。

して参りたいと思つてゐます。

本部並びに事務局の皆様の「苦勞」ご努力に心より感謝申し上げます。

維摩経義疏の発表を振り返りて

読みゆけどなほ分り得ぬところありてまた読み返しぬ義疏のみ文を

読みゆけば読みゆくほどに国民に寄せらるゝ思ひ胸にせまり
来

遠きみ代にかたき務めに尽されし悲しき心俣ばざらめや
師の君に導き賜へと祈りつつ高鳴る思ひに壇上に立ちぬ

(小柳陽太郎先生のこと)

意見より率直な思ひを聞きたかつた

(元 富山県立富山工業高等学校教諭 岸本 弘 74歳)

全体感想発表で意見(説明)を述べる人はゐても率直な思ひを聞けないことは残念である。合宿での主催者の訴へ方のどこに問題があるのだらうか?

率直なる思ひひと言聞きたしと待つのみなるが空しかりけり

フリー

道統継承者を輩出する力いかに

(株)寺子屋モデル 山口秀範 70歳

頭数を揃へる現実的工夫と努力を続けつつ、やがて若き「道統継承者群」を輩出する力を見出さねばならぬと今年も思ふのみです。

今林賢郁理事長「合宿をかへりみて」

合宿を振り返りつつ理事長は面差し和らげ語りかけます
諸講師のみ思ひ易しく解きほぐし我らが前に示し給へり
豊かなる古典持てるは国力と言ひ切りませるみ顔晴れやか
高揚も無力感もありのままそこより始めよと諭しましけり
壇上に獅子吼し給ひし懐しき初代理事長彷彿とする

運営本部

この感激を抱いて新たなスタートを

(若葉建設(株) 池松伸典 63歳)

初日の終はりにはもう随分時がたった様に思へたこの合宿



全体感想自由発表 「日本の歴史を見つめ直し、歴史に基づいた自分の使命について考へた」「日本についてしっかりと理解するために歴史を学んでいこうと思った」「先人の意思を受け止めて歴史を尊重するため、正しい歴史の学び方を身に付けたい」「古典の原点に触れ、自分の感性と照らし合はせつつ、仲間と議論を深められて良かった」「聖徳太子がどんな人にも等しく真心をかけるべきであるといふ思ひを持たれてみたことを知り感銘を受けた。私もそのやうな人になりたいと思った」「国家は歴史基盤があってこそものといふ話が印象に残った」「万世一系という観点から日本をつなぐための先人達の努力が垣間見られてよかった」「講義後の班別研修では、さまざまな年齢層の考へ方を聞いた上、議論を通じて初学者であっても講義の内容について理解を深めることができた」「これまで自分で短歌を詠むことはなかったが、今回の合宿でも刺激を受けた。今後は自分も短歌を詠んで行きたい」等々、参加者が次々に壇上に立ち、三日間の研修で感じた思ひを率直に述べた。

教室もあと閉会式を待つのみとなった。今となってみればたちまち過ぎ去った様にも思へる。講師の方々のお話はどれも感動させられる内容であった。閉会式が終はりではなくこの時の感激を抱いて新たなスタートを切りたい。班員同志の交流が始まりこの合宿教室を契機にして各地に勉強が始まってほしい。つとめて若い人達と連絡をとり合ひまた合宿に参加できなかつた若手の会員とも会つていかなければと思ふ。

たちまちに時すぎゆきて糧多き合宿教室も終はりを迎ふこの糧を心に抱き若きらと学ぶ集ひを作りてゆきたし

運営委員長と事務局長に感謝

(エムジーリース株) 小柳志乃夫 63歳

池松伸典運営委員長有難うございました。
磯貝保博事務局長有難うございました。

大岡弘先輩のご講義を聞きまして
わづかなるゆるびもあらず皇室祭祀のことに壇上に説きたまひ
けり

指揮班

「壁」の認識と本来の姿

(株)茨城新聞社 佐川友一 54歳

「合宿をかへりみて」のご講話の中で、今林賢郁理事長が、「記憶喪失者」といふ言葉を使はれたのに、はつとさせられた。三日間のプログラムの中で、さまざまにご講義・講話が行はれた。それらは、我々一人一人の生き方を「正す」といふ主題で貫かれてゐたが、同時に、その奥には、本来あるべき在り方が、何ものかのために阻まれてゐるといふ「壁」の存在の認識がある。「記憶喪失者」とは、自己の来歴が分からなくなり、さまよつてゐる人といふ意味であらうから、理事長がこの言葉を使つたのは、日本人の現状に対する痛切な批評と言へるだらう。

国家と自分とのつながりと言ひ、日本人としての生き方と言ひ、「かうあらねばならぬ」と教条的に教へられてどうなるものでもない。本来のありやうに気付く、あるいは戻る、思ひ出す。さういふアプローチが求められるだらう。時務、国柄、皇室祭祀、聖徳太子…。各々の先生方が角度を変へて説かれたところも、聴く者一人一人が、自分自身の生活経験と結び付けて、眠りかけてゐたものを呼び覚まし、共感や納

得を伴ふ形で、受け止めるほかないものだったらう。

「日本民族は、日本民族の色どりというものを持つている。
。その民族の色どりと、その人の心の色どりとが一致する
人を、私は純粹な日本人といっている」

全体感想自由発表の中で、女子学生参加者のどなたかが触
れてゐたが、西山八郎先生がご講義の中で紹介された数学
者・岡潔氏のこの言葉が、自分も印象に残った。日本人に美
しい、正しいと感じられる生き方は厳然としてある。どんな
にグローバル化しても、それはあるのだらう。それを無視し
て、われわれの生き方は築けないのではないか。そんな感想
を持った。

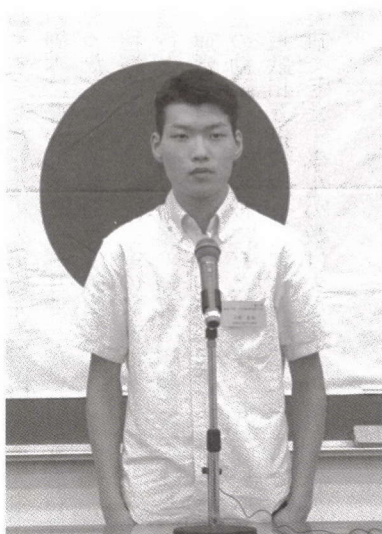
「民族の色どり」と言はれ思ひ当たる節あるやうな記憶まさぐ
る

民族の記憶喪失の悲しみをわが同胞も抱へをるのか
同胞に心重ねるそれすらに壁あることに気付く同胞

森田仁士先輩の短歌導入講義が心に残る

(株)アイセルネットワークス 最知浩一 58歳)

初めて使用する施設での二泊三日の合宿であったが、武澤
副センター長はじめすべてのスタッフの方々のご協力をいた
だき、とても快適な合宿を営むことができた。例年同様学生
の参加は少人数ではあったが、講義、短歌導入講義、全体短
歌相互批評など素晴らしい内容であったかと思ふ。



閉会式 小柳志乃夫副理事長(右)は「全体発表での『国旗掲揚といふ、できるこ
とから始めたい』との言葉が有難かった。各地の短歌の会や輪読会などを通して学
びとつきあひを深めて頂ければと思ふ」と語った。奈良大学文学部一年大津圭吾君
(左)の閉会宣言で合宿教室の全日程は終了した。

初めて短歌導入講義をご担当された森田仁士先輩のご講義はとも印象深く、また素晴らしいご講義だった。ご用意いただいたレジュメもとても分かりやすく、そして一つひとつの説明にご自身の体験や家族との心の繋がりなど短歌を通してわかりやすく説明していただいた。また若くして亡くなられた山根清先輩の硫黄島慰霊祭で奉読された「追悼の辞」や小柳志乃夫先輩との和歌のやり取りのお話を聞き胸が熱くなり、涙があふれてきた。短歌は「人が心と心を通はせ合ふ最高の道具」と言はれる森田さんの短歌に取り組む姿勢がとても印象に残るご講義だった。来年こそかつて同じく学んだ後輩や友人を合宿に誘ひ参加したいと強く思っている。

山根清先輩の硫黄島慰霊祭追悼の辞を読み

あまたなほますらをのみ霊眠りける硫黄島を悼みて言葉ささげし

いたつきの身にはあれどもたびたびと硫黄島の整備に心尽くせり

大君も後の宮もこの硫黄島で戦ひしみ霊なぐさめまつりぬ

吾が先輩の熱き思ひの込められしみ文を読めば涙あふるる

短歌創作導入講義の責を果たし感激

(医療法人豊司会新門司病院 森田仁士 63歳)

短歌創作導入講義を始めて担当した。小野吉宣先輩、松田隆学兄の強力なご支援のおかげで何とか責をはたせ、感謝致

します。ただただ夜久正雄先生、山田輝彦先生、広瀬誠先生の御本に導かれての三ヶ月でした。何よりも私自身のためとなった三ヶ月であったと感謝します。

指揮班として、講義室の設備は整ってをり、全く問題なく進行されました。講義の録音も順調に終へました。

運営委員として、池松伸典委員長より委嘱されながら、学生の勧誘には全く役に立たずで申しわけない限りです。

短歌相互批評で2班に入りましたが、よく心の交流が出来た班でした。学生の数は少なくとも良い学生が集まっています。

園庭に薄墨櫻あり

名木の血脈つぎし櫻木の枝広げをり学びの園に

「歴史基盤」受け継いでいくことの大切さ

(株)エイチ・アイ・エス 高橋俊太郎 41歳

今年の合宿では「歴史基盤」を受け継いでいくことの大切さを学んだと思ひます。

大岡弘先生は「日本の国柄」は歴史的基盤のことではないかと言及されました。今まで、他の講義などでは「日本の国柄」に関するご講義を拝聴してきましたが、これほどはつきりと言及されたことはなかったと思ひます。

また、伊藤哲夫先生も憲法前文を考へる更に前の段階で考へるべきこととして、国家観・歴史観も考へるべきとの教へ

を示されてゐたと思ひます。このご講義を伺ふと、今の政治家は、伊藤哲夫先生の話をどこまで理解して憲法改正論議をしてゐるのか不安になりましたが、あらためて憲法の改正について考へていきたいと思ひました。

最後になりましたが、「学生・若手会員所感発表」の原稿作成発表練習のためご指導いただきました池松伸典運営委員長、小柳志乃夫兄、北濱道兄、久米秀俊兄をはじめ諸先輩方に感謝申し上げます。

春からの気重の種の発表をつひに終へて清々しきかな

椎木政人兄の所感発表

学業の多忙の中に関はずおのれの想ひをまとめけるかな

事務局

ネットの充実を図らねばならない

(埼玉県庁企業立地課 飯島隆史 66歳)

第六十四回と続く合宿教室に参加し、始めて本部のお手伝ひをして、新たな感動を覚えました。参加人数は少なくなつても続けていかなければならないと改めて感じました。

もう一つは、ネットの充実を図らねばならないと思ひます。現代の若者達はインターネットを通じての情報収集が大きい部分を占めてゐます。我々六十才以上の人間とは違ふ情報力

を持つ人間が若い人々であると思ひます。国文研はここに力点をさらに移してゆくべきと感じてをります。

合宿教室の本部にて

なごやかに本部の仕事皆とする単調な作業も楽しかりけり

合宿中に創作された『短歌詠草』
——しきしまのみち——



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多く短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味としてしか受け容れられなくなつてゐるやうです。そのため、この合宿教室に初めて参加する学生青年にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿の日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験していく中で、次第にその意味が把握されていった様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直に歌ひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。言はば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて、「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とのつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。

現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてゐます。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる素朴にして豊かな人間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとつて、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれたに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の森田仁士氏（新門司病院診療放射線技師）により短歌創作導入講義が行はれ、短歌を作る上での基本的ルールの説明がなされました。その後、散策などを経て、夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただししい日程の中で生み出された短歌ではありませんが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠つてをります。提出された短歌は、国民文化研究会会員により選歌され、印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の岸本弘氏（元富山県立富山工業高等学校教諭）によつて、創作短歌全体批評がなされました。講評の中で、作者の一語一語に含まれる心をしのばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じ、互ひに友達心に触れ合ふことができ、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者一人一人に、言ひ知れぬ喜びをもたらすこととなりました。

ここに収録された短歌の数々は、班員の心を寄せ合つて推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取りいただければと、心から祈念する次第です。

短歌詠草 (しきしまのみち) 合宿第一回目の創作作品 (班別相互批評をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録。)

第一班(男子学生)

奈良大学 文 一年 大津圭吾

初短歌言葉出で来す行き詰まり何詠まむかと頭抱へる

中村学園大学 教 一年 佐々木俊治

麗澤の森研修センターにて

豊かなる自然溢るる学び舎に廣池翁の仁愛を思ふ

長崎大学 環境科学 三年 植田祐樹

虫取り網を持つ親子を見し折

よみがへる父と遊びし幼き日感謝の想ひこみあぐるかな

福岡教育大学 教 四年 土井一鷹

野外散策の折に絶えず鳴くせみの声を聞きて

福岡では鳴き声少なくなりたるもここではあまた声聞こえけり

福岡で聞きたる声の少なさに秋の訪れ感じをりけり

然れどもここであまたの声聞きて夏の終り

の遠く思はる

短歌カルタをして

みづからのこころに刻みし先人の歌の聞こえしときぞうれしき

早稲田大学 教 四年 嶋田裕一

柏生涯学習センターで学びて

風そよぎみどり溢るる学び舎は目づと我的心癒せり

九州共立大学 経 四年 内海 徳

カマキリが葉っぱにゆらりぶら下がり今日のご飯はまだかと待つらし

税理士法人あおぞら 北村公一

案じたる雨も上りて友どちと広き芝野を歩く嬉しさ

臆せず己が意見を堂々と述べゆく君のたのもしきかな

次々と意見述べゆき打ち解けし友らのさまを見るは嬉しき

元 熊本市役所 折田豊生

西山八郎大兄の御講義を拝聴して

こまやかにしづかに語る友のみ声おのづか

やかに耳に入りくる

心こめ聖徳太子のみことばをかみしむるごと説きたまふなり

友の説くみふみをともしに辿りつつ太子のみもとにいざなはれゆく

班別討論

もの言はずふみを見つむるひとときも友らのみおもひきしまりたり

ゆくりなくもの言ひ出づる友あればせかるる思ひに耳を傾く

難しき文にま向ふひとときは日頃得がたき宝にこそあれ

散策

こもこもに何思ふらむメモを手に書きつ語りつ友ら歩める

それぞれにおも和やかになりたるが嬉し学びの多くはあらめど

よき友を得て帰らなむ学び合ふ友にまされる友あらざれば

第二班(男子学生)

第二班(男子学生)

全日本学生文化会議 清川信彦

カルタ大会にて

優勝し豪華景品もらはむと学生気分で張り切りて取る

後輩に負けし悔しさバネにして秀歌を広く

学び励まむ

九州工業大学 情報工 三年 桑野雅行
懸命に騒ぎ鳴けども蝉達の去りゆくときを思へばさみし

早稲田大学大学院 基幹理工学研究科 椎木政人

学生発表に名前を呼ばれて壇上に立つ
見つめくれし数多の人に気圧さるれど心ふるひて発表をせむ

長崎大学 教 四年 戸川裕介

久々の青空見れば故郷の佐賀の豪雨の害を案じぬ

のんびりと己が心をふりかえり歌詠む時はとても楽しき

中村学園大学 流通科学 一年 山口大輔

初めての体験多く胸躍り蝉の鳴く音も楽しく聞こゆ

宮崎県弁護士会 砂川高道

小弓手に坂道駆ける子らの背に夕陽照らして輝きて見ゆ

菊地建人

我が国の在り方如何と語り合ひ気付けば夜も早や更けゆきぬ

元二菱地(所)株 青山直幸

西山八郎先生の御講義の後、

班で維摩経義疏を読む

皆共に維摩経義疏を声合はせ読めば心の澄みゆくを覚ゆ

經典を悲喜動乱の人生の体験もとに説かるる太子は

現実の人の心を見つめつつ如来の道を求めたまひき

分別する所無き慈悲を説きたまふ太子の御言葉胸に迫り来

塵勞を猶ほ仏種と為すと述べたまふ深き

み思ひ伝はりて来ぬ

元 福岡県立直方高等学校教諭 小野吉宣

伊藤哲夫先生の御講義の折に

百余り二十五代の一系に御民我等は護られてをり

百余り二十六代の新帝の御即位 寿ぎ万歳

唱ふも

令和なる新帝様の御事に話は及ぶ京都の古寺へ

歴代の天皇方のありやうを本気になられ求め給ふと

熱意込め語りゆくかな新帝を慕ひまつれる御民ぞ兄は

第三班(女子)

佐賀大学 農 三年 伊藤陽奈子

雨多くセミ鳴く声の少なくて秋を感じし我が住む佐賀に

会場を歩みてゆけばセミの声の真夏のごとく響き渡りぬ

福岡教育大学 教 三年 幸地梨香

山内健生先生の講義を受けて

先人の命重ねて護り来し日の本に吾は今生

かされたり

いにしへの人の思ひは残されし言葉にふれてよみがへりくる

國學院大學栃木短期大學 教 一年 佐藤理那

お互ひに思ひ思ひを語り合ひ時は過ぎゆく

またたくうちに

元 北九州市立小学校教諭 久米由美子

久しぶりに合宿に行く我乗せて夫は駅まで

送りくれたり

池松伸典さんの出むかへをいただき

道迷ひ電話をすれば間をおかず出むかへく
れたる友ありがたき

しきしまの道伝へんと語りたまふ師のみ言
葉の胸にせまりく

大成殿本宮 高見澤玉江
学生の思ひ引き出す力足りず吾が未熟さを
省る夜

国柄にそぐはぬ法を無理矢理に押しつけ
られし事ぞ齒がゆき

しきしまの道は難しと怠りし我にあれども
歌心わく

沖繩に真の国柄知らせたき友の思ひの伝
はれと願ふ

祖先らの守り残せししきしまの道に連なり
我は生きるも

すめろぎ 寺子屋モデル 武田真理子
継体帝のゆかりの桜ながめつつ友らと偲ぶ

国のいにしへ
民族の心の色どり十万年変りはせじと師は

宣ひぬ (岡澤先生の言葉より)
緑濃き集ひの庭に国柄を若き友らと語るは

うれし

「われらみな歴史の子供」と宣ひし師の御
言葉に目を開かれり (福田恆存先生の言葉よ

り)

日本生命 野々村美紀子
先人の教へを学び語りあふ友らの笑顔まぶ
しかりけり

元 日商岩井(株) 澤部壽孫
ひと年のはや巡り来て全国の友らと会へる
今日は嬉しき

合宿の運営良かれとみ心をひととせくだき
し友語りゆく (池松伸典運営委員長)

歴史なき国家はなしと獅子吼します大人の
み姿に心打たる (伊藤哲夫先生)

維摩経義疏を友の語るを亡き大人の御霊天
翔けみそなはずらむ (松吉基順先輩のこと

を)
元 皇宮警察本部長 小田村初男
継体帝の植ゑ賜ひたる薄墨の桜承け継ぐ木

の栄えをり

第四班(女子)

主婦 野々村悦子
廣池千九郎記念館にて

創立者の「考は百行の本なり」とふ水茎目
にし父母しのびぬ
ツクツクと鳴く声つづくキャンパスに枯梗

一本可憐に咲きぬ

薬剤師 吉田喜久子
真夜中の雨はあがりて集ふ朝たふとき御製
つつしみて聴く

大空を指して伸びゆく菩提樹は夏の日差し
に緑葉映ゆる
全国仲人連合会鎌倉支部 田中三智子

今生きるわれ 古の人と共に敷島の道歩
みゆきたし

モラロジー研究所 内山慶子
第六十四回全国学生青年合宿教室に

参加して
木々繁る我が学び舎で開かるる青年合宿
故きを温ねて

新しき御代にも伝はる日の本の磐の上に立
つ歴史の国は

継がれこし心のゆりかごとへます我が子育
む父母ありて

(公財) 郷学研修所・安岡正篤記念館 嶋田元子
日本の国柄ここぞ呼び戻し太き背骨の大

八島たれ

廣池千九郎記念館を見学して
麗澤の庭にただよふ道徳科学日の本の国の
礎のごと

宗教と言はずも日本人の心には神を畏るる
習ひ在りけり

華泉書道会 坂本和代
麗澤の樹々の緑は昨日の雨に洗はれ鮮や
かに見ゆ

伊藤哲夫先生のご講義を拝聴して
我が国の歴史失ひし講義聞き何をすべきか
学び深めむ

元 神奈川県立小田原高等学校教諭 原川猛雄
短歌導入講義で長塚節の歌に触れて

蚊帳をつり父母と共に寝ねし日の昔のひと
とき思ひ出される

今にしてしみじみ思ふありがたき親の心の
慈愛深きを

西山八郎先生のご講義を聴きて
わが心一人にあらず父母の思ひをたまはり
育ちし思へば

先人の思ひにつながるうれしさに心豊かに
生きて行きたし

寺子屋石塾主宰 岩越豊雄
み仏の悟り開きし菩提樹の木立は大きな葉
を広げたり

白と紅のさるすべりの花美しく庭に咲きた
り緑に映えて

わが友の教へくれたるシャランの木枝をの
ばして丸く育ちぬ

大木の樗の下で吾が友はベンチに座り歌創
り居り

大聖の孔子の墓のわきに生ふ樗の木の種持
て来て植ゑり

樗の木の太木に触れ大聖の孔子をしのび見
上げてぞ見る

第五班(社会人)

廣池千九郎記念館にて
天本和馬

両親の早く寝ねとふ声かけも聞えぬごとく
に文に向ひぬ

幼きより寝る間も惜みて重ねたる学びはや
がて世に広まりぬ

学校法人中村学園 阿久根 透

廣池千九郎記念館にて
巡りつつ歴史を語る職員を引き継ぐ姿に心
打たるる

国土交通省関東地方整備局 小林忠和
全国学生青年合宿にて無剪定の木々を

ながめつつ
明日のくに思ふ学生見守りてヒマラヤシー

ダー真直ぐに伸びぬ

桜並木再生の話題を聞きて

千九郎の手植えの桜接ぎ木して令和の御代
に繁り咲かしむ

佐藤忠道

中村正則

伊藤哲夫、山内健生両先生の講義を聴き
令和の御代かはりを憶ひて読める歌

譲るをば退くと言ひ換ふる今の世の憲法の
軛の厭はしきかな

かねてから厭ひし憲法の誤りの胸に落つる
は心うれしも

誤りを正す道のり険しくも一歩一歩と刻み
進まむ

令和ライフタスク研究所 細谷真人
麗澤キャンパスでの短歌創作時に

一日の学びを終へし生徒らの笑顔に吾もし
ばし和みぬ

アサヒ飲料(株) 澤部和道
十数年振りの南相駅からの道すがら

久々に通りし道の懐しく昔の面影探して歩
きぬ

六年間通ひ続けし小学校の今も変はらずあ
るは嬉しき

合宿地の廣池学園を訪ねて

この道の赤とんぼ数多飛び交ひし遠き記憶
の思ひ出されぬ

(株) I H I エアロスペース 内海勝彦

麗澤の森中央広場にて

大庭のま中に立てる一本の大きケヤキの
姿雄々しも

大木は枝葉をのばし人々の憩へるほどに木
陰作れり

小山なすごとく繁れる緑葉ゆ降り注ぐがに
蝉鳴きしきる

第六班(国文研)

日本港運協会 久米秀俊

麗澤の森の園内を散策して

育てこし人らのいたつきしのぼるる形よき
木々眺めるにつけ

J A 長野厚生連 市川絢也

椎木政人君の本居宣長「うひ山ぶみ」

の発表を聞きて

学生の発表聞きて我もまた「統ける字び」
せねばならんと

伊佐ホームズ(株) 小柳雄平

森田仁士先生短歌導入講義

しきしまの道の講義を愛づるがにアブラゼ

ミの声すずしく聞こゆ

日本ベーリンガーインゲルハイム

出村信隆

けやきの大樹の前に

あまたなるものの命をはくくめる大樹のご
とく我もありたし

元 神奈川県立高校教諭 中村正和

『天皇の祈りと道』の出版草稿を母に

送りにて

志す我を信じて励めとふ母の手紙に涙こぼ
るる

合宿に参加して

今よりはまことの道をたどらんと友と語ら
ひともに学ばむ

元(株)講談社 藤井 貢

柏合宿にて

木々の間ゆせみ時雨降るたまゆらのいのち
のはかなさ伝へるごとくに

日章工業(株) 藤新成信

西山八郎大兄のご講義を拝聴して
聖王のみ言葉胸に永年を務め来し先輩のみ

姿偲ばゆ

善悪を超えて等しく人を思ふ広きを己が心

ともがな

折尾愛真短期大学 松田 隆

麗澤の森にて親と遊びをる子らの姿のいと

ほしきかな

第七班(国文研)

元 座間市立中原小学校教諭 松本洋治

「短歌創作導入講義」

長塚節のうたを語るを聞きて

青蚊帳をつる母君を思ひ出か言葉つまりて

話進まず

年老いし母のつりたる青蚊帳に寝る節を
吾に重ねてか

吾に重ねてか

母思ふ気持ち大事に生きてある君の心は今
伝はり来

元 三菱重工(株) 島津正數

椎木政人君の発表を聞きて

宣長の「おこたらず」てふ言の葉を引きて
述べけり力強くも

おこたらずはげみつとむとわが友は字びの
道を進み行きをり

○

麗沢の字びの庭を歩むればはや法師蝉の声
の聞えり

日本大学名誉教授 夜久竹夫
あたらしき令和の御世のはじまりに国柄想
ひ心たかぶる

元 マツダ(株) 久々宮 章

森田仁士兄の短歌導入講義を聞きて

短歌つくる喜び語る君の顔は自信にあふれ
輝きてをり

時折は声をふるはせ母上や妻を思ひつ語り
ます君

元 富士通(株) 古賀 智

踏み入れれば櫻櫻もみことなる緑ひろる廣
池の杜

法師蟬の聲は残れど見上ぐればあきあかね
翔ひ網雲も見ゆ

元 川崎重工(株) 山本博賢

佐賀・長崎・福岡県の豪雨禍を

テレビで見えて(令和一年八月二十八日)

大雨の禍がのありさまくりかへし伝ふるテ
レビを妻と見入りぬ

ふるさとに近き筑後の町まちを襲ひし水の
禍のおそろし

「時によりすぐれば民のなげきなり」の实
朝の祈りを思はずつぶやく

禍にあひし人らのくらし幸きくあれとなすこ

ともなくただ祈るなり

秋の雨いたくな降りそ稲穂り取入れ近きと
きを思へば

伊藤哲夫講師の講義を聞きて(八月三
十日)

師の君は「歴史無くして国家無し」忘るな
かれと獅子吼されたり

新しき御代を迎へてわが国の歴史正して基
盤固めよてふ

(株)柴田代表取締役 柴田悌輔

朝の集ひ國旗掲揚の折に

君ケ代の流るるなかをゆるゆると日の丸の
旗掲げあげらる

君ケ代の調べに耳をかたむけつなどか眼の
うるみゆきけり

樹々の間ゆ短き命ふりしぼる日暮しの音に
耳かたむける

講師

元 拓殖大学日本文化研究所客員教授 山内健生

朝食時、食堂から麗澤中学高校生の
登校する様子を見て

一日の始業を前に生徒らは気持ち新たに歩
み来るらむ

思はずもわが若き日の思はれて生徒らの姿
に懐かしき覚ゆ

みどりヶ丘保育園 西山八郎
中央広場にて

走りゆくそのあと追ひかけ幼子のまたかけ
ゆけり姉妹なるらむ

舞ひおちる枯葉とらむと二人してよろこび
いさんでかけ回るなり

元 新潟工科大学教授 大岡 弘

国のもとゐ定むるためにいかばかり努め尽
くしけむ明治の臣達は

元 富山県立富山工業高等学校教諭 岸本 弘

椎木政人、高橋俊太郎と

お若き二人のお話しを聞きて
若きらの声は澄みたり合宿に息吹よみがへ
る思ひして聞く

西山八郎、森田仁士の

お二人の講義を聞きて

若き日の面輪のおもほゆ友ら早むとせや六十とな
りて今語りゆく

さまぐのいたづきもあらむたどり来し
歳とし月をこめて友ら語れり

フリー

国民文化研究会理事長 今林賢郁

「モラロジー研究所」 合宿

この年は縁いただき都辺に近き麗澤とらでに集ふを得たり

この園は四方を緑に囲まれて学ぶによりし励まざらめや

繁りたる樹々の下道わたりゆく風はすがしき真夏日過ぎて

(二回目の作品)

閉会式前の講義室

閉会の前のひととき友らみなベン走らせて感想文綴りゆく

いかならむ思ひ記すかコツコツとベンの音かすかに聞こえくるなり

閉会のときを迎へて今まさに今年の集ひも終りとなりぬ

(株)寺子屋モデル 山口秀範

南柏の合宿地にて

雨続く九州離れて久々に季節を告ぐる蟬の声聞く

近隣の諸国の振る舞ひ見るにつけ憲法正す時急がるる

紛争に荒るるさ中の合宿に加はりてより五十年経るぬ

薄日差す森の小路を行く先のここにも咲けるさるすべりの花

運営本部

若築建設(株) 池松伸典

高橋俊太郎兄の発表を聞きて

前見つめとどまることなく語りゆく友の姿のたのもしきかな

わづかなる時の間あいだの発表を励みつとめてこの日迎へけむ

エムジーリース(株) 小柳志乃夫

伊藤哲夫先生のご講義に、醍醐寺を

訪れられし皇太子殿下(当時)のお話を
お聞きして

ご祖先の民の苦をうれひ写しましし経をみたまひき夜更くるまで

ご祖先の書を見そなはず大君の大御姿を偲びまつりき

天災地異を自らの不徳とかしこくもおぼしめされし世々のすべらぎ

○

我が兄の編みし百人一首に若きらの楽しむ

姿見ればうれしも

元(株)アルバック 北濱 道

椎木政人君の発表を聞きて

「うひ山ぶみ」に「つとむ」の言葉繰り返し説かれてあるに気付かされけり

答へなき問ひ積み重ね新たな工学求むる
み思ひ強し

(二回目の作品)

班別研修を想ひて

むらぎもの心をつくし説きませる講師のお言葉如何に聴きけむ

班友とかたみに心傾けつつ思ひの丈を語り
ひまさむ

胸内に沁みたる言の葉一つだに残りてあらばと思はるるなり

指揮班

(株)茨城新聞社 佐川友一

短歌創作導入講義の森田仁士さん

長塚節の母思ふ情こもる歌に感極りて声詰らすも

(株)アイセルネットワークス 最知浩一

合宿二日目の朝の集ひにて

虫の音や鳥のさへづりくさくさ集ひの庭

にひびきわたれり

朝つゆの残れる庭にみ友らと集ひし朝の清しかりけり

医療法人豊司会新門司病院 森田仁士
講義開始前、山根清大兄を偲びて

君去りてはや十四年變りなく合宿教室は今年も開かる

君がこと語りてゆかむ天降りして導き給へ
足らざる我を

師の君に学びし道を新しき友に伝へむ心つ
くして

(株)エイチ・アイ・エス 高橋俊太郎
学生・若手会員所感発表にて

落ちつけと自分に対し思へども流れる汗は
なかなか止まらず

事務局

国民文化研究会事務局長 磯貝保博
事務局にて

足らざるを補ひくれて恙無く仕事進みて有
り難きかな

初めての施設の中を戸惑ひつ歩き回りにて
焦れり

二元 東急建設(株) 奥富修一

キャンパスを散策して

アカネ飛び風の涼しき麗澤の森の名木探し
つつ歩む

小さくも丸き実つけし南国のヒトツバタゴ
を珍しと見つ

(※ヒトツバタゴは対馬に群生する落葉樹)
(二回目の作品)

大岡弘先生のご講義の司会を担当し
体操をする

参加者の体をほぐす体操を我はうながす講
義の前に

疲れたる身をも心も目覚めしめ友の講義を
共に聴きなむ

壇上に両手をつきて語りゆく友の横顔まぶ
しくも見ゆ

埼玉県庁企画立地課 飯島隆史
本部にて働きて

縁の下で助くる力次ぎ次ぎにあらはれたる
はありがたきかな

合宿地に寄せられた歌

久留米市 合原俊光

第六十四回「全国学生青年合宿教室」

を偲びつゝ

みおやらの遺したまひし道たどり学びゆく
集ひ遠く偲べり

日の本の明日思ひつゝおのがじし思ひのた
けを語らひまさむ

われもまたつながり生きむ若きらの胸に息
づく熱き思ひに

あとがき

寒さも一入身に染みる時節となり、令和元年も、間もなく暮れやうとしてをります。皆さまにはその後いかがお過ごしでしょうか。

熊本県葦北郡芦北町「県立あしきた青少年の家」での五月の合宿教室（熊本会場）、八月末〜九月初頭に行われました千葉県柏市「モラロジー研究所・柏生涯学習センター」での合宿教室（主会場）から、早いものでそれぞれ七ヶ月、四ヶ月ほどを経過してをりますが、この度やうやく「感想文集」を皆様のお手元にお届け出来ることとなりました。

この感想文集は、両会場で実施されました「第六十四回全国学生青年合宿教室」での講義のあらましと、それぞれの研修の最後に参加者に『走り書き』していただいた感想文、合宿中に創作した短歌とを、前者を「あしきた合宿研修感想文集」から転載、編集にて、後者を提出原稿の編集にてまとめたものです。熊本会場の感想文集を編集された「あしきた合宿研修事務局」の皆様感謝申し上げます。又、文集の転載には、折田豊生さんにお世話になりました。

以下後者の編集過程について述べます。

編集は、各班の班長さんに、班員の感想文と二回目の創作短歌を添削・編集していただく作業から始まりました。参加者一人一人のお心が籠った文章、短歌を読み返し、文字を正確に辿る作業は、神経を使ひ、時間を要しますが、お一人お一人の瑞々しい心の動きに触れ、味はへる貴重な機会でもありました。文集の編集に臨み、採った方針は以下の通りです。

(一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本としましたが、時に長いものについては執筆者のお心のうちが最もよく表れてゐる箇所を摘録し、また文意の明瞭ではない部分については、原文のニュアンスが損はれないやう慎重に加筆し、文章の眼目を汲み取った上で表題を付けました。「かなづかひ」については、原文に従ひ、現代仮名遣ひ、歴史的仮名遣ひどちらかに統一してゐます。漢字及び文法上の誤りについては訂正を施してをります。

(二) 「短歌」について

二回目の短歌につきましては、感想文の末尾に収載しました。感想文同様、文法上の誤りなどは訂正してゐます。

(三) 参加者の肩書について
熊本会場は在所を記し、主会場は勤務先か学校と感想文には満年齢を付してゐます。一見して奇異な感じを与へるかも知れませんが、これは、それぞれの編集方針が若干異なることによるもので、編集者としては、双方の方針を尊重し、敢て統一を図らずそのまましました。

本集の作成に当たり各班のまとめを班長にお願ひしましたが、他に伊藤俊介、横川翔両氏が原稿の打ち込みを快くお引き受け下さいました。カメラ・レポート、扉の写真は、(株)アイセルネットワークス 最知浩一さんにお世話になりました。

この文集を手に取り、合宿で行はれた講義や班別研修での一コマ一コマを振り返っていただき、読後には、班長、班の方々に一筆御礼状を差し上げていただければと思ひます。これを機に、班友との交はりを結び深め、各自の学問の基を固めていただければ幸いです。

(佐川友一記)

第六十四回「豆宿教室」(熊本公塲・主会場)感想文集

非売品

令和元年十二月二十五日発行

編集兼発行者

公益社団法人 国民文化研究会

理事長 今林賢郁

編集 佐川友一・北濱道

東京都渋谷区東一十三丁目四〇二号

〒一五〇〇〇一一

電話 〇三―五四六八―六二三〇

FAX 〇三―五四六八―一四七〇

